



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

博士學位論文

# 徳富蘆花の初期作品考察

—〈自然三部作〉の成立背景と作品世界を中心に—



濟州大學校 大學院

日語日文學科

細見典子

2015年 2月

# 徳富蘆花の初期作品考察

—〈自然三部作〉の成立背景と作品世界を中心に—

指導教授 金 鸞 姫

細 見 典 子

이 論文을 文學 博士學位 論文으로 提出함

2014年 12月



제주대학교 중앙도서관  
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

細見典子の 文學 博士學位 論文을 認准함

審査委員長 \_\_\_\_\_  
委 員 \_\_\_\_\_  
委 員 \_\_\_\_\_  
委 員 \_\_\_\_\_  
委 員 \_\_\_\_\_

濟州大學校 大學院

2014 年 12 月

# An exploration of the early works by Roka Tokutomi :

An background of establishment and Oeuvres of the Natural Trilogy

Noriko Hosomi  
(Supervised by professor Nan-Hee Kim)

A thesis submitted in partial fulfillment of the requirement for the  
degree of Doctor of Literature.

2014. 12.

 제주대학교 중앙도서관  
This thesis has been examined and approved.  
JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

2014. 12.

Department of Humanities  
GRADUATE SCHOOL  
JEJU NATIONAL UNIVERSITY

## <目次>

I. 序論	1
1. 先行研究検討	1
2. 研究テーマと研究方法	4
II. <自然三部作>の成立背景	6
1. 横井小楠の影響	6
2. 幼少期のトラウマ	10
3. キリスト教の受容	13
1) 熊本洋学校	13
2) 同志社英学校と入信	14
4. 民友社	17
1) 激動期における民友社の活動	17
2) 民友社時代の蘆花	19
5. トルストイ	22
1) トルストイへの傾倒	22
2) トルストイからの脱出希求	25
6. 画学修業と西欧ロマン主義	27
1) コロー	27
2) ワーズワース	29
III. <自然三部作>の構成と特徴	33
1. 『青山白雲』	33
1) 構成	33
(1) 小説及び小品：4篇	33
(2) 史伝：4篇	35
(3) 散文詩：2篇	38

2) 特徴	39
3) 「青山」と「白雲」の持つ意味	40
2. 『自然と人生』	42
1) 構成	42
2) 特徴	44
(1) 小説：「灰燼」	44
(2) 散文詩：「自然に対する五分時」「湘南雑筆」	45
(3) 小品：「写生帖」	49
(4) 評論：「風景画家コロオ」	50
3) 自然と人生の関係	51
3. 『青蘆集』	52
1) 構成	52
(1) 随筆：4篇	53
(2) 小説：4篇	55
(3) 紀行：4篇	57
2) 特徴	59
3) 青蘆の象徴	60
 <span style="font-size: 1.2em; font-weight: bold;">제주대학교 중앙도서관</span> <small>JEJU NATIONAL UNIVERSITY LIBRARY</small>	
IV. <自然三部作>の作品世界	62
1. <自然三部作>に見られる水の空間とタナトス	62
1) 序	62
2) 「夏の夜かたり」と海での死	63
3) 「数鹿流の瀧」と滝での死	65
4) 「漁師の娘」と湖での死	67
5) 「除夜物語」と洪水による死	69
6) まとめ	73
2. <自然三部作>に見られる自然認識	75
1) 序	75
2) 『青山白雲』 — 「序」と「漁師の娘」	75
(1) 「序」に見る自然への開眼	75

(2) 「漁師の娘」に見る自然児への賛美.....	78
3) 『自然と人生』—「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」.....	81
(1) 「自然に対する五分時」に見る自然の擬人化.....	81
(2) 「自然に対する五分時」に見るヒューマニズム.....	83
(3) 「湘南雑筆」に見る自然の客観描写.....	84
4) 『青蘆集』—「吾初恋なる自然」に見る自然児宣言.....	86
5) まとめ.....	88
3. 「灰燼」について.....	90
1) 序.....	90
2) 作品の時代背景—西南戦争.....	91
3) 登場人物の対立構図.....	94
4) 自然による裁き.....	97
5) まとめ.....	100
4. 「漁師の娘」について.....	101
1) 序.....	101
2) お光の象徴性.....	102
3) 人間事のはかなさ.....	106
4) 自然への回帰.....	106
5) まとめ.....	109
V. 結論.....	111
[参考文献].....	114
[Abstract].....	119
[한국어초록].....	123
[부록] 年譜.....	126
引用文参考訳文.....	130

# I. 序論

## 1. 先行研究検討

徳富蘆花(1868～1927：本名健次郎：以下、蘆花)は明治文学において、自然詩人として当時の文壇や読者に名を馳せた文学者である。儒教思想を持つ豪農の生まれで、17才でメソジスト教会に入信<sup>1)</sup>し、晩年はトルストイの影響で半農生活を送った。明治・大正時代を生き、社会的な眼目をもって批判的知識人の役割を果たしてきた。日清・日露戦争以後、帝国主義へ膨脹する日本の将来を案じ、日本の反省を促した類いない文人である。

自然詩人としての名声を確実なものにした『自然と人生』(1900)は、1927年までに373版を発行し、50万部を越える大ベストセラーとなった作品であり、その斬新で独創的な自然描写のすばらしさは多くの研究者らによってとりあげられ、島崎藤村、徳田秋江、相馬御風、中村星湖らにも影響を与えた(中野:1984b:40)。近年では司馬遼太郎を蘆花の影響を最も強く受けた知識人の一人とする高橋(2004b:8)の説もあり、今後さらなる研究が進むことが期待される。戦前の中学校教科書に『自然と人生』の一部をはじめとする作品が収録<sup>2)</sup>されていたことから、著名な国民的作家の一人であったことがわかる<sup>3)</sup>。

日本での研究を戦前・戦後に分けてみることにする。まず、戦前においては蘆花存命中に出版された『徳富蘆花の哲学』<sup>4)</sup>、『徳富蘆花と其哲学』<sup>5)</sup>がある。没後直後には『蘆花全集全20巻』<sup>6)</sup>が刊行された。続いて『徳富蘆花:検討と追想』<sup>7)</sup>、『小説徳富蘆花』<sup>8)</sup>、蘆花の弟子であった前田河広一郎<sup>9)</sup>の『蘆花伝』<sup>10)</sup>、『蘆花の芸術』<sup>11)</sup>、など

1) 母久子の導きにより、熊本三年坂にあったメソジスト教会で洗礼を受ける。長姉山川常子とその娘、次姉河田光子、三姉大久保音羽子、蘇峰の妻の兄である倉園秀雄も洗礼を受けた。熊本には1876年に熊本洋学校が置かれ、教師ジェーンズの影響によって熊本バンドが結成されるなど、キリスト教の基盤があり、洋学校閉校後にも広まっていた。

2) 蘆花の作品が中等国語教材として採録されるようになったのは1902年ころからである(橋本:1992)。

3) 戦後の教科書に蘆花の作品がほとんど見られなくなっているのは、文体の問題もあると思われるが、戦後教育において、天皇中心主義といえる蘆花や、戦犯となった兄蘇峰のナショナリズムとの関連も大きな理由ではないかと思われる。

4) 現代思潮研究会(1914)『徳富蘆花の哲学』二松堂書店出版。

5) 覆面冠者(1914)『徳富蘆花と其哲学』嵩山房出版。

6) 徳富蘆花(1928～1930)『蘆花全集全20巻』蘆花全集刊行会。

7) 蘆花会編(1936)『徳富蘆花:検討と追想』岩波書店。生前、蘆花と親交のあった人々が記している。



がある。

戦後、旺盛に明治の近代文学の研究は進んだが、蘆花文学の研究は1960年代までは目立ったものはほとんどなかった。限られた作品に止まっていたが、1970年代に入ってから事情が変わる。戦後の蘆花研究の最も大きい成果として、中野好夫の評伝『蘆花徳富健次郎』<sup>12)</sup>が挙げられる。そこには蘆花の一生に関する詳細な記録が残されている。吉田正信も「徳富蘆花におけるワーズワースの受容—「哀音」に注目して—」<sup>13)</sup>をはじめとして、作家論および作品論を現在に至るまで精力的に執筆している。また、森一は「徳富蘆花とワーズワース」<sup>14)</sup>でワーズワースの影響について考察している。

トルストイとの関係に関する研究には、ア・イ・シフマンの『トルストイと日本』<sup>15)</sup>、阿部軍治の『徳富蘆花とトルストイ』<sup>16)</sup>、峯岸英雄『徳富蘆花の思想源流』<sup>17)</sup>があり、吉田の「徳富蘆花はトルストイに何をみたか—評伝執筆とヤースヤナ・ポリャーナ訪問」<sup>18)</sup>ではトルストイ文学の影響やツルゲーネフのロシア文学との比較がなされている。また、金子孝吉が「徳富蘆花による伊香保の自然描写について—『自然と人生』『自然に対する五分時』を中心に」<sup>19)</sup>で志賀重昂<sup>20)</sup>の『日本風景論』<sup>21)</sup>やラスキンからの影響に関する研究をするなど、さまざまな観点から研究がなされてきた。蘆花の故郷にある熊本県立大学においては2008年に蘆花研究プロジェクトがはじめられ、現在も引き続き研究されている。

一方、韓国における蘆花研究は韓国近代文学界の方から『不如帰』の研究がなされていた。ちなみに蘆花の翻訳本は『不如帰』<sup>22)</sup>『自然と人生』<sup>23)</sup>『黒潮』<sup>24)</sup>など一部の作

8) 鐘田研一(1937)『小説徳富蘆花』第一書房出版。

9) 前田河広一郎(1888~1957)は蘆花の弟子でプロレタリア文学者。物心両面で蘆花の援助を受け、渡米経験のある人物である。

10) 前田河広一郎(1938)『蘆花伝』岩波書店。

11) 前田河広一郎(1943)『蘆花の芸術』興風館出版。

12) 中野好夫(1984)『中野好夫集(9~11)蘆花徳富健次郎第1~3部』筑摩書房。

13) 吉田正信(2001)「徳富蘆花におけるワーズワースの受容—「哀音」に注目して—」『国語国文学報(59)』愛知教育大学国語国文学研究室。

14) 森一(1985)「徳富蘆花とワーズワース」『相模女子大学紀要(49)』相模女子大学研究委員会編。

15) ア・イ・シフマン・末包丈夫訳(1966)『トルストイと日本』朝日新聞社。再引用。

16) 阿部軍治(2008)『徳富蘆花とトルストイ改訂増補』彩流社。

17) 峯岸英雄(2003)『徳富蘆花の思想源流』エム・コーポレーション。

18) 吉田正信(1996)「徳富蘆花はトルストイに何をみたか—評伝執筆とヤースヤナ・ポリャーナ訪問」『異文化への視線』名古屋大学出版会。

19) 金子孝吉(2005)「徳富蘆花による伊香保の自然描写について—『自然と人生』『自然に対する五分時』を中心に」『滋賀大学経済学部研究年報12号』滋賀大学経済学部編。

20) 志賀重昂(1863~1927)は地理学者、政治家、ジャーナリスト。同志社英学校に在学したことがある。

21) 志賀重昂(1894)『日本風景論』政教社。

22) 趙重桓が日本で訳したものが警醒社から出版(1912)され、その影印本をパクジニョンが編集した。박진영

品に限られており、本格的な研究活動は未踏のままである。その理由として、仮名交じりの漢文の読みづらさと、自然主義以前の文学であることが考えられる。現代の要求する文学のレベルから見つめると、文学作品としての完成度の足りなさが窺える。しかし、自然主義文学が日本に定着する明治40年以前の過渡期に書かれた〈自然三部作〉の文章は、蘆花及び、当時の作家らの努力と苦悩を垣間見ることができる。二葉亭四迷の『浮雲』と翻訳物の『あひびき』、『めぐりあひ』に非常な感銘を受けた蘆花<sup>25)</sup>は、文章のスタイルを練磨するために、外に出て写生修業をした。事実を直視しながら自然をありのままにスケッチして表現しようと努力した成果が〈自然三部作〉に現われている。安定した近代文学に移行する過渡期的文体として、蘆花の作品を見つめることが正当である。

また韓国での研究が進んでいない理由として、天皇中心主義という時代的イデオロギーの影響が見られる蘆花の作品への情緒的な異質感も挙げられよう。

韓国における日本近代文学研究は限られた一部の作家に集中しているのが現実である。蘆花は韓国内では殆んど研究されていない作家であると言える。〈自然三部作〉に関する研究は現在のところ見られない。拙稿「〈自然三部作〉に見られる水の空間と死」<sup>26)</sup>と

(2006)『불여귀』보고서.

23) 진웅기訳(2003)『자연과 인생』범우사. 原作の一部を抜粋して翻訳され、順不同。原作には収録されていない蘆花の随筆も「写生帖」の中に6編含まれている。題名が変更されているものもある。

「自然に対する五分時」より、蘆花/朝霜/山百合/大河/雑木林/檐溜/春の悲哀/大海の日出/相模灘の落日/空山流水/自然の声/栗/梅/風/自然の色/海と岩/榛の木/薄/良夜/晩秋初冬(原作では「写生帖」に収録。)/香山三日の雲(一)(一部抜粋)/香山三日の雲(三)(一部抜粋)/五月の雪/相模灘の水蒸気。「写生帖」より、哀音/可憐児/夏の興/憎むと枯れる(原作は『みみずのたわごと』)/断崖/炬燵(原作は『蘆花全集第9巻』)/五分時の夢(原作は『青蘆集』)/蝶の語れる(原作は『みみずのたわごと』)/国木田哲夫兄に与へて僕の近状を報ずる書(原作は『蘆花全集第19巻』)。

「湘南雑筆」より、元旦/冬威/霜の朝/伊豆の山火/霽日/初午/立春/雪の日/雪の明くる日/初春の雨/初春の山/三月節句/春の海/彼岸/花月の夜/新樹/蒼々茫々の夕/梅雨の頃/夏/立秋/迎火/舟を川に浮ぶ/夏去り秋来る/秋分/秋漸く深し/富士雪を帯ぶ/凧/凧の後/月を帯ぶ/白菊/暮秋/透明凜然/時雨の日/寒月/寒樹/冬至/寒星/歳除が収録されている。

24) 손동주 외 역(2010)『흑조』부경대학교출판부. 『흑조』に関する論文は서은선·윤일(2009)「일본 사회소설 『흑조(黒潮)』와 한국 신소설 『은세계(銀世界)』 비교 연구(1) - 장르 특성과 서사 구성」『동북아 문화연구(21)』동북아시아문화학회. 서은선·윤일(2010)「『은세계(銀世界)』와 『흑조(黒潮)』 비교 연구(2)」『동북아 문화연구(25)』동북아시아문화학회.

25) 蘆花は印度洋で二葉亭が客死した記事を読んで、以下のように回想している。「馬琴物から雪中梅型のガラクタ小説に耽溺して居た余に、『浮雲』は何たる驚駭であつたらう。余ははじめて人間の解剖室に引ずり込まれたかの如く、メスの様な其筆尖が唯恐ろしかつた。それからツルゲーネフの翻訳「あひびき」を国民の友で、「めぐりあひ」を都の花で見た時、余は世にも斯様な美しい世界があるかと嘆息した。繰り返へし読んで足らず、手づから写したものだ。」(『蘆花全集第9巻』:385)。このように二葉亭の文章は蘆花をはじめとする当時の作家らに影響を与えたことがわかる。

26) 細見典子・金鸞姫(2012)「〈自然三部作〉に見られる水の空間と死」『韓日語文論集(16)』한일일어일문학회.

「＜自然三部作＞に見られる自然認識」<sup>27)</sup>が全てである。こうした点から見て、本研究は蘆花研究未開地をはじめて開拓した点に於てそれなりの意義があると言えよう。

## 2. 研究テーマと研究方法

本研究は蘆花の初期＜自然三部作＞を中心にその成立背景と自然描写の特徴に対し、多角的な考察を試みたものである。蘆花の＜自然三部作＞とは『青山白雲』(1898)『自然と人生』(1900)『青蘆集』(1902)を云い、約2年おきに出版されてきた習作時代の一連の作品集である。これらは初版『蘆花全集全20巻』(1928～1930)の第3巻に収められた。本稿はこれらの3作品をひとつの流れとして捉えている。習作期の作品であるだけに、これらの作品の中には蘆花の精神の原型が複雑な形でちりばめられている点に注目し、以後の作品との関わりについても言及しながら考察していきたい。

本稿はまず、蘆花の文学の土壌となった成長環境との影響関係を調べてその精神世界形成を考察する。その方法はまず伝記的考察を取る。儒教的な家庭環境と幼少期のトラウマ、青年期におけるキリスト教の受容、民友社での記者生活、そしてトルストイへの傾倒と脱出希求などについて蘆花自身の記述と当時の状況に関する資料を用いて詳しく調べることにする。続いて＜自然三部作＞の成立と緊密な写生修業と西欧浪漫主義との関わりを調べることにする。このような作業を通して表れた結果をもって個別作品を分析するという手順を踏むことにする。

尚、＜自然三部作＞のテキストは初版『蘆花全集第3巻』(1929、蘆花全集刊行会)を用いた。本稿で扱う蘆花の作品は初版『蘆花全集全20巻』(1928～1930)を参考とした。加えて、＜自然三部作＞の文体は近代文学が要求する言文一致文章としては不安定であるため、難解な文章は韓国の読者の理解を助けるために、筆者による参考訳文を付録に添えた。その他の引用文は必要と思われる部分に注釈をつけることにする。研究方法としては伝記・文献に基づいた実証主義方法による作家論を導出する。また作品論においては文学作品を精読して得られる印象をテーマと結び付ける印象主義批評方法も援用する。

\* 引用文の旧字体は新字体で表記した。原文のルビは難解なものにつけた。

<sup>27)</sup> 細見典子・金鸞姫(2014)「＜自然三部作＞に見られる自然認識」『日本文化研究(50)』동아시아일본학회.

\* 蘆花の主な文学活動と特記事項は付録の年譜にまとめた。



## Ⅱ. <自然三部作>の成立背景

### 1. 横井小楠の影響

熊本県葦北郡水俣郷における蘆花の生家、徳富分家は郷土格<sup>1)</sup>の豪農として地域の支配層であった。徳富家には女子ばかり4人生まれ、家を嗣ぐ男子を生むことのできなかった母久子は、離縁の危機にあった。しかし、1863年1月、長男の蘇峰(本名・猪一郎)が誕生したことで母は徳富家にとどまり、次いで二男(生後まもなく死亡)、三男の蘆花が誕生した。長男は男子を重んじる家庭内においては「公子」であり、末っ子の蘆花は「私子」であった(中野:1984b:35)。蘇峰によると「世間並では、一年を一年として数へても、此子だけは時間に拘らず、早く成人せしめたいとして、予に向かって年齢不相応の教育を施した。(中略)徳富家出産の歴史から云へば、予で幕を閉ぢ、蘆花弟の生れたのは、むしろ意外の儲けものであった。しかも末子であったから、祖父君にしろ、両親にしろ、云はば一家のペットとして、鍾愛<sup>2)</sup>の焦点となったが、それ以上のことはなかった。」(蘇峰:1997:85)とある。さらに「両親に対した予に対して、若し不平があったとすれば、己れを軽視したと云ふ一点であつたかも知れぬ。」(同書:86)という見解は説得力がある。

また、中野(1984a:34)は地方豪農の上流階級という出自に注目している。蘆花が一時期トルストイヤンとして生きたり、平民主義を唱え、社会主義者を標榜したりしたが、その意識の根底には常に豪農的意識があったと述べていることは核心を突いている<sup>3)</sup>。

「本来天才型であって、何事も地道に暮らす事は好まず、その時々その折々の気持ちや、発作にて、やつてのける風があつた」(蘇峰:1997:87)という蘆花の性格は、『不如帰』や『灰燼』の創作の動機にも見られる。哀れな女性や若者の逸話を聞いて、「これこそ小説だ」という閃きが小説になった。しかしその性格が災いすると、『黒潮』<sup>4)</sup>や『十年』<sup>5)</sup>のように、勉強不足や気が乗らないことを理由に中途作品が途切れてしまった<sup>6)</sup>。SPA

1) 帯刀は許されるが、知行取りではない士分であった。

2) 大切にしておかざること。

3) 後に父の死から3年間の自己閉門による面会謝絶で兄をはじめ、徳富家とのかかわりを切ろうとする目的もあったが、死の直前までやはりこの「殿様の意識」は変わることはなかった。徳富の「富」の字も、蘆花は徳富家と区別するために「富」の字を使用した。

4) 1902年『国民新聞』に連載されたが、不評であった。1903年に第一篇が黒潮社から刊行された後中断。

ルタ式の教育を受けた長男とは全く正反対に、わがままで放任されていたのが少年時代の蘆花であった。成長するにつれて、彼はより強く自由を愛し、権力によって虐げられる弱者たちに愛情が注がれていった。

儒教的家風は父一敬の書からもうかがえる。一敬は横井小楠<sup>7)</sup>の第一弟子であり、蘆花の結婚時に「言有物行有恒」<sup>8)</sup>の書を送った。また、一敬が小楠から贈られた「骨肉重於恩情、兄弟先、夫婦後」<sup>9)</sup>と書かれた掛け軸も譲っていた。1895年の夏、これらの書は蘆花によって切り裂かれてしまったが、このような儒教的教えに結婚後も影響を受けていたことがわかる。

蘆花は『富士』において父に関する記述を残している(『蘆花全集第16巻』:48～49)。一敬は蘆花の生れた1868年、47歳になってようやくその父親から家督を譲られた人物で、それまでの精神的苦痛は非常に大きかったという。師の小楠が一敬よりも弟達を認めたように、徳富家では一敬は長男であったが、祖父は二男を非常に愛した。二男夫婦が一女を残して疫痢で亡くなった後には、その忘れ形見の娘を一敬の長女として養女に迎え、一時は婿をむかえて家を嗣がせようとしていた。しかし長男の蘇峰が生れて、養女は嫁した。体の弱かった父を祖母が愛情をもって長男の位置を守らせた<sup>とあるが、</sup>母親(蘆花の祖母)の病氣快復を願って一敬が熱心に八幡詣をしたという。八幡神<sup>10)</sup>は日本歴史書の古事記に登場する応神天皇である。応神天皇は母親の神功皇后の助けによって60歳でやっと天皇になった人物である。母親思いの孝行息子であると同時に、具体的に天皇を信仰していた父の天皇を敬愛する心情が、蘆花に影響を与えたことがわかる。蘆花は明治元年生れであったので、明治天皇を慕う思いはより強かった<sup>11)</sup>。

蘆花は祖父や父親に可愛がられ、兄が厳しくされることはあっても、蘆花は一度もなかつ

5) 1913年6月8日から21日まで『国民新聞』に連載されたが、その後中断された。この中断が兄弟の溝を深めた。

6) 『黒潮』の中絶にはいくつかの要因が考えられる。まず題材のテーマを与えたのが蘇峰であり、主人公の東晋は蘇峰に似ていたことから蘆花が主人公を愛せなかったためだとする前田河の説がある(前田河:1938:408)。また、続いて書くことによって、天皇制の批判につながる作品になることが想定されたためとも捉えられる。

7) 横井小楠(1809～1869)は儒学者、政治家。妻は蘆花の母久子の妹の津世子。

8) 修行すると、でたらめなことは言えない。行動も欲望や感覚のままに動くのではなく、不変のものをもつ、という意味である。『周易』の「君子以言有物、而行有恒」である。

9) 「妻をもっても兄弟は仲よく」という意味である。兄に対して反抗心を持っていた蘆花にとっては当てつけと受け取れた。

10) 清和源氏をはじめ全国の武士から武運の神「弓矢八幡」として崇敬を集めた。

11) 「余は明治の齡を吾齡と思ひ馴れ、明治と同年だと誇りし、恥おもして居た。陛下の崩御は明治史の巻を閉じた。明治が大正となつて、余は吾生涯が中断されたかのように感じた。明治天皇が余の半生を持つて往つておしまひになつたかのように感じた。」(『蘆花全集第9巻』:422)といった感想を残している。

た。その性格は男勝りの母親より小心者で優しい父親に似ており、蘆花を「馬鹿扱い」する母親より父親に甘えた。父の死後「余は父の子」、「尊翁は余の有になつた」、「尊翁はきつと屹度自分の為に死んでくれた」、「尊翁はまた長子の猪一郎を憚り、末子の余を愛した」、「父は死なぬ。自分に生きて居る」と日記に書いた<sup>12)</sup>。如何に父が蘆花を愛していたか、そして蘆花も父親を愛していたかがわかる。

蘆花が平民主義を掲げ、自家の社会主義者であるとしながらも、幸徳事件<sup>13)</sup>での抗議にみられる『謀叛論』と、難波大助事件<sup>14)</sup>における助命嘆願に見られるような天皇の慈悲にすがって助命を求める態度には、蘆花の出自と大いに関係があるという中野(1984a:35)の論は、説得力のある見解である。ここには徳富家、特に父の影響を見ることができ、蘆花が自分を可愛がってくれる父親に甘えたように、天皇にも父親の面影を重ねていた側面があったと思われる。

後日、熊本バンド<sup>15)</sup>に参加してキリスト教の信仰を表明した蘇峰に対して、一敬が棄教をせまった事実がある。朱子学の家族規範からみると、キリスト教の「神の前には人はみな平等」という教えは、相容れないものであった。しかし一敬は1907年86歳の時、横井小楠門下の中でただ一人、洗礼を受けた。入信の動機は「孔子教とキリスト教が同じ一つのものであること、キリスト教でいう所の靈魂不滅説が納得がいったこと、この二つである」(今中:1971:14)と述べている。その事実から小楠の教えとキリスト教の教えは通じるものがあったということがわかる。

横井小楠(1809～1869)は熊本藩士で幕末の思想家である。小楠は1843年、私塾<sup>16)</sup>を開き、徳富一敬、矢嶋源助などの弟子を教育していたが、1855年、沼山津村<sup>17)</sup>に転居した後は自宅を四時軒と名付けて塾を開き、弟子たちに講義をする生活を送っていた<sup>18)</sup>。蘆花の母の妹のつせ子を後妻に迎えた。1868年、明治新政府に迎えられたが、キリスト教を信奉す

12) 『蘆花日記(一)』19～37頁参照。父が亡くなった1914年5月26日から6月11日にかけて、時あるごとに父を回想しながら書き留めている。

13) 明治天皇暗殺計画に関与したとして、1910年5月25日に幸徳秋水をはじめ、多数の社会主義者・無政府主義者の逮捕・検挙が始まり、1911年1月18日に死刑24名、有期刑2名の判決。1月24日と25日にかけて12名が処刑された。

14) 共産主義者の難波大助(1899～1924)が虎ノ門事件で当時の摂政・裕仁を暗殺しようとしたテロ事件。

15) 熊本バンドは札幌バンド、横浜バンドと並んで日本の明治のプロテスタント派の3つの源流のひとつである。花岡山バンドともいう。バンドとは結盟の意味。

16) 1847年に小楠堂と命名された。

17) 現在の熊本市東区沼山津。当時は静かな村であった。

18) 幕末に吉田松蔭や坂本竜馬が訪れたこともあり、当時において著名な思想家であった。

るとの理由で1869年に京都で暗殺された。

小楠は「堯舜三代の治」<sup>19)</sup>を理想としているが、政治だけではなく教育にも深い関心を持っていた。「学問は詞章記誦の虚学であつてはならぬ、日常生活に切実な己の為人の為にする実学でなくてはならぬ」(『蘆花全集第15巻』:65)という教えであり、その弟子達は実学党<sup>20)</sup>を形成していった。さらに学問とはただ師の教えを学ぶだけではなく、自分の頭で考えなければならないのであって、それが天下の政治にむすびつくという。西洋ではキリスト教が政治、学問、経済の分野において市民のために役立っているが、これを「堯舜三代の治」に当てはめていた。「西洋文明の粋を集め、富国の策とすべきである」という小楠の思想は、彼の死後、熊本において1870年、実学党政権によって実践されることになるのである。

蘆花は『青山白雲』「沼山津村」で小楠について記している。蘆花の横井小楠に関する記述で最も古いものでは「孤墳之夕」<sup>21)</sup>があり、『青山白雲』「沼山津村」では小楠について、同じく「南禅寺」では小楠の妻(注:蘆花の叔母つせ子)について回想している。また『竹崎順子』(1923)の中で小楠の思想を簡潔に紹介している。

静かな周囲に彼の静思は熟し、快豁<sup>22)</sup>な自然は彼の解放を全し、限界は広く無碍になりました。程朱宋学は遙の後に成り、堯舜孔子を昔の友として、説く処は「天」でした。「自然」でした。其結論は開国です、国際の親交です、世界の平和です。西洋の事情、さまざまの新知識は油断なく取り入れられます。耶蘇教にも興味を持ちます。日本と米国の諒解一致が世界平和の楔子である事を横井は早くも看取して居ました。(『蘆花全集第15巻』:95)

蘆花は小楠の実学の教えを受けた父から、人の為になる仕事をする必要性の教え込まれた。幼少の時から、家の伝統として身に沁みだした「世道人心の為になる」という道義的な文学観を持った作家(前田河:1938:388)であることから、蘆花文学の背景に小楠の思想が流れていると見られる。そして後年「美的百姓」<sup>23)</sup>を実践するために農村に転居し、文筆活

19) 身分に関係なく、徳のある人が国を治める。私心なく、国家を治める方策とする。

20) 幕末期の熊本藩において、横井小楠をはじめ、藩政改革を求める藩士たちの集団のこと。幕末にはその勢力を失ったが、維新後再び台頭し、1870年の細川護久の藩知事就任を機に実学党両派は政権を獲得した。

21) 1887年5月21日、『同志社文学雑誌』に収録されたもの。蘆花全集にあるが、現存している作品としては最も古い時期のものである。

22) 広がりか規模で非常に大きいという意味。

23) 『みみずのたはごと』で美的百姓について「彼は美的百姓である。彼の百姓は趣味の百姓で、生活の百姓では無い。然し趣味に生活する者の趣味の為の仕事だから、生活の為と云ふてもよい。」(『蘆花全集第9



動のかたわら農作業も行った。だれもが途中で都会に逃げ帰るだろうという予想に反して、最期までその生活は続いた<sup>24)</sup>。もとより、トルストイの影響が大きいことは事実であるが、トルストイの思想に実学を实践しようとした蘆花の人生観が共鳴した結果であろう。

## 2. 幼少期のトラウマ

幼少期の体験が以後の人間の性格形成や心理状態に大きな影響を与えることは心理学の普遍的学説となった。たとえばアドラー<sup>25)</sup>は幼児期の早期体験が人生の態度を決定するのに「最強の刺激」になると言った。蘆花の晩年には告白による精神的解脱を目指した作品が続くが、そこにある幼少期に受けた心の傷に関する著述を見ることで、人生にどのような影響を及ぼしてきたのか推察することができる。

蘆花は1918年4月に刊行された『新春』<sup>26)</sup>の「春信」で、「私の童貞は五歳の年に早くも失われてしまいました。其結果、私は五歳の無心な無礼から私の樂園を失ふてしまいました。」(『蘆花全集第10巻』:280)と、5歳の失恋についてはじめて読者に向けて告白している。

また『富士』には「熊次は無慚にあまり早く性の眼をさまされた。無闇に彼を可愛がつた乳母達の手に早くも彼の童貞は破られた。」(『蘆花全集第16巻』:62)、「子供時代の記憶にわれをおもちゃにした年上の女」(同書:363)とある。そして愛子に1905年12月に告白した時のことを以下のように回想している。

「俺は動物なんだ」乳母の懷で、熊次は性の遊びを知った。而してそれは五歳か六歳の  
年<sup>おどろ</sup>だった。彼は乳母にした通りを母にしかけた。駭き、突きのけた母の手をいまだにびちびち体  
に感ずる。「俺は其時から母を失うてしまった」熊次は嗚咽した。(中略)熊次は三十年来胸

卷』:242)と説明している。

24) 終焉の地は『不如帰』の冒頭の舞台にもなった伊香保(注:群馬県渋川市伊香保町にある温泉地)千明仁泉亭である。墓所は粕谷(現在の恒春園内)にある。

25) Alfred Adler(1870~1937)は、オーストリア出身の精神科医、心理学者、社会理論家。フロイトおよびユングと並んで現代のパーソナリティ理論や心理療法を確立した1人である。

26) 蘆花の告白小説には『黒い眼と茶色の目』、『新春』、『富士』があげられる。告白が自然主義文学のキーワードであるとすれば、これらの作品をもって、蘆花が自然文学者と位置付けられる。しかし「自然主義作家のように作品づくりのために告白をしたのではない」とする伊藤(2003:19)の主張は的を射ている。告白して解脱をしたいと望んでいたが、父の死でその機会が来たことが先である。筆者も時流に合わせるために執筆したものではないと考える。

に秘めた苦痛を吐き出す時と人を獲て、涙を存分に流した。而して涙の中に漸次荷が軽くなる心地がした。 (『蘆花全集第18巻』:372~373)

『蘆花日記(一)』(1914年8月4日)には乳母の名前をあげて、「細君以外に余が交接した女 おひろ(乳母)」(同書:87)とある。蘆花は豪農の出身で、家庭内には常に多くの使用人がおり、乳母に世話をされていた。蘆花はその乳母から5歳の時、セクハラ被害にあったのである<sup>27)</sup>。少しずつ、何度かにわたってクリスチャンである蘆花は自己の失樂園物語を告白する。そうすることで、徐々に自己を解放していく。

のろい

性慾に対する母の呪詛を五歳の細胞の一つ一つに四十五年後の今日迄猶びちびちと感ずる私は、最初の樂園を失はせた敵としてそれを憎み恥ぢ、戦ふて勝つ時は蹂躪し、負ける時は虐待しました。私の心は五歳の昔ながらに女性の愛に渴へ、私の体は二元の戦の奔命に疲れます。成長する筈がありません。 (『蘆花全集第10巻』:280~281)

こうして5歳の無垢な子供が受けた「性慾に対する母の呪詛」は心身の傷となって蘆花の肉体に残り、心が成長しなかったと言う。乳母による傷よりも、母親から拒否されたことが蘆花の心に大きな傷となって残ったことがわかる。乳母によって傷つけられた幼い蘆花を誰よりも庇う義務のあった母親に捨てられたと感じたのも当然の結果であるといえよう。母親に拒否された心の痛みは失われた母性を求める心と、自分を愛してくれなかったと感じる母親への恨みとなっていったのである。兄への敵対心の根底にも、兄が自分には向けられない母親の絶対的な愛情を受け、母と一つになっていることへの羨望が入り交じっていると思われる<sup>28)</sup>。

失われた母親の代わりに母性を求めた蘆花は「第二の失恋」をする。山本久栄との恋愛事件である。この二度の失恋によって、もともと自然児であった自分はどのような人間になったのか、そして愛子にとってどんな夫であったのか蘆花は次のように自己分析している。

<sup>27)</sup> 蘇峰は長子として両親にスパルタ式教育を受けてきたが、蘆花は乳母に世話をされて甘やかされていた。一家を切盛していた母が40歳で生んだこともあり、乳母にまかせざるを得ない環境から起きた悲劇である。

<sup>28)</sup> 「青山(注:蘇峰)の事や一家一門の態度を思ふと、気が狂ひさうになる。自分の腹をかき切って、臓腑をつかみ出して、彼等の門に押付けてやりたい。人を殺したい。殺すなら、母の胸に短刀を突込みたい。青山の頭を微塵に踏み砕きたい。」(『蘆花日記(一)』:34)父の死後の1914年6月9日の日記に母と兄への憎しみを赤裸々に書いている。

不自然児も実は皮をかぶつた自然児であつたからであります。然し第一。第二の失恋で  
已に劇しい打撃を受け、父の孔子と母の耶蘇の間に不徹底な克己と服従を強いられ、兄の  
軽蔑と周囲の侮蔑に眼を瞑つて馬鹿の名目に自分を任せ、内に燃ゆる憤慨を踏みつけ踏み  
つけ死んだやうになつて居た押曲げられた不自然児、突放した母の手に性欲の内向した不自  
然児は、罪の無い自然女兒に対して、決して好い夫ではありませんでした。随分我侷な不良  
人でありました。(『蘆花全集第10巻』:282)

伊藤(2003:7)は「蘆花の人生で繰り返される生き直し衝動、告白文学を考えると、この一連の幼児期の事件は生涯を支配する後遺症、トラウマになっていたと思われる」と述べている。伊藤の見解は、中野の「たとえば人間、閨房におけるプライバシーが、そのままその人物の本質的意味にそうつながるものとは、必ずしも考えない」(中野:1984c:462)という見解より幼児期のセクハラに重きをおいている。蘆花の告白から、女性からの愛を受けたいと渴望する反面、自分を傷付けた女性への敵愾心との不均衡を持ったまま育ったことがわかる。蘆花は後に「両親あつての孤独感」によって、同じ状況にいる女性には自然と同情するが、「細君に対して余は嫉妬がある。彼女が愛を十分に受けし事、身心の健全な事。」(『蘆花日記(一)』:299)と告白している。『黒い眼と茶色の目』ができるまでは妻にヒケを感じていたと言っている。確かに、愛子に対する異常なほどの嫉妬心と暴力の裏返しと見られる深い愛情は、幼児期のトラウマに起因すると考えれば納得のいくものがある。

しかし本来潔癖な性格であった蘆花は「霊を外に被て肉を内に包む」(『蘆花全集第10巻』:287)という不自然をそのままにはできなかつたとしている。そうした不自然から自然へ帰ろうとした蘆花の文学は多くの読者の心に感動を与えたと言える。そして母性への渇きは、母のような女丈夫とは正反対の性格を持つ、美しくてか弱い女性に向かったのではないだろうか。すなわち『不如帰』の浪子や「可憐児」に見られる女性像である。

儒教的な両親への厚い孝行心とキリスト教的な罪の自覚と贖罪を求める信仰心との間で、蘆花は『新春』にある告白をするまで熾烈な霊肉の戦いをしてきたことがわかる。『新春』には「母上に、健」と母親への献辞を掲げ、母との確執を解き、和解する意味を持つ作品である。しかし蘇峰との和解は死の直前まで待たなければならなかつた。

### 3. キリスト教の受容

#### 1) 熊本洋学校

熊本洋学校は1871年、熊本城内に設立された熊本藩立の学校である。1614年にキリスト教禁止令<sup>29)</sup>が敷かれた。明治政府によって1873年に禁教令が解かれた後、カトリックのみならず、プロテスタントの布教により、キリスト教の信者が増加していった<sup>30)</sup>。明治のプロテスタントには士族階級の者が多く見られる。これには江戸時代の武士階級が勤勉であり、主君の為ならいつでも生命を投げ出す覚悟があったこと、プロテスタントの精神が似通っていたことに原因があると思われる。倒幕によって主君を失った武士階級の若者らが、新しい主である神を得た(司馬:1994下:40)と言える。倒幕の中心となった薩長出身の者よりも政治の中心からはずされた他藩<sup>31)</sup>の出身者が多かったようである。熊本藩においても、幕末には藩内での分裂によって旗色を明確にできないままに維新を迎え、隣藩の薩摩藩や肥前藩に遅れをとってしまった。そのため藩ではそれらに追い付こうと、学校を建て、熱心に西洋文明を取り入れようとした。

熊本における実質的な文明開化は1870年、熊本藩の実権を握った実学党政権により、西洋の文物技術を移入するために創設された全寮制の熊本洋学校<sup>32)</sup>からはじまる<sup>33)</sup>。横井小楠の甥にあたる横井大平がアメリカから帰国した後、アメリカの文化等を熊本に取り入れて熊本から有為な人材を産み出すために熊本藩知事に洋学校の設立を進言した。そして1871年、元陸軍士官ジェーンズ<sup>34)</sup>がアメリカから教師として招かれた。ジェーンズはすべての授業

29) 1612年に、第2代将軍徳川秀忠が、幕府の直轄地と直属の家臣に対してキリスト教の信仰を禁じ、翌年に全国へおよぼした法令。これに従わない者や宣教師を国外に追放した。当初、幕府はキリスト教を黙認していたが、キリスト教徒が増加してくると、江戸幕府の支配のさまたげになることを恐れるようになった。また、西国大名が、貿易で利益を得ることをおさえようと考えた。そのために、幕府はキリスト教の布教を禁止するようになった。第3代将軍家光は、さらに禁教を強め、徹底させた。また、1637年に起った島原・天草一揆の後、キリスト教の取締りは、さらに強められることとなった。

30) 1895年のカトリック教会は信徒数約5万人、プロテスタントは1888年末に249教会、信徒数約1万6千人、年間の受洗者は約7,000人を数えた。ロシア正教徒の信者数は1万7,000人であった。

31) 安中藩士の新島襄、高崎藩士の内村鑑三(1861～1930)、盛岡藩士の新渡戸稲造(1862～1933)、熊本藩士の小崎弘道(1856～1938)、旗本出身の植村正久(1858～1925)、筑後国柳川藩士の海老名弾正(1856～1937)など、著名なクリスチャンが挙げられる。

32) 1871年、城内古城(現熊本県立第一高等学校)に開校。1874年、日本で初の男女共学となる。1877年に閉鎖される。同年、オランダ人医師マンスフェルトが迎えられ、医学校も開設されたが、ここでは洋学校についてのみ言及する。

33) これは蘆花の見解であるが、的を射ていると思われる。

34) Leroy Lancing Janes(1838～1909)はアメリカ陸軍の軍人。退役後に熊本洋学校で英語で教育を行い、熊本バンドの礎を築いた。1877年に熊本洋学校が閉校した後も1899年に帰国するまで、大阪や京都などで英

を英語で行い、演説教育にも力を入れた。最初は聖書について講義しなかったが、キリスト教に興味を持った生徒たちに対しては土曜日の放課後や夜に自宅に集め、聖書を配った。そのうち聖書研究会がはじまり、熱心な信仰を持つ者も現れ始めた。徳富家では蘇峰や姉の初子、従姉の横井みや子も洋学校に入学した。ただし、蘆花は年少であったため入学していない<sup>35)</sup>。

1876年に洋学校の生徒35名は熊本城外花岡山で「奉教趣意書」に誓約した。この趣意書には「遂にこの教を皇国に布き、大に人民の蒙昧を開かんと欲す。」とあり、個人的な誓約や教会形成を意識したものというよりは、キリスト教と国家との関係を意識した宗教国家樹立を宣言したものであった<sup>36)</sup>。これらの人々は熊本バンド<sup>37)</sup>を結成したが、これが保守派によって批判の対象となり、翌年の1877年に閉校となる。その後多くの者がジェーンズのすすめで同志社英学校<sup>38)</sup>に加わった。その中には蘇峰や海老名弾正<sup>39)</sup>らが入った。

## 2) 同志社英学校と入信

現在の同志社大学<sup>40)</sup>の前身である同志社英学校は、新島襄<sup>41)</sup>によって設立された。1865年、アメリカへの密入国後キリスト教の洗礼を受け、名門校アマースト大学を卒業した新島は1875年に帰国し、京都に同志社英学校を設立した。同志社の建学精神はキリスト教精神に基づく「良心」である。

1876年9月の新学期の前後、約40名の熊本洋学校出身の学生が同志社に入学した。蘇峰は父からキリスト教への奉教に反対されたため一時東京に逃れていたが、同年、同志社に入学し12月には受洗した。1878年、京都から一時帰郷した折、蘆花の教育が老父母には重荷のように感じたため、蘇峰が進んで蘆花の教育の任を引き受けようと京都に連れて行っ

---

語を教えた。

35) 中野は蘆花が熊本洋学校に入学しなかったと結論を下している。『蘆花全集第18巻』付録の年譜には入学したとあるが、同じ時期に本山小学校に通っていたと何度か言及されているため、洋学校には入学していないとしている。筆者もこれに従う。

36) 「<http://ja.wikipedia.org/wiki/熊本バンド>」参照。

37) バンドのメンバーが自分たちのことをこのように呼んだのではなく、同志社英学校在学時に他の学生と区別する意味で、そう呼ばれた。

38) アメリカから帰国した新島襄が1875年に開いた。同志社大学の前身。

39) 海老名弾正(1856～1937)は、日本の思想家・教育者・牧師。横井小楠の娘・みや子と結婚した。

40) 新島の死後、1912年に同志社大学に改称。1920年大学令により大学となる。大学設立のため、蘇峰が中心となって尽力した。

41) 新島襄(1843～1890)は日本の宗教家、教育者。上州安中藩(現在の群馬県)江戸屋敷で、安中藩士新島民治の子として生まれる。本名を七五三太。後に敬幹と改名。明治六大教育家の1人に数えられている。

た。そして蘆花は蘇峰のすすめで同年6月に同志社英学校に入学した。これは最初の入学であり、在学期間は1880年夏までの2年間であった。再入学は1886年9月で、在学期間は1887年12月の京都出奔<sup>42)</sup>に至るまでの一年余りである。再入学までの6年間は蘇峰の教える大江義塾<sup>43)</sup>で学んだり、養蚕を学んだりしていた。この期間に母から勧められて蘆花も教会(注:当時は講義所と呼ばれていた)に通うようになった。

キリスト教の熱心な信仰を持っていたのは、姉初子と従妹のみや子であった。二人は蘆花兄弟より先に京都から熊本に帰った。視力の悪かった母親のために二人が聖書を読み出したことがきっかけで、久子もキリスト教に入信することになった。久子の入信の動機は、当時の家社会ではよくあったことであるが、一敬の女性関係の複雑さに苦勞していたことにあったという。つまり、一夫一婦の道徳を厳しく説くキリスト教の道徳観に感動したことにある。さらにそれを蘆花に勧めたのは、「兄に比べて頼りなく、衝動的で無責任に見える息子に少しでもしっかりしてほしい」という動機があったという(中野:1984a:124)。

1884年にはメソジスト教会<sup>44)</sup>において、会衆派<sup>45)</sup>の牧師であり従兄の横井時雄から久子が、翌年には蘆花が相次いで受洗した<sup>46)</sup>。蘇峰の結婚を機に、蘆花は時雄が牧師をしていた愛媛の今治教会で時雄が同志社神学部の教授になって京都に移動した1886年6月まで、1年4ヶ月の間伝道生活をした。今治を舞台にした蘆花の小説には『思出の記』(1901)、『黒い眼と茶色の目』(1914)、『死の蔭に』(1917)などがある。特に自伝的小説『思出の記』では舞台を宇和島にして、今治時代のことが描かれている。特に主人公の慎太郎が、貧民窟に出かけて伝道する場面がかなり詳しく描かれているのは、今治での伝道生活をもとに描かれたと推察する。この伝道生活は決して成功したとは言えないものであったが、社会的弱者への観念的な愛情だけではなく、実際に貧民窟に出かけて、その生活を直接見たことは、心に深く刻まれ、後の創作活動に影響を与えたと言えよう。

42) 蘆花は新島襄の妻の姪である山本久栄との恋愛事件で失望し、同志社卒業を目前に京都を出奔した。その内容は『黒い目と茶色の目』(1914)にくわしく書かれている。

43) 1880年に蘇峰が同志社英学校を退学して家族が住んでいた熊本県飽託郡大江村(後の熊本市大江)に戻った後、1882年3月に一敬が蘇峰のために自宅で開いた私塾。1886年12月に一家が東京へ移るまで、4年10ヵ月にわたり存続した。自由民権運動の影響を受けた、いわゆる「民権私塾」のひとつと見なされる。

44) プロテスタントの一派。1729年、ウェスレーらがオックスフォードで起こした敬虔主義的運動である。日本では1873年開教。現在は日本キリスト教団に合同している(『広辞苑』:2518)。韓国では監理教。

45) プロテスタントの一派。17世紀、イギリスで個々の教会の独立と自治とを標榜して国教会から独立。日本では組合教会(『広辞苑』:418)。

46) 同志社の新島は会衆派であり、洋学校のジェーンズも同様であった。しかし当時は熊本には会衆派教会がなかったらしく、現在ほど宗派のちがいに敏感でもなかった時代であったためだと中野(1984a:128)は述べている。

蘆花が受洗した頃には、蘇峰はすでにキリスト教への信仰は無くしていた。蘆花が受洗したのは兄への反抗心もあったと思われるが、それだけではないと思われる。さらに、蘇峰だけではなく、当時の多くの文学者の中には入信しても、信仰を失っていく者が多かった。それにひきかえ蘆花は信仰に波があったり、晩年には独特な信仰観<sup>47)</sup>に傾いていった側面はあるが、終生神を否定することなく、キリスト者として全うしたことは注目に値する。

キリスト教信仰に関する点を同時期に活躍した他の作家と比較するのも興味深いと思われるが、本稿の研究目的ではないので、一例として蘆花とよく比較される国木田独歩をあげてみる。独歩も蘆花と同じように青年期に入信し、民友社でジャーナリストとして活躍した。『武蔵野』<sup>48)</sup>など自然描写にすぐれた作品を残したが、最後は信仰を捨ててしまった。独歩は人間関係において非常に苦勞した人物ではあった。「自然は次第に吾に親しく、人は次第に吾より遠ざかりゆくが如し。自然は美にして誠なれども、人は利己的にして虚偽なるが如くに吾は見ゆ。」(1896年8月14日)と日記に残している(鈴木:1980:34)。独歩が人間に対する不信感を持ったのは尊敬していた内村鑑三との葛藤や妻の失踪に原因がある。一方、蘆花は自然の中に神を見だし、自分を含む人間も自然の一部であるという認識に到達した点が、独歩とは異っている。

蘆花がトルストイ訪問後の1907年の春、東京郊外の粕谷村に転居してから、宗教観が変わったことがわかる。蘆花はキリストに関しては気違いじみた点が多かったとし、絶えることのない夢を見ていた人物であると考えている<sup>49)</sup>。また、粕谷村で天理教の信者の生活や教理にふれて、農民が天理教に入信することに共感を見せている<sup>50)</sup>。さらに『死の蔭に』<sup>51)</sup>でも記され

47) 粕谷に転居してから教会こそ行っていないが、聖書を絶えず読んでいた。『日本から日本へ』では、1918年2月11日、『新春』執筆中に「五十一歳の私徳富健次郎と、四十五歳の妻あいと、婚後二五年、新しくもない夫妻が、卒然としてアダム、イヴの自覚に眼ざめたのは、実に此紀元節の天明であつたのである。」(『蘆花全集第12巻』:4)と記した。「私共は日の本に生れた日子子女である。」(『蘆花全集第12巻』:9)とも記されている。また、1918年2月15日の日記には「これからの基督は生活の基督でなければならぬ。m(愛子)は多分女基督であらう。俺は耶蘇の再来だろう。耶蘇が男女に分れて来たとも見られる」とある。これを中野をはじめ研究者らは「蘆花教」と呼んでいるが、当時は蘆花の異様な表現に狂ったと思った人々もいたほどである。しかし、筆者はそれらは蘆花らしい一瞬のひらめき、もしくは啓示のようなものであると考える。思い込みの激しい一途な蘆花の性格もあり、当事者しか知ることのできない神秘的な一種の靈的体验であると考えられる。それに蘆花自身、教団を作った訳でもなく、自分が基督だから自分に従えと言ったわけではない。伝統的なキリスト教から見ると傲慢きわまりない発言であろうが、蘆花のような人格者とは言えない人間、もしくは夫婦げんかばかりする夫婦でも基督であるなら、万人が神の子として基督のような価値をもつことができるという可能性も示していると考えられる。

48) 1898年、発刊当時は『今の武蔵野』であった。

49) この話は1908年に基督教青年会の6人の大学生が蘆花を訪問した時の記録(『蘆花全集第9巻』解題(9)みみずのたはごと参照)である。

50) 『みみずのたはごと』に天理教の祭に出席した日のことを回想して、以下のように宗教を比較している。「耶蘇

ているように、伊勢神宮や出雲大社に参拝しながら、御神楽を奉納したり、多額の賽銭を奉納したりした。その他にも地方の神宮を参拝して祈ることが多かった。クリスチャンである蘆花がとった行動には、唯一神、父なる神に対する信仰と、多神教である日本の神を尊重する神道的な信仰観が同居している。そして何も矛盾を感じていないことを立証している。こうした面はトルストイの信仰観と共通するところもある。これについては本章第5節「トルストイ」で言及する。

汎神論的な自然観を持つ蘆花にとって、日本の神は創造の神の分身として認識されていたと推察する。終生キリスト教神信仰を持っていた蘆花は、教理や教会組織の拘束を嫌った自由人であった。蘆花の柔軟な宗教観から出た行動であると考えれば、自然の成り行きであったと思われる。神と宗教というものを蘆花独特の方法で消化していたので、ドグマティズムにとらわれている信徒から誤解されるべき宗教観を持っていたと言える。晩年には著書に記されている内容から、独自の基督教信仰に陥ったとされ、異端視された。しかし、弟子の前田河など、蘆花に近かった人物は終生基督者として生きたと語っている。筆者も前田河と同じ観点である。単純かつ唐突な発想とも言えるが、自分も神の子だという自覚を持ち、真摯な蘆花夫妻の生き様は、行動的である<sup>52)</sup>という点で一応の評価を下しても良いだろう。



#### 4. 民友社

##### 1) 激動期における民友社の活動

民友社は1887年1月、徳富蘇峰が東京に設立した思想結社で出版企業体も兼ねていた。これを設立した蘇峰は同志社英学校に入る前に新聞記者になろうという意思はすでに固まっていた。

1886年、『将来の日本』を自費出版した蘇峰は1887年に一家共に上京した<sup>53)</sup>。1887年

---

教は我強く、仏教は陰気くさく、神道に湿りが無い。彼大なる母教祖の胎内から生れ出た、陽気で簡明切実な平和の天理教が、土の人なる農家に多くの信徒を有つは尤である。」(明治42年12月4日)(『蘆花全集第9巻』:460)。

51) 1913年9月2日から3ヶ月間、蘆花夫妻と養女鶴子、小笠原琴子(『寄生木』の主人公善平の末妹)の4人で行った旅行記である。九州から朝鮮、満州まで旅行した。刊行は1917年3月。

52) 槇林(1971:21~22)は「白樺派の最も短絡的な人類中心思考」よりも蘆花の方が行為性があると記している。小楠の実学の世界平和思想が蘆花の中に入っていった可能性を示す見解を受け入れれば、蘆花の独自のアダム、イヴ云々の発言は狂っていると論じることは無意味であろう。

53) 上京の際には大江義塾の主な塾生も同行し、多くの者は東京専門学校(現在の早稲田大学)などに入学し、勉学を続けた。一部の者は民友社の社員にもなった。



1月に民友社を設立、同年3月に『国民之友』<sup>54)</sup>第1号を発刊した。当時、他の雑誌の発行部数は1,000部以下であったが、『国民之友』は創刊号で7,500部、以後着実に漸増し、第26号以降は14,000部を発行するほどであった。これは当時の雑誌で第1位の発行部数であった。しかも量的に多いだけでなく、全国的に広く普及したので、地方の豪農豪商層を中心に読者が多かったことに他には見られない特色があった。同誌は藩閥政治と貴族的な欧化政策に反対して「平民主義」<sup>55)</sup>を掲げた。蘇峰らはその担い手と期待する「田舎紳士」<sup>56)</sup>をはじめとする青年知識層の支持を得て、明治中期の言論思想界に多大の影響を与えた。

1888年2月に「憲法発布」がなされ、近代国家への歩みが本格的に始まった。日本は日清戦争と日露戦争を準備する前段階にまで至っていた。その手順として西洋の先進文明を取り入れる一方、条約改定のため勤しんでいた。鹿鳴館はその代表的産物である<sup>57)</sup>。

こうした日本の時代の要請に答えるように、1890年2月には『国民新聞』(社名は国民新聞社)が創刊された。その基本方針は「新聞其物をして社会の生活と一致合体せしむる」である。創刊当初は政治、経済、文化等のさまざまな分野を報道・論評する生鮮な新聞として人気を博した。1892年には『家庭雑誌』(注:社名は家庭雑誌社)を、1896年には英文版『国民之友』として『The Far East』を創刊した。また、叢書の形態をとって、国民叢書、平民叢書、社会叢書、青年叢書、教育叢書、家庭叢書、少年伝記叢書や『十二文豪』などを続々と刊行し、明治中期の出版界に、先発の大手出版社と肩を並べるほどであった。社員には人見一太郎<sup>58)</sup>、竹越与三郎<sup>59)</sup>、宮崎湖処子<sup>60)</sup>、山路愛山<sup>61)</sup>、国木田

54) 『国民之友』は政治・経済・外交その他の時事問題を論じる一方、文学方面にも力を入れた総合雑誌。雑誌名はアメリカの《ネーション》誌からとられた。森鷗外の『於母影』、坪内逍遙の『一口剣』、山田美妙の『胡蝶』などは、『国民之友』に最初に掲載され、読者らの支持を得た。

55) 国家主義に対して、民衆に基盤を置く近代化を提唱した。

56) 平民主義の論理は、自由主義的な商工立国を推進することであり、それは新しい政治主体、倫理主体として<田舎紳士>という範疇をうちだした。世代論として<天保の老人>に対する<明治の青年>の自立への叫びという体裁をとった(日本近代文学大事典第4巻:497)。

57) 蘆花は長編小説『黒潮』のはじめの部分に「呦々館」を登場させ、政府高官らによる欧化主義の滑稽さを批判的に風刺している。

58) 人見一太郎(1865～1924)は1884年大江義塾に入塾し、以後蘇峰に従う。1887年民友社が設立されると『国民之友』の編纂人となり、『国民新聞』の論説記者としても活躍した。蘇峰の外遊中(1896～97)は後事を託されたが、蘇峰の帰国後まもなく退社。

59) 竹越与三郎(1865～1950)は明治から昭和時代前期における日本史家、政治家。『時事新報』『国民新聞』などの記者をへて1896年雑誌『世界之日本』を創刊。後に国会議員になる。

60) 宮崎湖処子(1864～1922)は1884年に東京専門学校に入学。在学中にクリスチャンとなる。卒業後、『国民新聞』の記者として主に文芸面を担当、批評をかく。その間に発表した小説『帰省』(1890)や詩集『湖処子詩集』(1893)が評判となる。その後、1897年ころから民友社を離れ、キリスト教の伝道に尽力した。蘆花と

独歩<sup>62)</sup>らがいた。何よりも新しい作家をつぎつぎに登場させて、文学界に新風を巻き起こした<sup>63)</sup>(『日本近代文学大事典第四巻』:497)。

蘇峰は最初は「平民主義」の立場から政治問題を論じていた。やがて、三国干渉に衝撃を受け、強硬な国権論・国家膨脹主義へと転じていった。1896年の外遊から帰国直後の1897年、第2次松方内閣の内務省勅任参事官に就任、従来の強固な政府批判の論調をゆるめると、反政府系の人士より、その「変節」を非難された。「変節」以降、社の経営は極度に困難に陥り、1898年8月、蘇峰は『国民之友』など三誌を『国民新聞』と合併するという名目のもとに廃刊し、社員の三分の一を解雇した。明治後期から大正初期にかけては山県有朋、桂太郎、寺内正毅、大浦兼武ら藩閥勢力や軍部と密接な関係を持ち、「御用新聞」と呼ばれることもあり、政府系新聞の代表的存在となる。

日露戦争(1904年2月8日～1905年9月5日)終結時には世論に対して講和賛成を唱えたため、1905年9月5日には講和反対を叫ぶ暴徒の焼き討ちに遭った<sup>64)</sup>。1907年には日本新聞史上初めて地方版を創設した。また1924年8月21日には、初めて天気図を掲載したことで知られている。大正中期に大衆化が図られ、東京五大新聞<sup>65)</sup>の一角を占めるようになるが、関東大震災<sup>66)</sup>の被害を受け社業は急激に傾いた。

## 2) 民友社時代の蘆花

1889年の春、熊本英学校で教師として勤めていた蘆花は家族から上京の許しが出て、民友社に入社する。上京に際して蘆花が挨拶した言葉には「不才不能何一つ出来ぬ自分にも、拙いながら、一枝の筆がある。例へば昔心機一転後の使途保羅が東奔西走、重細亜に七教会を立て、希臘から、羅馬、西班牙まで身を粉にして福音を伝えた如く、何卒此筆を

---

の交流はその後も続いた。

61) 山路愛山(1865～1917)はクリスチャンで、1892年、徳富蘇峰の誘いに応じて民友社に入る。以後『国民新聞』、『国民之友』に平民主義の観点から史論を中心に次々と文章を発表。1897年2月民友社を退社するが、蘇峰とは生涯交遊があった。1899年『信濃毎日新聞』主筆となり、多数の論説を発表した。

62) 国木田独歩(1871～1908)はクリスチャンで、日清戦争勃発とともに国民新聞社に入社。従軍記者として『愛弟通信』を送り好評を博す。1895年『国民之友』、『家庭雑誌』の編集にかかわる。しかし、妻信子の家出と離婚、蘇峰や内村鑑三との葛藤で人間不信に陥り、信仰も無くした。

63) 『国民之友』の「藻塩草」欄には、山田美妙、坪内逍遙、森鷗外、尾崎紅葉、幸田露伴、北村透谷、田山花袋、泉鏡花、樋口一葉などの作品が発表され、一時は文壇への登竜門のように見受けられた。

64) 戦時中に生活苦を強いられてきた国民が、勝利したにもかかわらずロシアから賠償金を全く受け取れないことへの不満が主な原因といわれる。日比谷焼打事件。

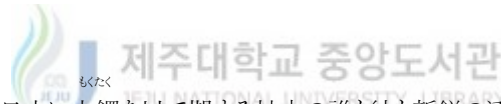
65) 東京日日、報知、時事、東京朝日、国民新聞。

66) 1923年9月1日に起った地震で国民新聞社は被害を受け、社業は急激に傾いた。

以て愛の事業に貢献したい」(『蘆花全集第16巻』:61)と涙ながらに語った。文筆で自分の道を開こうと意欲に満ちた蘆花であったが、民友社に入社して、まず与えられた仕事は海外電報、新聞、雑誌記事の翻訳係であり、『国民之友』の雑報を書くことであった<sup>67)</sup>。

蘆花はジャーナリストとして世界の最新情報に通じており、蘇峰の薦める外国書籍を講読しながら西洋の思想や事情を学んだ。そして民友社発刊の叢書類や外国文学に触れて多くの知識を得たものと思われる。叢書『十二文豪』は1893年の第一巻「カーライル」にはじまり、「ワーズワース」、「ゲーテ」、「エマソン」、「トルストイ」などの文人を紹介するシリーズ物である<sup>68)</sup>。蘇峰は蘆花にトルストイ評伝を執筆させた。民友社の積極的な海外思想流入は蘆花だけでなく、近代日本作家の浪漫的自然観に影響を与えたことがわかる。

国民新聞社は日清戦争開戦の第一報を送り、従軍記者も送りながら最新の報道を行った。この間、蘆花は愛子との離婚騒動など私的な理由で、蘇峰や社員のような働きができなかったことで肩身の狭い思いをした。この間の状況については『富士』で詳しく述べられている。戦後の新聞社での仕事は多く、後輩たちにも追い抜かされていく状況の中で次のように当時に回想している。



兎に角戦後の日本に木鐸を以て期する社内の誰も彼も新鋭の活気溢る中に、昔ながらのテェブルに昔ながらの翻訳を受持つ熊次は少しも氣颯<sup>あが</sup>らなかつた。相応に動く筆を持ち、書きたい意<sup>ころ</sup>はありながら、彼は書くものを有<sup>も</sup>たなかつた。あせればあせる程、彼は何事も為し得なかつた。(『蘆花全集第16巻』:352) (参照：現代語訳Ⅱ-①)

蘆花は政治や国際問題への見識も深く、時代の変化を敏感に感じ取った。それで、ジャーナリズムの重要性もだれよりも理解していたはずである。しかし、「書くものを有たなかつた」理由は言論人としての資質の有無よりも、蘆花の期待と気質とはそもそも合わなかったことにあると思われる。これは蘆花の「自家の社会主義」から斟酌できる。日本の社会主義に

67) 中野(1984a:209)によると、蘆花は上京後1ヶ月で挫折感を味わったという。兄に異議を述べたところ「言うことをきく約束で来たろうが」と一言であしらわれた。

68) 平田久(1892)「カーライル」、宮崎湖処子(1893)「ユルツユルス」、高木伊作(1893)「ゲーテ」、北村透谷(1894)「エマソン」、人見一太郎(1895)「ユーゴー」、徳富蘆花(1897)「トルストイ」などがある。他に日本の文豪についても出版されている。

関する書籍は3冊だけしか読まなかった(峯岸:2003:15)<sup>69)</sup>。社会主義への関心は高かったようだが、英文の社会主義の本も買うだけでついに読まなかったという。峯岸は蘆花の不勉強を指摘しているが、それは皮相的な観察であり、蘆花が社会主義思想に深入りできなかった彼の状況から分析するべきである。蘆花はトルストイやワーズワースの作品と人間性には自分と通じるものを感じたが、社会主義には観念的には共感できるが自分の境遇とは離れていたからであろう。いわゆる社会主義思想に斬新さはあっても、それは蘆花の現実とは相容れないものであったため、あくまでも「自家の社会主義」と区別したと思われる。それは蘆花の豪農出身という背景や、キリスト教の信仰から理解できる。宗教そのものや神の存在を否定していたわけではないことにも原因があると考えられる。

1898年から国民新聞に連載した『不如帰』は1900年1月に改稿・出版され、明治屈指のベストセラーとなった。それに続く『自然と人生』『思出の記』によって小説家としての地位を確立した。1900年9月『自然と人生』刊行以後、これまでの俸給生活をやめて印税契約を結び、自立した生活を始めた頃までを民友社時代として考えることができる<sup>70)</sup>。同年10月には逗子から東京に再度転居する。

蘆花は民友社において、国内及び海外の最新の事情に通じ、文学だけではなく、政治や資本主義などにも精通して、ジャーナリストとしての資質も向上させられた。自然を見る眼だけではなく、世界の動きを見て未来を予見する感覚を培ったことは、後の『黒潮』(1903)、「謀叛論」(1906)、「勝利の悲哀」(1906)、『死の蔭に』(1917)などを見れば明白である。

当時の民友社は激動期である時代の要請に応じて『国民新聞』や『国民之友』を刊行し、西洋の事情や情報をその時々伝えて国民啓蒙に励んだ。警醒家である兄蘇峰は国家という命題を優先し、小説家志向の弟蘆花は人道主義による国民の解脱を夢見た。激動の時代を生きた徳富兄弟は各自の道を歩んで行ったと言えよう。蘆花は言う、「真理の山には峰多し。君は彼峰に立ち、余は此峰に立つも、畢竟山外に立つはあらず。」(『蘆花全集第7巻』:4)<sup>71)</sup>と。日本の明治時代はカオスを彷彿とさせるほど価値観の揺れ動く時期でもあった。蘆花は地道に自分に与えられた道を神の意思として認識し身もだえしながら歩んで行ったと

<sup>69)</sup> 峯岸は佐藤勝(1957)「蘆花と社会主義」『日本文学』を引用している。

<sup>70)</sup> 佐藤(1981)は1900年3月の『思出の記』執筆完了あたりまでを蘆花の民友社時代と捉えている。

<sup>71)</sup> 『黒潮』の序文に記されている。

言える。民友社で記者として勤めた時期は彼の見識を幅広くした貴重な時期であり、以後の創作活動につながり土台になっていると言えよう。

## 5. トルストイ

### 1) トルストイへの傾倒

蘆花がはじめてトルストイの著作に触れたのは1890年としている。はじめて読んだ作品は『戦争と平和』であり、これがトルストイへの初恋であったという。蘆花は1890年の『国民之友』に無署名の評論「露国文学の泰斗トルストイ伯」を書いた。これはトルストイに関する初めての文章であった。その後たてつづけに『アンナ・カレーニナ』、『生い立ちの記』、『コサック』、『吾が懺悔』など英訳本はほとんど読んだ。1891年には『国民之友』に「トルストイ伯の飲酒喫煙論」を書いている。

民友社が日本におけるトルストイ紹介やロシア文学の移入において、功績のあったことは有名で、蘇峰によるトルストイに関する紹介が続いた<sup>72)</sup>。1896年、蘇峰がロシアのトルストイを訪問した事実から、蘇峰が蘆花より先にトルストイに傾倒したことがわかる<sup>73)</sup>。蘇峰の訪問後、それまで延ばしてきた『十二文豪』シリーズの中に「トルストイ」を書く決意をさせた。蘆花にとって「トルストイ」の執筆は翻訳や西洋の偉人を紹介する仕事とは違い、はじめて自発的に、嬉々として取り組んだものであった。執筆時期は1897年1月で、心機一転のために逗子に転居した直後である。同年4月に民友社から「トルストイ」が刊行された。「トルストイ」の執筆当時の感想を『富士』で以下のように述べている。「何といふても型を同じくする人である。日本、露西亜と隔つても、赤の他人では決してない。斯正直な、我侷な、撞着だらけの露西亜男に、熊次は多分の自己を見出す事が出来た。拡大された自己を其人に見る心地もした。要するに「トルストイ」を書くのは、熊次に<sup>たれみ</sup>楽であつた。」(『蘆花全集第17巻』:26)とあるように、蘆花は自分の中にトルストイに通じるものを強く感じていた。

「トルストイ」の例言には「翁が人物の偉大なるは、文学者としてにあらずして、哲人たる

<sup>72)</sup> 1889年8月にはトルストイを「絶世の文人」と紹介している。

<sup>73)</sup> 1896年の蘆花は自分で精神的に「どん底」であったと『富士』で回想している。1897年元旦に「子田三十而立」の書を書き、三日に逗子に転居して「どん底」から脱出しようとした。

にある、翁が欧米に知られる様になつたのは、文豪としての著作よりも、寧ろ後半生の著作に  
あろう。」とある。後に述べるコロージャーズワースに關しても、その作品からの影響もさること  
ながら、人物そのもの、生き方そのものに感銘して、蘆花もその生き方や人柄を理想として実  
践しようとした。特にトルストイの作品よりも生き方から多大な影響を受けたことは、後の蘆花の  
半生に如実に現われている。「トルストイ」はそれまでの作品の翻訳紹介ではなく、日本にお  
けるトルストイ評伝として、初めて書かれたことは評価に値するものである<sup>74)</sup>。

また、1903年に刊行された小説『黒潮』の序文では蘇峰と自分を比較しながら「余はユ  
ゴー、トルストイ、ゾラ諸大人の流れを汲むで人道の大義を執り、自家の社会主義を執る」  
と言明する。吉田(1996:104)は蘆花の社会主義について、弱者の立場から社会の不条理を  
告発するという程度のもので、人道主義の類義語といえと述べている。当時、社会主義を  
提唱する者にはキリスト教信者も多く、自由民権運動に關係していた者も多かった。また、蘆  
花の天皇への愛着心は終生消えないものであったことから、あくまでも「自家の社会主義」と  
いうわけである。それは後の「謀叛論」にみられる社会主義者擁護と天皇の恩情にすがろうと  
する発言にも現われている。

1906年、蘆花がトルストイに会うために、イスラエルを經由してロシアのヤースナ・ポリャー  
ナに訪問した経緯が『順礼紀行』に記されている。これは民友社を辞職し、自宅に黒潮  
社<sup>75)</sup>をたちあげてからの出来事である。トルストイ訪問は、当時の蘆花の精神的混迷を打破  
する、つまり「解脱する」目的があったとみられる。訪問以前の精神的混迷の原因につい  
て、吉田(1996:104)は第一に『黒潮』の中絶<sup>76)</sup>が蘆花に文学面でも人生面でも深刻な行き  
詰まりをもたらしたという。次にキリスト教への信仰も薄れ、創作活動も低迷していた蘆花が、  
1905年8月に富士山頂で人事不省に陥って九死に一生を得た事件に注目する。この事件か  
ら「精神革命」が起った<sup>77)</sup>ことがあげられる。さらに、反戦平和主義を主張するトルストイの  
思想に同意しながらも、愛国心から日露戦争に対して非戦論の立場に立ちきれていないことへ

74) 自分なりに最高の敬意を払って書いたことは真実であったが、雑誌「文学界」には「文士の弱音を吐く泣言は下さらぬ」と批評された。

75) 1903年1月、自分一人で自宅に黒潮社を設立した。2月には『黒潮』第一篇を自費刊行し、小説の内容そのものよりも巻頭に書いた蘇峰への告別の辞が反響を呼んで有名になった。

76) 1905年12月に『黒潮』第2篇をはじめすぐに中絶している。吉田(1996)は中絶の原因を「解脱」の対象が個人中心の以前の作品とはちがって、国家であったため、形象化が容易ではなかったことと、国家の「解脱」に兄弟の不和の解消も託していたが、それが困難になったことを理由としてあげている。

77) 神による警鐘と受け止め、自己の背後に神の存在を自覚して、再生に向けての精神革命が始まったと言われる(吉田:1996)。この事件の前後から、作品の著者名が蘆花ではなく、健次郎とされ始めている。1906年12月『順礼紀行』以降は全て徳富健次郎となっていることは精神革命との関係性を無視できないと思われる。

の葛藤が蘆花の精神的混迷の原因としてあげられる。

トルストイ訪問を決心する前年、特に1905年の12月は蘆花の懺悔の期間であった。まず兄の家を訪れて、『黒潮』の公開書の件と国民新聞焼き討ち事件<sup>78)</sup>の際、見過ごしたことの謝罪をした<sup>79)</sup>。武力否定の決意を実践しようと、家伝の銃刀を砕いて捨てた<sup>80)</sup>。そして、周囲の人間に今までの自分の言動を謝罪した。何より重大な懺悔は、結婚後に犯した愛子への裏切り行為と、幼いころの乳母から受けた性的体験などであった<sup>81)</sup>。さらに肉食を否定して夫婦で菜食主義を実践<sup>82)</sup>した。精神的解脱をするために20数年前の出来事を懺悔する文<sup>83)</sup>も発表した。トルストイの思想に感銘した蘆花はその生き方も自ら実践してみたのである。

このように懺悔して、新しい出発をするために東京での生活を清算した蘆花夫妻は伊香保に滞在した。蘆花は聖書とトルストイを精読し、トルストイに手紙も送った<sup>84)</sup>。このような過程を経て蘆花はついにトルストイ訪問を決心し、妻との別居生活<sup>85)</sup>による「解脱」も兼ねた順礼の旅に出発する。トルストイ邸を訪問したのは、1906年6月30日朝から7月5日朝にかけてである。トルストイ家では娘が御者をする馬車に乗ったり、水浴をしたり、農作業を一緒にしたりして、初対面とは考えられない程親しく過ごした。農業だけではなく、戦争の話や天皇に関する熱烈な討論もした。また、日本とロシアの文学、宗教、文化、社会状況などについて語り合っている。トルストイ家のもてなしは親切であり、「門弟」としての扱いのようであった(阿部:2008:131)。

また、みだりに書くことを諭された蘆花は、自分の言うべきことのみ書こうとし、やたらに著作をしない態度をとった。トルストイ訪問後に発表した「勝利の悲哀」<sup>86)</sup>では日露戦争に勝利した日本に、一步間違えると日本の戦勝は亡国の始まりとなり、世界大戦の原因となると警告し

78) 1905年9月5日、日露戦争講和反対を叫ぶ暴徒の焼き討ちに遭った。

79) 中野(1984b:264～273)はこれを「第一回の和解」としている。和解といっても蘆花の一方的なものであり、「7年後に突発する第二の萌芽は、この時すでに孕まれていた」としている。

80) 『富士』にはこの時の心境を次のように記している。「一剣を恃むの愚!力の前にはヨリ大なる力がある。単なる力の争は、ヨリ大なる力の勝に帰する。靈力を以て、徳を以て、自ら守り他を護る外に、一剣何の役に立たう。」(『蘆花全集第18巻』:361)

81) 山本久栄との恋愛事件と失恋後の放蕩な生活については、まだ語ることはできなかった。

82) 蘆花はもともと美食家であったので、長続きしなかった。

83) 「余が犯せる殺人罪」(1906年1月『早稲田文学』)は、昔、喧嘩分かれた同郷人の森田が殺されたという記事を読んで、当時自分が森田を誣った言葉が彼を殺したかのように、良心の呵責に苦しんでいることを告白したものである。中野(1984b:284～288)は「ここには人間存在の根源を問いかけている眼、原罪意識の秘密に触れている魂がある。」と述べている。クリスチャンである蘆花の真摯な生き方を物語る内容である。

84) 英語で書かれた書簡には、『不如帰』の英訳本を併せて送った。

85) 愛子は蘆花の告白を聞いて、強く別居を望んだ。蘆花が120日間の順礼の旅に出ている間、愛子は東洋英和女学校で寄宿舎生活をした。

86) 1906年12月25日発行の雑誌『黒潮』第1号に発表されたもの。

た。軽率に空騒ぎして無分別な行動を絶対にするべき時ではないと述べ、神の前に悔い改めを促しながら、非戦論を唱えている(『蘆花全集第19巻』:38)。

また、生活面においてはトルストイのすすめもあり、農業の必要性を感じて、1907年、北多摩郡千歳村字粕谷(現在の東京都世田谷区粕谷)に転居し、晩年の20年間をこの地で過ごすことになる。もとより、トルストイに出会う前から蘆花は素朴な農業の営みを夢見ていた。それがトルストイとの出会いによってその考えが固まったといえる。当時のベストセラー作家が田舎に転居したことは大きな話題を呼び<sup>87)</sup>、日本にトルストイの名をますます広める結果となった。

1913年に刊行された『みみずのたはごと』<sup>88)</sup>はベストセラーとなり、多くの客人が蘆花のもとを訪れ、文学観や人生観、トルストイ論、宗教論、国家論など、さまざまな対話をした。この時期に蘆花は文豪としての全盛期を迎えたのである。

宗教観においても、蘆花とトルストイはかなり似ていた。両者の宗教観には、汎神論的な傾向、キリストの神性や贖罪の否定、現世での救済、パウロへの否定的な態度、教会への信仰の希薄性などがあげられる(阿部:2008:273)。蘆花は「閑窓雑筆」(1906)でクリスチャンに本質に戻る必要性<sup>89)</sup>を訴えている。

これらはトルストイの当時の基督教への批判とも通じるものである<sup>90)</sup>。クリスチャンとして神への信仰は生涯変わらなかったが、根源から善悪を見極めて己れの意見を主張する態度は、かなり似ている。教会から破門されたトルストイと、異端視された蘆花両者に共通するものは形式に拘らないで本質に迫る態度であると言える。

## 2) トルストイからの脱出希求

蘆花とトルストイに見られるその他の共通点をあげれば、裕福な家庭に育ち、夫人が才媛で作品の清書を行っていたことや、自分の結婚前の乱れた生活を妻にすべて告白したこと、権力に届かない態度を貫いたことなどがある。しかし、トルストイは晩年には著作権を放棄し、財産も妻子に分け与えて私的財産を持たないという実践をしたが、蘆花は印税で財産を増や

87) 日本の代表的な文豪が田舎に転居したことは人々に驚きをあたえ、そのうち田舎の生活に耐えられなくて都会に戻ってくるだろうと関心の的になった。

88) 「みみず」は蘆花自身を指しているが、土を愛し、土の中で生を終えるみみずにたとえたと思われる。アリのような働き者ではないが、ゆっくと、土壌改良する「みみず」のような生き方をしたのである。

89) 「クリスチャンは誰ぞ」、「生命」、「盍反其本耶」(注:どうしてその根本に立ち返らないのかの意)である(『蘆花全集第19巻』:94~96)。

90) 「基督教の主要特質であるところの人類平等の原理を無視し、忘却した事、今日の墮落せる程度ほど低いレベルにあった事は未だ曾て無かった」(昇:1918:176)という批判などをあげることができよう。



していったことは相反していた。

土を耕す生活も1年後には壁にぶつかってしまい、「美的百姓」<sup>91)</sup>という自嘲にも似た表現を使うようになった。菜食主義も3年後の1909年2月にはやめてしまい、トルストイの生き方からは離れるようになった。中野(1984c:66)は「(明治)四十二年ころからは、漸次脱トルストイへと向かっている」と説明している。しかし、阿部(2008:207)は「蘆花の粕谷での生活はもともとトルストイ主義の忠実なる実行ではなく、彼流のものだったのである」としている。これは蘆花自身の性格から見ると、自然なことだと思われる。何事にも熱しやすい性格の蘆花はトルストイに出会って感動し、良いと思われることをとにかく生活に取り入れたが、もともと何かに拘束されることを嫌う蘆花の性格である。性格や宗教観がトルストイのそれと似通っていることは事実であるが、悪く言えば真似事であった部分、つまり、蘆花の心の発露にそぐわないものは、整理されて蘆花らしい生活に落ち着いていったと見るべきであろう。

何よりも自由を願った蘆花の叫びが『新春』に書かれている。尊敬していたトルストイであっても束縛されたくはない心情が読み取れる。

お どん  
何を措いても自由、何様な代価を払ふても自由、自由が生命の私です。(中略) 愛さるるは嬉しいが、虹の色した絹糸でも縛られたくはない。信ぜらるるは力だが、金の釘でも釘づけは御免です。(中略) 愛さるるなら、生かして。信ぜらるるなら、自由を。此が私の願です。(『蘆花全集第10巻』:319)

中野(1984c:235)は「大正六年(1917)という時期には、彼(健次郎)もすでにそのトルストイ心酔からは、ほとんど脱け出していた」と述べている。父の死後、3年間を「自己閉門」して、訪問客と面会しなかった<sup>92)</sup>。1917年5月に閉門を解いて、夫妻は国内の各地を旅行した。そして夫妻そろって世界周遊旅行に出る(1919年1月)前の時期にあたる、1917年12月はじめから1918年2月にかけてまとめ上げられた<sup>93)</sup>『新春』にはトルストイを「第二の父」(『蘆

91) 蘆花の養女であった蘇峰の6女・鶴子の回想によれば、蘆花が直接農作業をしたのは月に1、2回だったという。『みみずのたはこと』に「真似は本物では無い、彼は終に美的百姓である。」という風にトルストイの言葉に従ってみようとしたが、真似であったと自嘲的に述べている。何かに感動すると模倣する蘆花の性格は熱しやすく冷めやすい面もあったから、長続きしない面があった。しかし、土を愛し、植物や自然を真に愛する人間であったことはまちがいない。

92) 一敬は1914年5月26日に他界した。その日から3年間、面会謝絶の札を貼って客と会おうとしなかったが、トルストイの息子のレオが訪日した際、1917年2月15日には面会している。

93) これは中野(1984c:226)によるものであるが、阿部(2008:212)は1917年1月末から2月にかけて執筆されたとして

花全集第10巻』:286)と述べながら、「トルストイを捨てました」(『蘆花全集第10巻』:318)とも述べている。日本ではトルストイブームの絶頂期であったにもかかわらずである<sup>94)</sup>。

その理由については『新春』で触れている。他人からトルストイと比べられて、トルストイと同じようにできない部分に対して批判されたり、おせっかいとも思える干渉を受けた結果、トルストイに愛想がついてしまったことを挙げている。しかし、捨てたとしても本当に捨てられるものではないと蘆花は言っている。知り合いからトルストイの石像が送られた時も、気に入らずに粉々に砕いてしまったことで、偶像を破壊した。それはトルストイだけでなく、大好きな父の偶像も、自分自身の偶像も壊した行為である。それは他人には狂ったような行動に見えたが、そうすることで蘆花は心の自由を得たのである。

そして「執着は常に力であるが、執着は終に死である」、「個人も、国民も、永久に生べく日々死して新に生れねばならぬ」(『蘆花全集第9巻』:16~17)という蘆花自身の信念を偶像破壊として実行した結果、脱トルストイがなされたと言えよう。

蘆花は「自己閉門」を不自然な人間から自然な人間に脱皮する期間としている(『蘆花全集第10巻』:315)。その期間に過去の古い自分から生まれ変わって精神的解脱をして、真の芸術家として晩年期を生きたのである。その人生は死の前日に蘇峰との和解を持って、最後の解脱をして神のもとに帰ったのである。

「日本のトルストイ」と呼ばれたほど、トルストイの人間性とその哲学は、蘆花の作品だけではなく、人生全般に至大な影響を及ぼしたのである。

## 6. 画学修業と西欧ロマン主義

### 1) コロー

蘆花は1896年初頭から近代洋画の巨匠である和田英作<sup>94)</sup>のもとで本格的に絵画を学びはじめた。そのような過程を経て自然を絵筆ではなく、文筆で写生する方法を取得していった<sup>95)</sup>。その成果は蘆花の自然スケッチについて吉田(1977)が述べるところを見ても明らかであ

いる。阿部は『新春』『春信』が書かれた時期だけを指している。

<sup>94)</sup> 1916年9月から1919年1月まで月刊誌『トルストイ研究』が発刊されるなど、トルストイがもてはやされた時期であった(中尾:2010:123)。

<sup>94)</sup> 和田英作(1874~1959)は明治~昭和時代の洋画家。フランス留学から帰国後、母校東京美術学校(現在の東京芸大)の教授となり、のち同校校長となった。

<sup>95)</sup> 『青山白雲』『序』に写生修業に関する記述がある。

る。蘆花の自然スケッチは1893年5月の国民新聞に掲載されたものから始まるが、『自然と人生』の「湘南雑筆」における見事な自然描写に至る道程を調べて見る必要性がある。

蘆花が関心を持ったのは西洋バルビゾン派 (Barbizon-school) 96)の画家である。特にコローやミレーの風景画に魅せられた。『自然と人生』の「風景画家コロオ」97)において、コローの作品だけではなくその一生について言及し、コローの画はコローそのものであり、蘆花は画だけでなく更にその人柄を愛するという。コローの熱心な崇拝者であり、盲目的愛情を吐露している。コローの画に欠点もあることも認めているが、蘆花が注目した点は次の点である。

彼は十分に自然を愛し、自然を解し、自然に同情を有し、而して活ける自然を伝ふことを務めたり。自然は生く。一秒時も同じからず。(中略)務めて此活ける変化ある自然の意、自然の詩、自然の情態、自然の相を活写したる者なり。

(『蘆花全集第3巻』:203) (現代語訳Ⅱ-②)

コローが刻一刻と変化する、生きている自然を絵筆で描いたことを称賛しながら、蘆花自身も写生修業を通して自然の変化を文筆で描こうと試みた。以前は毛筆で文章を書いていた蘆花が「湘南雑筆」をしたためる時からペンで描くようになったことも、描写力が上達した原因のひとつであると思われる。さらに自然を愛する画家コローに関連して、自然詩人ワーズワースまでも言及している内容が見られる。

彼は自然の児、画笔を握れる詩人なりき。(中略) 然れども彼が真教師は自然なりき。ヲオゾワルスの如く彼が真個の画室は野外にありき。(中略) 画家の心を養ひ手眼を養ふには広大なる自然の学校に若くものなし。(『蘆花全集第3巻』:205) (現代語訳Ⅱ-③)

蘆花の自然描写に見られる斬新さは、観念の自然の美をうたったものではなく、自然の中に出て、自然そのもの、即ち生きている自然を描写したところにある。画家コローと自然詩人ワーズワースの作品を理想としながら、引き続き絵筆と文筆で自然スケッチの修業に明け暮れ

96) 19世紀の中頃、パリの南東方、フォンテーヌの森の中のバルビゾン村に住んだ風景画家の一派。ミレー、コロー、テオドール、ルソーなどを指す(『広辞苑』:2112)。

97) 原題は1897年9月10日に『国民之友』に掲載された「無声詩人画家コロオ」である。

た蘆花であった。

## 2) ワーズワース

前述したように蘆花は民友社時代に西洋の思想や文学に接することができた<sup>98)</sup>。その中にはワーズワース<sup>99)</sup>がある。ワーズワースの作品をまとめて読みはじめた時期は、1891年の秋と思われる(吉田:2001:38)。『青蘆集』 「両毛の秋:碓氷(三)」<sup>100)</sup>にワーズワースについて言及した部分がある。

千金帯びずと雖も万金猶換へ難き一卷の袖珍ウオヅワルス詩集は吾が革囊かばんの中に横は  
り、恰も故郷の山より故郷の秋の野を眺めし如き風景を眺めつつ、白砂簾はくき そくそく々の道を足に任せ  
て下り行く這時このときの快樂 (『蘆花全集第3巻』:521~522) (現代語訳Ⅱ-④)

引用文から分かるように一冊のワーズワースの詩集は蘆花の旅の道連れである。ワーズワースの詩集から心強さを感じている。当時の蘆花にとってワーズワースの詩集は、聖典と呼べるほどの価値があったと言える。

ワーズワースは不幸な家庭環境<sup>101)</sup>の中で、孤独を友として珠玉のような浪漫詩を作り出した桂冠詩人である。ワーズワースは社会や学校には興味がなかった。彼は溪谷と森林を住居としながら孤独な心は自然によって癒された。孤独を能動的に受け入れ、田舎の名もなき平凡な少女ルーシーを主人公にした『ルーシー詩編』 (“Lucy poems”) を書いた。

ルーシーは蘆花の「漁夫の娘」のお光を連想させる<sup>102)</sup>。また、「麦を刈る乙女」 (“The Solitary Reaper”) に登場する乙女が仕事をしながらよく響く声で歌う姿もお光を髣髴とさせるものがある。ワーズワースが1歳年下の妹ドロシーを不憫に思い、一生同行させた背景もあり、

98) 当然それ以前にも読書をしていたが、仕事上好むと好まざるとにかかわらず、蘇峰の薦める書籍や文献が主流であったため、キリスト教では異端視されていたカーライルやエマソンの書籍に触れている。彼らの思想が日本人にとっては理解しやすく、共感できるものであったためであろう。

99) William Wordsworth(1770~1850)は、イギリスの代表的なロマン派詩人であり、湖水地方をこよなく愛し、純朴であると共に情熱を秘めた自然讃美の詩を書く。1843年、73歳で桂冠詩人となった。

100) 初出は『国民新聞』1893年11月11日。題は「碓氷の紅葉(其三)」。

101) 8歳のとき母親に、13歳のとき父親に死に別れたので、5人の兄弟たちは離れ離れに育てられた。特に仲の良かった妹のドロシーとの別れはつらかったという。この少年時代の辛い体験は彼の性格に影を落としたと思われ、後年しばしば陥った「うつ」の状態はそのせいではないかともされる。

102) 布川(1993:65)も人物設定とストーリーの類似性を指摘している。

無垢な乙女たちにいたわりの情を持つ感性は、蘆花にも共通している。

また「早春の賦」(“Lines Written In Early Spring”)で、心地好い春の日に悲しい  
思いをいただき、天に思いをはせる詩人の心は、『自然と人生』 「自然に対する五分時」  
〈春の悲哀〉の内容と通じるものがある。

木々の間に横たわった私は	自然の奏でる音を聞いた
すると心地よい思いは	いつしか悲しい思いに変わっていた
人間の心は自然の一部	私も自然と結びついている
だがそのことが私を悲しくさせる	人間は自然に何をしたかと

(中略)

もしこの思いが天からの贈り物なら	もしこれが自然の計らいなら
わたしにはもう悲しむことはない	人間もまた自然の一部なのだ

(ワーズワース「早春の賦」壺斎散人訳)

ワーズワースの詩は人間もまた自然の一部であり、自然のざわめきや人間の感情が照応する。天に思いをはせて癒される傾向が目立つ。こうした傾向は蘆花の作品にも見られ、ワーズワースの影響が認められる。

「浮世のこと」(“The world is too much with us”)では、金儲けにしか関心がなく、自然の美しさを見ようとしぬ人間を風刺している。

我らの頭は浮世のことといっばいだ	朝から晩まで金儲けのことばかり
目の前の自然を見ようとしぬ	そんな余裕は持てないとばかりに
海は月を抱いて輝き	始終うなり声をあげる風も
いまは眠れる花のように静かなのに	そんな眺めも眼中にない

こんなことならいっそ自分は	異教徒にでもなったがまだ
そうすれば草原にひとりたたずみ	自然をすなおに見れるだろう
海から立ち上がるプロテウスを見たり	トリトンのほら貝も聞こえてこよう

(ワーズワース「浮世のこと」壺斎散人訳)

蘆花も拝金主義や欧化主義に染まる日本を批評した作品を残している。また、蘇峰の転向<sup>103)</sup>に対して反感を書いた作品もいくつかある。『自然と人生』 「自然に対する五分時」 <田家の煙>に以下のような文章がある。

余は煙を愛す。田家の煙を愛す。高きに踞して、遠村近落の煙の、相呼び相応じつつ、悠々として天に上り行くを見る毎に、心乃ち楽しむ。然れども、市井の濁波今や滔々として村落に及び、田家淳僕<sup>104)</sup>の風次第に地を掃はむとし、賭博、淫風、奢侈、遊惰、争利のバチルルス<sup>104)</sup>、殆んど戸毎に侵入せんとする

(『蘆花全集第3巻』:82) (現代語訳Ⅱ-⑤)

明治政府の近代化政策は資本主義を導入し、富国強兵を目指していた。その余波で金銭至上主義の波が素朴な農村にまで浸透してきた。このような現象を蘆花は悲しんでいるのである。文明批評家としての資質を見せているくだけりである。「余は煙を愛す」から分かるように、煙は自由に空高く上っていく。天、すなわち高い理想へとむかっていくのである。また、煙と同類である白雲を自分の理想にたとえたと見られる。『青山白雲』や、『自然と人生』 「湘南雑筆」の冒頭に引用されている「青い雲、白い雲、同じ雲でも、わしや白雲よ。わがまま気ままに、空を飛ぶ。」の一節に通じる。立身出世より、自由な生き方が蘆花の夢見る生き方である。金銭に支配される都市の生活は生存競争にもまれて、自由は得られない。そこで田舎を訪ねて来たが、田舎までその弊害が浸透している。ワーズワースが現実に幻滅を感じて自然に戻ったことも通じるが、この自然も文明化に侵されてその命脈を保つことが覚束ないという認識が潜んでいる。

自然から学ぶという態度は蘆花の生き方である。『自然と人生』の標題紙の裏面に、ワーズワースの詩の一部を原文で掲げていることを見ても、ワーズワースの受容ははっきりと確認できる。これについては、後で考察する。

コローやワーズワースが都会を離れて自然を求めて郊外で生活しながら創作活動をしたように、蘆花も逗子の海辺、晩年には東京郊外の粕谷村に転居して創作活動を行った。自然に対する感受性は作品だけにとどまらず、蘆花の内面や生活様式にまでも影響を与えたことがよ

103) 日清戦争後の三国干渉に衝撃を受けた蘇峰が平民主義から国家主義に転じたこと。

104) ドイツ語の「Bazillus」《バチルルス》桿菌の総称。

くわかる。



### Ⅲ. <自然三部作>の構成と特徴

#### 1. 『青山白雲』

##### 1) 構成

1898年3月、蘆花が自己の文芸作品集として民友社から刊行された処女作である。「序」にはじまり、①「漁師の娘」②「恐ろしき一夜」③「沼山津村」④「南禅寺」⑤「夏の夜かたり」⑥「数鹿流の瀧」⑦「米国土蛮征討記」⑧「水国の秋」⑨「訪はぬ墓」⑩「夏の山」が収録されている。番号は筆者が便宜上、順序に沿ってつけたものである。

『青山白雲』全体に関する研究は吉田(1980)によって、初めてなされた。そこでは『青山白雲』を「自然と人事」を扱った作品集として分類している。「序」<sup>1)</sup>を除いた10篇の作品を三つに大別している。小説及び小品として①「漁師の娘」⑤「夏の夜かたり」⑥「数鹿流の瀧」⑨「訪はぬ墓」を、史伝として②「恐ろしき一夜」③「沼山津村」④「南禅寺」⑦「米国土蛮征討記」を、自然スケッチとして⑧「水国の秋」⑩「夏の山」を分類している。

本稿においてはおおそ吉田の分類に従う。小説及び小品と史伝の分類は吉田に従うが、ジャンルとして分類するために自然スケッチではなく、散文詩として各作品について考察することにする。

##### (1) 小説及び小品：4篇

①「漁師の娘」は1897年1月、蘆花が心機一転のために逗子に転居してはじめて書かれた作品である<sup>2)</sup>。蘆花は『富士』で「昨秋(注:2ヶ月前の1896年11月)遊んだ霞が浦を背景にとつて、人間に失望した親不知の女兒が自然に消え入る、といふ筋の散文詩であつた。」(『蘆花全集第17巻』:4)と述べている。

文体に関しては、2ヶ月前の旅にちなんで記した「刀禰河上の一昼夜」や「水国の秋」

1) 「序」については第Ⅳ章第2節「<自然三部作>に見られる自然認識」において考察するため、ここでは言及しない。

2) これについては第Ⅳ章第2節「<自然三部作>に見られる自然認識」及び第4節「「漁師の娘」について」において考察するため、ここでは詳しく述べない。



の自然描写に比べると、理解しやすく簡潔な文になっている。吉田(1980:23)はこれを「絵の修業による観察力の深化によるもの」と述べている。まさしくその通りであろう。心機一転した蘆花が湘南の自然の中で身も心も洗われながら、徐々に文章からも虚飾が取り除かれて素朴で簡潔な自然描写文に変化していく過程がはっきりと表れている。

⑤「夏の夜かたり」は1892年8月6日から21日にかけて『国民新聞』に連載された。天主教の伝道師の松井正夫が、伝道のため滞在した家で娘のきみ子と恋に陥り、結婚の約束までした。しかしそのために母の死目にあえず、伝道師の本分を忘れて恋に溺れたことで良心の呵責に耐えきれなくなり、小舟で沖に出て入水自殺する。しかし、きみ子は松井の死も知らずに戻ってくる日を待ち侘びているという話である。

全体的に暗く憂鬱な内容の小説である。松井はあまりに潔癖な性格である。若い男女が陥りやすい恋愛を罪ととらえる前途有望な若い伝道師は、本心ではないが愛するきみ子に一方的に別れを告げざるを得なかった。自分を愛してくれた母を一人で死なせてしまった親不孝の罪。伝道師である自分が一人の女性に心を奪われて、神のみ言葉を伝える重要な任務をおろそかにした罪。清い女性を恋愛の道に引き入れてしまった罪。自分を指導してくれた師友の期待を裏切った罪。これらの罪による良心の呵責は、松井を死の淵に引きずり込んでしまった。教師がすでに悔いた罪は赦されたと言っても、自分自身が神に赦された実感がなければ、何の助けにもならない。傷心の松井は山や海を訪ねながら心を癒そうとするが、最期には海で自殺してしまう。あまりに良心的で潔癖な性格の松井がなぜ死を選ぶしかなかったのだろうか。神の教えを知って、自然と交わり、思索にふけても神との霊的な交流がなければ、解脱も救いもないということがこの小説から読み取ることができる。

明治・大正期に蘆花と同じように活躍した文学者の中にもキリスト者や良心的な人物は数多くいた。中には、松井のように信仰を捨てたり、自ら生命を断ったりした人物もいた<sup>3)</sup>。蘆花自身も自分の罪を自覚し、ストイックな人物であった。自殺を考えたこともあり、信仰から遠退いたこともあったが、自然に親しみ、自然から神に遡り、その背後に神の存在を実感したことが、蘆花の大きな特徴であったことがわかる。

最後にきみ子が恋しい人を待つ姿は、蘆花の恋人であった山本久栄を想定して、自分なりに自己中心的な夢を描いたのではないかと思われる。「夏の夜かたり」が執筆されたのは、破局後5年経った頃で、久栄の死はこの約1年後であった。

<sup>3)</sup> 北村透谷、有島武郎、芥川龍之介などがある。

⑥「数鹿流の瀧」は1895年8月25日に『家庭雑誌』に掲載された。以前に聞いた話を思い出しながら書いたものである。国道工事のために罪人を動員して、そこで起った悲劇である。罪人を人とも思わない悪徳看守長に復讐しようと二人の罪人が計画をたてるが、寸での所で看守長は悪運強く生き残り、二人は滝に落ちて死んでしまうという話である。「残念」という声が滝の怒涛の音に響いて二人の姿が滝に消えていく哀れな姿は、人生の不条理と悪への審判がそのまま残ったことに対する憤りを読む者の心に呼び起こす。後味の悪い話ではあるが、こうした悲劇を書き留めることで、二人をはじめとする名も無き人々の恨みを慰め、冥福を祈る心を読者に求めたのであろう。

⑨「訪はぬ墓」は1895年5月10日に『家庭雑誌』に掲載された。これは1888年熊本での謹慎生活を送った時<sup>4)</sup>、蘆花が下宿していた家の一人娘の矢野政子にまつわる随想である。蘆花は熊本を離れて7年間、矢野家とは何の交流もなかった。1895年1月に愛子が両親と異母兄の病気の知らせを聞いて帰省した際<sup>5)</sup>に、昔の下宿先を訪れて書いた小品である。

「十字架なくば、栄冠なし。征清大勝利の後には、思ふに無数の悲劇あらむ。余は其最も簡単なる一を知れり。」という書き出しから始まるこの作品は、名も無き女性の思い出が中心になっている。政子がまだ12、3歳の少女の頃の記憶を書き留めたものである。愛らしい少女の細やかな描写は、蘆花らしい情緒と哀惜にあふれている。両親の愛を一身に受けていた少女は傷心の蘆花に慰めとやすらぎを与えた。愛と幸せの化身と思われた少女が結婚後、夫の出征中に亡くなった<sup>6)</sup>ことを人づてに聞いた蘆花は、人の世の無常と残された父母の苦しみに思いをはせている。この薄幸の少女への思い出は、吉田(1980:24)も指摘している<sup>7)</sup>ように、1893年に他界した山本久栄と重なって見えたことは間違いないと思われる。

## (2) 史伝：4篇

②「恐ろしき一夜」は1895年9月10日と25日に『家庭雑誌』に掲載された。これは熊本

4) 新島襄の妻の姪・山本久栄との恋愛が周囲や家族に反対され、心ならずも久栄と別れなければならなかったことで、蘆花は久栄を裏切った形になった。良心の呵責と失恋の傷みで蘆花が同志社を出て自暴自棄になって地獄のような逃避行をした事件のこと。この直後に叔母の竹崎順子に助けられて熊本英学校の教師になり、謹慎生活を送っていた。当時は蘆花一家は東京にいた。

5) 蘆花も愛子の後を追って熊本に帰ったが、両親も異母兄も相次いで亡くなり、愛子もチフスに感染して重態になり約50日間入院した。蘆花夫妻が東京を留守にした期間は100日ほどであった。

6) これは後に執筆される『不如帰』の主人公夫妻が日清戦争に出征した夫と病床の妻であったという設定と相似している内容である。これをもとにしたことも考えられる。

7) その根拠に、創作物であるにもかかわらず、初出に「敬亭居士翻案」とあることを指摘している。カムフラージュを施していることで、蘆花の久栄への未練が強かったとしている。おそらく時期的にもそのように考えられるので、筆者もこの見解を取り入れた。

の神風連の乱を実際に見た蘆花の体験に基づいて書かれている。1876年10月24日の夜、敬神党とも呼ばれる神風連の不平等士族が熊本鎮台<sup>8)</sup>と県庁を襲撃した。蘆花は彼らを以下のように評価している。

彼等は実に封建武士の好所短所を代表せる者なり。敬神は彼等の宗教也。忠君は彼等の主義也。攘夷は彼等の素志也。武芸は彼等の日課也。剛毅質直は彼等の道德也。節操清肅は彼等が婦人の生命也。彼等は実に封建社会に於て始めて棲息し得るものなりき。

(『蘆花全集第3巻』:236~237)

しかし、維新の波は彼等の宗教、主義、素志、日課、道德、生命の全てを否定するものに過ぎなかった。彼等は次第に孤島の中に閉じ籠められつつあるという実感を持ち、反抗精神が高まってきた。そしてついに200人の士族が熊本城下で司令長官、県令を襲撃し、軍団と戦った。

多くの者は捕らえられたり、自決したりし、その遺族らも悲しい運命を辿った。時代の流れに乗ることのできない頑固者の戦いは19年前のこととして、今では過去のものとなってしまった。蘆花は今の時代を「世は開明になり、伶俐になり、随つて軽薄になり、臆病になり」と批判しながら、昔の恐ろしく頑固で恐ろしく真摯で恐ろしく熱心であった神風連に思いをはせている。国家的に見ると、彼等は国に歯向かい、官吏を殺害した不穏分子である。しかし蘆花は彼等を時代に乗り遅れた頑固者であると見るが、その真摯さと熱心さを尊重している。当時の時代を強く批判はしないものの、彼等に対する深い同情と追悼の意思を持って書かれたことがわかる作品である。

③「沼山津村」は原題「横井小楠先生の話」として1895年11月10日『家庭雑誌』に掲載されたものを大幅に改稿したものである。横井小楠は蘆花の父一敬の師であり、叔母つせ子の夫であった。小楠には会ったことはなかったが、西南の役当時、戦争から避難して沼山津村に二ヶ月ほど滞在したことがあった。蘆花が帰省した際、この村を通り過ぎながら思い出した小楠の人柄や逸話を紹介している作品である。横井小楠は維新の十傑<sup>9)</sup>の1人とされる

<sup>8)</sup> 明治前期の陸軍の軍団。1871年に鎮西（小倉）・東北（石巻）・東京・大阪に設置。73年徴兵令施行後は東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本の六鎮台とした。88年師団と改称(『広辞苑』:1695)。

<sup>9)</sup> 維新の十傑とは、1884年3月刊、山脇之人『維新元勳十傑論』において、倒幕・明治維新に尽力した志士達のうちで幕臣以外の10人を指す ([ja.wikipedia.org/wiki/維新の十傑](http://ja.wikipedia.org/wiki/維新の十傑))。

が、他の人物に比べると現代ではあまり知られていない。そうした中でこの歴史的な人物の日常に関する記録を情感込めて伝えたこの作品は、伝記的価値が高く興味深い。

小楠の人柄は母親思いで、子煩悩。しかも兄やその遺児らにも誠心誠意尽くした。「真に思想の人」であったため、どこにいても考えがふと浮かぶと、十分に考え尽くした。身分に関係なく、自分を訪ねて来た人間や、道行く百姓や商人にも親しく話をした。癩癩はあったが、後腐れはなく、質素な生活をしたことがわかる。「身は沼山津の小村に隠れても皇国と云ふ日本と云ふ一念は不断先生の胸に蟠つて、憂世の念片時も心頭を去らなかつた」と評している。思想家としての側面と、家族や弟子思いの人柄から、傑出した人物であったことが伝わる作品である。

④「南禅寺」は原題「叔母君横井つせ子」で1895年1月10日『家庭雑誌』に掲載されたものである。前出の「沼山津村」で横井小楠に関する伝記を掲載しているが、蘆花は「南禅寺」に重点を置いていたと思われるほど、叔母への愛情が感じられる作品である。

蘆花の母久子は矢嶋家の一男七女の四女で、三女の竹崎順子<sup>10)</sup>と五女の横井つせ子は甥にあたる蘆花を非常に愛してくれたという<sup>11)</sup>。蘆花は自分には三人の母があると公言していたほど愛情の深い人物であったようである。つせ子は親子ほど年の違う横井小楠の後妻として嫁いだ。夫と姑に仕えて嫂とその子供だけでなく妾とも同居し、客人をもてなす苦勞をした。心の清いつせ子は心をこめて仕え、精進し、小楠亡き後は2人の子女をりっぱに育てた。短編ではあるが、尊敬すべき叔母の生涯を記録に残そうとした蘆花の真心が感じられる。後に『竹崎順子』<sup>12)</sup>を執筆しているが、それに先駆けた烈女伝として位置付けることができる。

⑦「米国土蛮征討記」は1895年7月3日から23日にかけて『国民新聞』に連載された。

10) 竹崎順子(1825~1895)は横井小楠門下の竹崎茶堂と結婚するが、1877年に夫が死去した後、10年後に洗禮を受け、1878年から熊本女学会(注:後の大江高等女学校)で教育者として活躍した。山本久栄との破局で自暴自棄に陥っていた蘆花に無条件の愛情を示して、蘆花の再起の機会を与えた人物。

11) 矢嶋家の竹崎順子・徳富久子・横井つせ子・矢嶋楯子は「熊本の猛婦」、「四賢婦人」と称された。矢嶋楯子(1833~1925)は禁酒、娼娼の婦人矯風会を創立、国際的に活動した華々しい経歴を持つ人物であった。しかし矢嶋楯子に関しては蘆花が病床にいる彼女に過去の過ちを懺悔するようにすすめたり、死後にも執拗に叔母の秘密を暴露する文章を書いた。夫に仕えず2人の子供を置いて離縁したこと、妻子ある男性との不倫で子供を産み、その子も結婚後、不倫を犯したことを神の前に悔い改めるべきであったというものである。性格も男勝りであった叔母は親族と争うこともしばしばであった。母をはじめ順子やつせ子は難しい夫や姑に仕えて苦境にもよく耐えて、りっぱに妻として母親として生きてきた。しかし楯子は家庭を捨て、不倫の結果隠し子までいるが、社会的には大成功して官位まで受けた人物であった。「良妻賢母」を説く人物の実生活が全くそれとは裏腹の人間であったことが蘆花には赦しがたかったのであろう。

12) 1923年4月刊行。執筆を決意したのは死後17年経った1922年2月に熊本に滞在し、大江女学校で講演したことがきっかけであったと考えられる(中野:1984c:329)。

アメリカの先住民のインディアンと戦ったある少佐の体験談を翻訳したものである。戦いの数年後、少佐がある先住民と戦争について昔話をしたところ、先住民は静かに自分の胸の傷跡を少佐に示して静かに去っていく所で終わる。先住民が見せた行動は無言であるが、雄弁よりも力がある。戦争の虚しさを問い質す余韻のある作品である。

しかし、『青山白雲』に収録すべき内容であるか、疑問が残る作品である。翻訳物である故、蘆花自身の感情移入はないが、共感するものがあったからこそ載せた作品であると言える。また、連載時期が日清戦争後であるから、戦争の惨さを間接的に伝えようと意図した作品であると推測できる。夫や息子を失った先住民の女たちや残された子供たちの悲しみへの同情を通して、ある種の教訓を伝えようとしたと考えられる。敗者側の先住民の行った行動から、蘆花のヒューマニズムと平和思想の一断面を垣間見ることができる。

### (3) 散文詩：2篇

⑧「水国の秋」は1896年11月23日の『国民新聞』に掲載された「刀禰河上の一昼夜」と1896年12月6日と13日に『国民新聞』に掲載された「水国の秋」とをあわせて改稿したものである。この旅行が「漁師の娘」の舞台になったことは前に述べた。この執筆時期は悪夢のような「どん底」<sup>13)</sup>の年とされる1896年の終りであった。この年は執筆も写生も何もかもがうっとしく、私生活においても女中の自殺や、新しい女中との浮気事件など自堕落な生活が続いていた。しかし、10月25日の誕生日に「今より後、吾また決して奴隷たらじ。」(『蘆花全集第16巻』:465)と誓いを立てて、「どん底」から脱出するきっかけを掴んだ。「頭がすうとした」蘆花は船旅を楽しみながら霞ヶ浦を目指す。

犬吠埼の夜明けの自然描写は『自然と人生』に見られるものになりに近いことがわかる。

東の空は何時しか燃ゆるばかり朱紅色になり、見るが内に一分ばかり流を出づるものあり。  
眩ゆくして見るべからず。ああ是れ日の海を出づるなり。真に瞬間もなし。呀と云ふ間に、分より寸、眉よりして眼、鼻よりして口、今海を離るるかと思へば一道のゆらゆらと万里の太平洋を駛りて、忽ち眼下の磯に到る頃は、吾が居る室内赫と明くなりて、行灯の光白うなりぬ。

(『蘆花全集第3巻』:333～334) (現代語訳Ⅲ-①)

日の出の瞬間を刻々とらえた観察力で自然をスケッチする方法は、漢文調ではあるが、

<sup>13)</sup>『蘆花全集第16巻』377～478頁に詳しい回想内容がある。

優れたものが見られる。また、浮島に行って漁村の風景を写生したり、人々の生活を観察する蘆花自身、自然を楽しみ、蘆花の心が解放されていく様子がかがえる。

浮島や蘆花洲の自然描写は「漁師の娘」の舞台を髣髴とさせ、最後のローレライ伝説を連想させる場面は、「水国の秋」の「漁夫月に乗じて一曲潮来の古謡を歌ひ来る声縹渺へうべうとして空明に散ずるを聞かば、諸君腸を断たらざらんと欲するも豈に得べけんや。」(『蘆花全集第3巻』:348)からイメージされたことがわかる。

蘆花は大自然で生活する漁民たちの生き生きとした姿に魅了された。自然の恵みに感謝する素朴な態度だけでなく、洪水などの災害や貧しさにも耐えてきた人間の哀愁に共感したと思われる。蘆花も徐々に自然によって癒されて「どん底」から立ち上がり、自然詩人としての側面を見せる作品となっている。

⑩「夏の山」は書き下しの作品で、1895年の初夏に執筆された旧稿である<sup>14)</sup>。1883年の夏、蘇峰と共に阿蘇山を訪れた際の記憶をもとにしている。蘆花の故郷にある阿蘇山は幼いころ、生活の一部であった。阿蘇の美しさの一つずつ紹介する中に、自然は上帝の賜物であると捉えている。そして自然は美しく人間に優しいだけではない。山頂に近づくにつれて風雨が激しく霧が広がっていく。烈風、雲霧、懸崖、硫黄の池、噴火口の轟々と響く音に地獄を見た感が出て、「天然の前に拝伏」した蘆花であった。自然は美しく、恵みを与えてくれる存在でもあるが、簡単に人を寄せ付けない側面がある。厳しく、時には「死」をもたらす存在でもあることを語っているのである。

## 2) 特徴

刊行9日前の1898年3月16日の『国民新聞』には「青山白雲は名の如く青山白雲なり。自然を経として、人事を雑(緯)へ織りたるなり。載する所、短編の小説あり、実話あり、逸事あり、追懐あり、紀行文あり。記する所一ならずして、之を貫くものは青山と白雲と。」といった広告文<sup>15)</sup>が掲載されている。

この宣伝文に従って分類すると「序」からはじまり、小説に「漁師の娘」、「夏の夜かた

<sup>14)</sup> 蘆花はこれについて『富士』(『蘆花全集第16巻』:355)で「何時かは書くべき其筆ならしに、熊次は阿蘇の憶出を書いてみた」と回想している。

<sup>15)</sup> 『蘆花全集第19巻』に収められている。沖野岩三郎は解題(19)で蘆花本人の筆であるかどうかは不明だとしているが、吉田は蘆花によると思われる文としている(吉田:1980:19)。

り」、「数鹿流の瀧」、実話に「米国土蛮征討記」、逸事に「沼山津村」、「南禅寺」、追懐に「恐ろしき一夜」、「訪はぬ墓」、随筆形式の紀行文に「水国の秋」、「夏の山」が相当する。ただし「夏の夜かたり」と「数鹿流の瀧」は短編小説風ではあるが事実をもとにしているため逸事にも分類され得る。また、「沼山津村」と「南禅寺」は、横井小楠とその妻について、蘆花の追憶と史実が入り混じっており、実話とも逸事とも追懐ともいえる作品である。「恐ろしき一夜」は蘆花の幼い頃の実体験をもとに、史実である神風連の乱について記しているため、実話と追懐が入り混じっている。「訪はぬ墓」は自らが淡い思いを寄せた女性についての追懐である。「米国土蛮征討記」はアメリカの実話を翻訳したもので、人生に関する内容を取り扱ってはいるが、独立した内容としても悪くはない。しかし、インディアンとの戦闘を描いたものであるため全く異質のものとなっており、唐突な感がある。まさしく今まで書いたものを「掻き集めた」文集である<sup>16)</sup>。

「序」には写生修業についての記述がある。これは1898年1月に『国民新聞』に掲載された素人写生家の懺悔である。写生修業に明け暮れて2年、絵画は上達しなかったが、画のことにだけだけでなく、全てのことに何もうる所なかったことに気づいたという。

「願はくば心を虚しうし赤子となりて俯して(注:謙虚な姿勢で)造化の秘書の第一頁を開かん」として、絵画による自然描写だけではなく、文章で自然描写を成そうとする自然詩人としての自覚と抱負を述べている。

『青山白雲』刊行当時は文壇内外ともに反応はほとんどなく、蘆花の期待には全く反したものであった。内容に統一性がない上に、自然描写も『自然と人生』に見られるような斬新なものではなかったため、当然の結果であった。刊行当時は意識的に無視された<sup>17)</sup>面もあり、発行部数は伸びなかった。しかし、1890年刊行された『不如帰』が空前の大ベストセラーになった後では、読者らの関心を集めた作品である。

### 3) 「青山」と「白雲」の持つ意味

この書名が示すように、「青山」にたなびく「白雲」のイメージは、典型的な東洋的自然

16) 蘆花自身『富士』でこのように回想している。「十年書いて、これはといふ小品一つない。あらん限りの中から掻き集めて、(中略)薄つべらな小冊を満たすに、準翻訳の一篇が加へられねばならなかった。」(『蘆花全集第17巻』:133)。

17) 出版当時は文壇の反応もなく、読売新聞社だけが「夏の山」はおもしろいと評価した。あとは意識的に無視されていた面もあった(『蘆花全集第17巻』:136)。

を表象している。また書名が標榜する無欲と無心のイメージから、作者蘆花の精神的志向をうかがわせる。刊行の前年、蘇峰の勅任参事官就任に際して送った書簡がある。「青雲白雲道同じからず」(1897.8.2.)と「青い雲、白い雲、同じ雲でも、わしや白雲よ。わがまま気ままに、空を飛ぶ。」(1897.10.25)という内容から『青山白雲』と名付けたと吉田は述べている(吉田:1980:20)。この吉田の見方は的を射ていると思われる<sup>18)</sup>。功名を立て、立身出世をしようとする志を意味する「青雲の志」から、「青雲」は言論や政界で活躍し、野望を持っている蘇峰に譬えたのである。兄に対する皮肉をこめた譬喩として青雲が使われ、その対比として白雲が使われていると言える。「白雲」に自分をたとえた蘆花は自由を愛する無欲な生き方を目指していることがわかる。

また、「青い雲、白い雲、同じ雲でも、わしや白雲よ。わがまま気ままに、空を飛ぶ。」の一節は『自然と人生』『湘南雑筆』の冒頭に引用されている。自由を願う蘆花の精神世界が凝縮されていると思われる。自然の中で拘束されることなく、自由に心のおもむくままに生きていこうとする平民的な蘆花は白雲である。青雲に譬えられる兄は、立身出世の為には信念を曲げることも辞さない人物に見えたのである。この時期における蘆花の社会的視野は蘇峰のそれとは雲泥の差であった。

この時期は、蘆花が精神的にどん底の状態から回復しようとする期間でもある。兄への対抗意識以上に、自分は平凡な白雲だとして自嘲する心情も皆無ではないだろう。

さらにもう少し『青山白雲』の出版に先駆けて蘆花自身の精神的自立を伺わせる出来事を挙げてみる。1896年5月に蘇峰が世界周遊へ旅立ってから数ヵ月後の10月25日、それまで父や横井小楠から受けてきた精神的な重圧からの解放<sup>19)</sup>と、兄からの独立宣言ともいえる事件があった。

十月二十五日が来た。熊次の二十九誕辰である。(中略) 嗚呼吾は久しき奴隸にてありよ。家兄の奴隸なりき。情欲の奴隸なりき。あらゆるもの吾は奴隸なりき。今より後、吾また決して奴隸たらじ。何人にもあれ、何ものにもまれ、わが自由を碍ぐるものあらば、即我敵也。而して熊次は頭がすうと軽くなるやうに思えた。

18) 『蘆花日記』(注:1914年から死の8ヶ月前、1927年1月7日までの13年間1日も休むことなく書き続けられた。)には蘇峰の自宅が東京青山であったため蘇峰のことを「青山」と記している。『青山白雲』が刊行されたのは蘇峰が青山に転居(1889年5月)する前であったので、それとは関係ない。

19) 父の「言有物行有恒」の額と横井小楠の「骨肉は恩情より重く、兄弟は先、夫婦は後」と書かれた掛物は1896年の夏、蘆花が破り捨てた。



このように兄をはじめとする、家族からの精神的重圧を乗り越えるために取った姿勢が無欲な生き方といえる。蘆花は独特の方法で鬱屈を振り払って徐々に自立していく。気が晴れて少しずつ仕事に向かうようになっていた。その年末、兄がトルストイを訪問して手紙を送ってきたことで、今まで引き延ばしてきた「トルストイ」の執筆の決意ができた。翌1897年の元旦、期するところあって「子曰三十而立」に引っかけて「しら雪の富士の高嶺はたかくものぼらばのぼる道はありなむ」という和歌<sup>20)</sup>を書いた後、蘆花夫婦は1月3日に神奈川県の逗子<sup>21)</sup>に転居した。

1897年10月25日は蘆花の30歳の誕生日で、「三十路にて立つ」という書を書いて自立を決心する。蘆花としては以前の作品よりは佳作といえる「漁師の娘」「トルストイ」「無声詩人<画家コロオ>」などが発表される。しかし、まだ兄にも会社にも認められていないという焦りが残っている。兄の歩む道と自分の道とは違っていることを認識して、自由気ままに生きる方が自分らしいということを「青い雲、白い雲、同じ雲でも、わしや白雲よ。わがまま気ままに、空を飛ぶ。」という文章ではっきり宣言したと思われる。

「青雲白雲道同じからず」という意味の表現は、1898年1月のドーデの翻訳『誤解』の序に見られる(吉田:1980:20)。『自然と人生』の「湘南雑筆」の序にも繰り返されている。それだけに『青山白雲』という題名に込められた意味は深いと言える。

## 2. 『自然と人生』

### 1) 構成

『自然と人生』は冒頭に小説「灰燼」、散文詩「自然に対する五分時」、小品「写生帖」、散文詩「湘南雑筆」、評論「風景画家コロオ」の順で構成されている。かなり散漫な構成であり、一冊の単行本として刊行されたには統一性がない。しかし、作家は「自然」と「人生」をキーワードに、真心を込めて編集されたものであると思われる。

<sup>20)</sup> これは『自然と人生』「風景画家コロオ」の冒頭言にある。

<sup>21)</sup> 相模湾に面する都市で、現在は東京や横浜のベッドタウンであるが、当時は海水浴場を利用する人々が訪れた保養地で、今とはちがって静かな自然の風景が残っていた。

1900年8月の『自然と人生』の刊行にあわせて1900年7月5日付『国民新聞』に蘆花自ら書いた広告文がある。

「題して自然と人生と云ふも、地人の関係を科学的に論ずるにあらず、畢竟著者が眼に見耳に聞き心に感じ手に従って直写したる自然及人生の写生帖の其幾葉を公にしたるもののみ」以上は著者自ら謂ふ所。

自然を主とし、人を客とし、旧稿の粹を抜き新作の秀を萃めたる小品の記文、短編の小説、無韻の詩とも言ふべく、水彩の畫とも云ふ可きもの、無慮百篇を一巻に収む。銷夏の読料には尤も妙ならん。（『蘆花全集第19巻』：512）（現代語訳Ⅲ-③）

また、1900年10月4日付『国民新聞』にも再び以下のような広告文が掲載された。

あり  
自然を主とし、人間を客とせる、小品の記文、短篇の小説、無慮百篇を一巻に収む。  
紅塵の几邊、緑蔭碧海の邊、庶幾くは一陣の清風を齎し、幽思の友となるを得んか。  
（『蘆花全集第19巻』：513）（現代語訳Ⅲ-④）



広告には100篇とあるが実際の構成は随筆87篇、小説1篇、評論1篇である。漢文調の美文を駆使したこれらの名文は、教科書にも掲載<sup>22)</sup>されるほどであり、広く愛好されて一時代の文章の手本とされた。

巻頭には、小説「灰燼」を掲げ、巻末には評論「風景画家コロオ」を収め、その間に「自然に対する五分時」(29篇)、「写生帖」(11篇)、「湘南雑筆」(47篇)を収録した。

1898年1月25日に『国民新聞』に掲載された『自然と人生』「自然に対する五分時」の初めに収録されている〈此頃の富士の曙〉は好評を得た。この作品に寄せられた好評は、蘇峰の知るところとなり、今まで会社の半お荷物状態であった蘆花の評価は以前とは全く打って変わり、自然詩人として読者の注目を集めはじめた。〈此頃の富士の曙〉に引き続いて、同年発表された作品の多くと、1899年1月1日から1年間毎日欠かさず記された自然日記「湘南雑筆」に至るものが『自然と人生』に収録されている<sup>23)</sup>。

<sup>22)</sup> 戦前の小・中学校の教科書に見られる。

<sup>23)</sup> 発表年月日がはっきりしているものうち『自然と人生』に収録された中で最も古いものは「自然に対する五分時」〈山百合〉(初出は1893年7月30日)である。

巻末の「風景画家コロオ」の中で、蘆花はコロオについて「自然の児。画毫を握れる詩人」であり、「自然を愛し、自然を解し、自然に同情を有し、而して活ける自然を伝ふることを務めた」画家であると評価している。これらコロオに関する評伝は作品だけでなく、生き方も含めて蘆花自身が目指したことが述べられている。

## 2) 特徴

### (1) 小説：「灰燼」

「灰燼」は『自然と人生』刊行の約半年以上も早い1899年11月末から12月にかけて執筆された。当時『不如帰』の校正がほぼ済み、新年小説として民友社に送られた時期である。小説の素材は蘆花が姉の山川常子から聞いたエピソードによる。それに空想を加えて書いたものが小説「灰燼」である<sup>24)</sup>。『不如帰』の創作の経緯と似ている側面がある。「灰燼」の詰腹事件の真相について、蘆花が特に調べた跡はなく、ただ「阿母、あなたも！」<sup>おっかさん</sup>の一言が「小説だ！」と閃きを与えたことがきっかけとなっている。

「灰燼」に関しては、第IV章第3節「「灰燼」について」で言及する。この小説の主題は前近代的で、勸善懲悪的要素が強い。しかし、この中には蘆花兄弟の葛藤が見られる。冒頭の一節(『蘆花全集第3巻』:4)はこの世に宝を積むことの愚かさ、天に宝を積む生き方を重要視するイエスの言葉<sup>25)</sup>が教訓として置かれている。

主人公の上田家の三男の茂は西郷軍に走ったが、味方からはぐれてしまい、生命辛々母親を想いながら家に帰ってくる。しかし、二男の猛が両親に家の恥だと言って、茂を切腹させるべきだと言う。茂は母親にすがすが、母親は父親と猛に逆らえず、茂はそのまま切腹してしまう。良心の呵責に耐えられない母親は、ある風の強い晩、茂の幻を見たとき錯覚して行灯を倒してしまう。風にあおられて火事は拡がり、屋敷の全ての財産が一瞬にして焼けて灰になってしまった。父親はその衝撃で亡くなり、気の狂った母親と知恵遅れの長男覚は親戚に預けられる。猛はその後村に住むこともできず、残ったわずかな財産を売り払って故郷を捨てるという話である。

多くの財産は、暴風によって全て焼けて灰と燼に化してしまったが、その次に現れる自然スケッチは美しく、時には厳しくもあるが、いつも変わらず存在している。その自然は偉大な英雄

<sup>24)</sup> 『富士』に当時の状況が回想されている(『蘆花全集第17巻』:282)。

<sup>25)</sup> ルカ伝12章33節とヨハネ伝6章27節にある聖句。

や栄華をきわめた人物が短い生涯を終えても変わらない。エマソンの「自然は、われわれのうちに、立派な注意力を育ててくれる。自然はあやまちを許さない。自然の賛成は賛成であり、自然の反対は反対である。」(エマソン:2007:76)という言葉のように、主人公一家は神の審判と考えることのできる、自然の審判を受けたことがわかる。

(2) 散文詩：「自然に対する五分時」、「湘南雑筆」

「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」は『自然と人生』を代表する秀でた作品群である。「自然に対する五分時」の冒頭を飾る「此頃の富士の曙」をはじめとする作品の主な舞台は、湘南逗子と上州伊香保である。特に富士山と相模灘、上州の榛名山をはじめとする山々と谷川である。山と水の描写が美しい。人間の生きざまの描写には、色彩の陰影を表す言葉と漢文調の美文が用いられている。そこに登場する人間は実際そこに居る者にとどまらない。蘆花は自然を観察しながら、ナポレオンや歴史上の偉人、さらにはイエス・キリストや聖人、ついには人類始祖のアダムまで登場させていく。作者は連想作用を利用して自然を捕らえている。これは蘆花の散文詩に見られる描写の特徴である。

まず、富士と相模灘をテーマとした作品を挙げてみると、「此頃の富士の曙」、「相模灘の落日」、「自然の色(三)相模灘の夕焼」、「海と岩」、「相模灘の水蒸気」、「富士の倒影」がある。富士は湘南の「永遠の浜」からも、執筆当時蘆花夫妻の住んでいた柳屋の部屋からも見る事ができた。蘆花が自然詩人として脚光を浴びる契機となった「此頃の富士の曙」で、蘆花自身が富士の美しさに感動し、読者にも伝えている。蘆花の自伝的大作の題名が『富士』であることから推測されるように、富士山は蘆花にとって理想とも言えるシンボルである。阿蘇山を雅号とした蘇峰を越えようとした蘆花の思いが感じられる。「風景画家コロオ」の冒頭にある「或時富士を眺めて しら雪の 富士の高嶺は たかくとも のぼらばのぼる 道はありなむ」<sup>26)</sup>という歌からも感じられる。

「相模灘の落日」では「落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する」と感じ、日が暮れた後には「偉人の没後実に斯の如し」と感じる。蘆花独特の描写である。散文詩の中には自然を通して偉大なる人物へと思いを馳せ続ける特徴が見られる。

試みに或大河の詩に立って (中略) 無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流れを想ふのである。(中略) 羅馬の所謂大帝国も斯く過ぎてしまったではないか。(中略)

26) 初出は1898年1月1日付『国民新聞』。新年の決意を表す詩である。

亜歴山、那破烈翁も、此の通であつた。ああ、彼等は今何在哉。(中略) 永遠の二字は、海よりも寧ろ大河の濤にあつて思ふ。(『蘆花全集第3巻』:43)(現代語訳Ⅲ-⑤)

惨として風雨の来襲を待つ状、ウオトルルーの英陣も斯くと思はれて、沈鬱悲壯、跌宕なる自然の威力の森然として身に浸むを覚ふ。

(『蘆花全集第3巻』:53~54)(現代語訳Ⅲ-⑥)

大河の流れや激しい風雨を見て感じることは、ナポレオンやアレキサンダー大王のような英雄である。自然は永遠で、時には非情でもあるが、その大自然の前に佇む蘆花の心は厳かで、深い思索にふけるのである。カーライルの『英雄崇拜論』に感化された蘆花の心の世界は以下の文章から見ても明らかである。

大河を隔てて呼びかはす此鶏声は実に宣い、チエルシアの賢とコンコルドの哲<sup>27)</sup>とは、実に斯くの如く大西洋を隔てて呼びかはしたのであらふ。

(『蘆花全集第3巻』:44)(現代語訳Ⅲ-⑦)



日常生活の齷齪に立雑つて、然も心は挺然として無窮の天に向ふ偉大の人物は、実に斯くの如くであるであらふ。自分は上州に行く毎に、山が斯く囁く様に覚ふのである。

(『蘆花全集第3巻』:45)(現代語訳Ⅲ-⑧)

アア百合よ、二千年の昔ユダヤの野に咲き出でて人の子の眼に触れ限りなき真理を伝ふるの便りとなりし百合よ、来る可き新しき国の園生に咲く百合よ、願くは爾がもてる清香の半ばを頒ちて吾に与へよ。(『蘆花全集第3巻』:64)(現代語訳Ⅲ-⑨)

自然の偉大さから偉大な人物たちに思いをはせている。崇高美の発見と言える。蘆花自身歴史上の偉大な人物を尊敬していた。また作品の舞台が主に水辺であることも特徴と言える。幼年期に水辺で育った蘆花の精神は水に親しみを感じるように刻印されたと思われる。これは

<sup>27)</sup> トーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795~1881) とラルフ・エマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803~1882) のこと。カーライルはイギリスの評論家・歴史家で、ロンドンのチェルシーに住んでいた。エマソンはアメリカの思想家・詩人でマサチューセッツ州コンコルドに住んでいた。エマソンが西欧を訪問した際カーライルに出会い、親交を深めた。

バシュラールの「物質的想像力」<sup>28)</sup>と結び付けられる。

以上のように自然の観察は偉人の発見と通じている。また、蘆花の観察眼は漁師や村人にも向けられている。自然を敬う心を持ち、自然と共生する人間の素朴な姿にも関心を見せている。

今起きて来た村人が、白い息を吹き吹き川に下りて、河水を掬んで嗽ぎ、顔を洗ひ、それから遥かに筑波の方へ向いて、掌を合して拜むで居る。ああ実に好い拜殿、と自分は思った。  
(『蘆花全集第3巻』:44~45) (現代語訳Ⅲ-⑩)

筆者は偉人を登場させる文章よりも、村人の素朴な生活を描写する作品の方が、よりリアルティーを感じることができる。人々が洗面する様子や拜殿している姿が、細密画を見るが如く描かれており、文章も簡潔で受け入れやすい。身近な人生に関する作品の方が近代性を持っている。

蘆花の自然観の特徴は汎神論的物活論として、擬人化が多い。これはエマソンの自然観やカーライルの英雄観の投影に見える。また、自然と永遠との対比はワーズワースの詩的世界に通じる。人間の生は一瞬の夢のように過ぎ去るものである。暖かい春の日に自然の中で「慈母の懷に抱かれて」いるように感じる時も一種の「悲哀」を感じる蘆花である。「自然はそれを愛する者の心を裏切ることは決してない」というワーズワースの言葉のように、自然は蘆花の絶対的な味方なのである。

最後の「田家の煙」では自然描写だけではなく、村落まで市井の濁り、つまり賭博、淫風、奢侈、遊惰、争利が全家庭に侵入していることを嘆いている。また、これを教化するために自分に能力があれば「良医」、「良教師」、「良牧師」の三つを村毎に送りたいと書いている。単なる社会告発や憂国の情を乗り越えた蘆花の平民への愛情と憐れみの情が読み取れる。このような観点は「写生帖」、そして『黒潮』などの社会小説につながっていく前段階であると見られる。

蘆花は1899年の元日から大晦日まで、一日も欠かさず自然の様子を書き続けた。これは

28) ガストン・バシュラール(及川馥訳)(2008)『水と夢:物質的想像力試論』法政大学出版局。「故郷とは広がりであるよりもひとつの物質である。(中略)創作している詩人のふける夢想はじつに深く、きわめて自然なために、思ってもいないうちに、自分の子供時代の肉体のイマージュを再発見しているときがある。根をととも深く張っている詩篇はしばしば独特の力を含んでいる。」(同書:12~13)という主張に相応すると見られる。

「徳富氏は自然の日記をかいたらおもしろかろう」という国木田独歩の言葉に刺激されて始められた。この時から、毛筆ではなく、ペンで文章を書くようになった。

「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」も全文自然文学のデッサンからなっているが、前者より後の方が一般的に評価は高い。中野(1984b:44)は、「後者がもっぱら自然そのものに迫って、なんの主観も感情もまじえず、あたかも鋭敏なカメラ・レンズのように、時々刻々、そしてまた季節による変化をそのまま端的に直写しているのにひきかえ、前者の多くが、文語体美文調ということもあろうが、どうかすると汎神論的、物活論的自然観になりたがることである。したがって、当然直喩が多い、隠喩が多い。擬人化がある。常套で煩しい」と述べている。

全般的には、湘南の四季の美しさをスケッチした作品が多く、漁師など、庶民の生活を織り混ぜたものもかなり見られる。中には3行だけの短い作品もあるが、「鯨釣り」と「海と合戦」のように蘆花が体験した臨場感あふれる物語もある。

自然はただ美しいだけのものではない。人生も同様である。時には荒々しく、暴風雨が人間を襲い、その中で人間は翻弄される。同じように「戦闘」も自然と人生のある一面である。自然を相手に必死に戦いながら言葉では表現しにくい興奮と、戦い終えた後の満足感が読み取れる作品となっている。

吉田(1977:4)も指摘しているように、蘆花の初期における自然スケッチについては、能文とはいえるが、美文調で、描写は類型的であり、新味に乏しい。そのような蘆花の自然スケッチを『自然と人生』にみられるような斬新な自然写生文とならしめた成因は、当然写生修業だけではない。ワーズワースの詩集、『あひびき』(1888)<sup>29)</sup>、『武蔵野』(1901)<sup>30)</sup>の影響、さらには儒教的な家族背景とキリスト教的素養、さらには1894年に刊行された『日本風景論』<sup>31)</sup>に勝る「美なる日本」を描くことへの熱意、コローやラスキンの写生論の感化、エマソン、カーライルの思想など、多方面にわたっているということが、多くの研究者らに指摘されている。

蘆花は写生旅行を通じて、自然と人間そのものが芸術であり、その深奥な世界を実感し

29) ツルゲーネフ(二葉亭四迷訳)(1888年)『あひびき』岩波文庫。

30) 国木田独歩(1901)『武蔵野』民友社。1898年発表時の題名は『今の武蔵野』。『源叔父』『忘れ得ぬ人々』など、18編を収めた文集『武蔵野』に収録したとき改題された。

31) 明治時代中期にベストセラーとなった志賀重昂の『日本風景論』(1894)は、日本人に新しい風景観をもたらしたと言われる。ナショナリズムの立場から日本の風景が変化に富み、優れていることを説いたものである。

た。このように写生文を書くテクニックと影響を受けた思想、文学、哲学、歴史などを織り混ぜて、大ベストセラー『自然と人生』を誕生させた。この後『不如帰』、『思出の記』、『みみずのたわごと』など卓越した自然描写文を生み出すに至る。

散文詩に見られる自然スケッチの特徴は昼より朝夕の自然を対象にしている。色彩と光陰の変化を鋭敏にとらえた作品が多い。それは刻々と変化する自然が映像のように表現されている。明け行く空に東雲がたなびく様子や、夕闇せまる漁村の風景などがその代表である。微妙な雲や風の動きも含めて動画のように文章として再現される。コロの風景面にそのまま通じる特徴である。

### (3) 小品：「写生帖」

これは11篇からなる人生のスケッチである。自然の描写と人生の喜怒哀楽を織り混ぜた作品である。人生の哀音の中に「無数の苦」、「無数の血」、「無数の涙」を感じる蘆花の実際に見たり聞いたりした話が綴られている。〈可憐児〉、〈海運橋〉では悲哀にみちた人生が描かれている。それを目の当たりにしながらも自分の無力さに嘆き悲しみ、憤りを感じる蘆花の苦悩が読み取れる。子供のない蘆花夫妻が、か弱い子供や婦人を思いやる心の表現は読む者にしみじみとした愛しさを感じさせる。

社会告発とも言える〈国家と個人〉では日清戦争の勝利に浮かれている姿に警鐘を鳴らす。一人の乞食が佇む姿を見て、餓え程悲しく恐ろしいものはないという。愛国忠君も良いが「願くば陛下の赤子をして餓へしむる勿れ。」と訴えながら、国家の大義名分の陰で弱い個人が犠牲になることを許さない平民主義者蘆花の姿がうかがえる。

〈桜〉は西南戦争時の思い出である。美しい桜の花を見て、戦いで命を落した男のことを思い出すという内容である。これについては第IV章第3節「「灰燼」について」で引用しながら考察する。〈兄弟〉は兄弟が争う姿を見て書いたものであるが、ここに蘆花兄弟の姿を見たと思われる。「余は悚然として震ひぬ」と言いながら、車中の皆が蘆花の前に座っている男を見たとある。蘆花は自分が見られているような心情であったほど、他人事ではなく、自分自身のことのように感じていることがわかる。

〈断崖〉と〈雨後の月〉は蘆花自身の体験ではないが、人間の妬みや背信の罪とそこから救いというテーマが見られる。〈断崖〉では妬みによって一瞬友の死を願った自分の罪と救いが見られる。〈雨後の月〉では男に裏切られた女性が、信仰によって恨みも悲しみも昇



華していく内容である。ここでは人間の罪と救いをテーマにしなが、人生の苦しみを宗教的な観点から解いていこうとしている。

〈吾家の富〉、〈晩秋初冬〉、〈夏の興〉は自然をテーマにした作品である。自然描写も四季の特徴をよくとらえており、短い記憶を書き留めた手帖を思わせる。

人生の苦痛をテーマにした作品が大半をしめているが、自然をテーマにした随想を所々に置くことで、重苦しさを軽減させている。戦争の陰で犠牲になった者たちの苦痛を代弁する蘆花の視線は、弱者への思いやりに満ちている。苦痛に満ちた人生も、お天道様の導きで悟りを開き、何らかの光を感じさせる〈雨後の月〉を最後に置くことで、読者らに希望を与えている。

#### (4) 評論：「風景画家コロオ」

1897年9月10日に『国民之友』に掲載された「無声詩人画家コロオ」を蘆花は『自然と人生』の巻末に収めた。当時、蘆花が自己の新生を決心して「心ゆくものを書かねば」と熱意を持って執筆した評論であったにもかかわらず、依頼とは違って六号雑録欄扱いに過ぎなかった。その事実で落胆し、非常に憤慨した。それに対する腹いせとして巻末に収録したという説もあるが、実際はそれだけの理由ではないと思われる。

コロオ<sup>32)</sup>はモダニズムを先取りしたバルビゾン派<sup>33)</sup>の画家である。コロオへの称賛は一種のナルシズムといえるほど、コロオという画家の中に、蘆花自身の姿を映し見ているような、絶対的な礼賛である(中野:1984a:356)。

画家をして高潔ならしめよ。彼をして六塵の欲に誘はれず、超然として専心一意其向ふ所に向はしめよ。彼が心をして娼嫉<sup>びしつ</sup>不平より自由ならしめ、彼をして世間の好悪に淡かしめ、単へに美と真とに走らしめよ。(『蘆花全集第3巻』:197)(現代語訳Ⅲ-①)

芸術家はこのような高潔な精神の持ち主でなければならぬと主張する、蘆花の「画人道徳論」(中野1984a:357)をふりかざしている部分は、大袈裟な感がある。ただ、こうした表現は蘆花の「灰塵」や『不如帰』の創作動機が「閃き」であったように、コロオの画を見て

<sup>32)</sup> Jean-Baptiste Camille Corot (1796~1875) は、19世紀フランスの風景画家。

<sup>33)</sup> 1830年から1870年頃にかけて、フランスで発生した絵画の一派。フランスのバルビゾン村やその周辺に画家が滞在・居住し、自然主義的な風景画や農民画を写実的に描いた。

閃いた感動を評論という形態で創作したことと同様の流れをくんでいるのではないだろうか。コロの画に対する批評は平凡だが、自然の児、絵筆を握った詩人であると言ったことから蘆花自身もコロのように絵筆ではなく文筆で自然をスケッチした詩人になりたかったと推察できる。その産物が『自然と人生』であり、コロに関する評論が巻末に置かれたのは蘆花がコロに深く感化された結果だと言えよう。

吉田(1997:12)は兄蘇峰に対する揶揄もあったことを認めてはいるものの、基本的にはコロの生き方の強調が第一であり、蘇峰からの自己確立の支点にもなったとし、平民主義的人間像の指標として書かれている面も認めている。それゆえ、巻末に見合うとする意見は説得力がある。

事業は真に人物の影にして、画家が造次にも画く所の一枚一枚は白日世間に自家の肺腑を曝すの懺悔録たるを思はざる能はず。畢竟詩は詩人、画は実に画家、豊田嘉禾を結び、澄泉清水を吐く、コロオの画はコロオを描きしなり。

(『蘆花全集第3巻』:208 傍線は筆者による)(現代語訳Ⅲ-⑫)

もとより芸術作品や文学作品の中には、作者の人間性が現れるのは当然のことである。この「懺悔録」という表現からわかるように、蘆花の作品は自然描写と懺悔が密接に関わっている。懺悔の性格が徐々に濃厚になる出発点らしきものが、「風景画家コロオ」に垣間見られるのは興味深い。蘆花が終生スケッチ旅行に没頭したことや、国内だけでなく中国やパレスチナ、ロシア、ついには世界一周旅行に出たことは、良い作品を創作するために要求される誠実な芸術家のあり方につながっていると見られる。「風景画家コロオ」という評論を通して蘆花の自然詩人として、さらなる跳躍への決意が感じられる。ひたすら真と美を追究する真なる芸術家としての生き方をコロから発見し、蘆花自身もそれを目指していたことがわかる<sup>34)</sup>。

### 3) 自然と人生の関係

「灰燼」では封建的家族主義によって犠牲になった主人公の怒りと悲しみが、暴風と火という自然の力となって人間に復讐する展開を見せた。親子の情という自然な感情を家制度とい

<sup>34)</sup> コローが晩年にはドーミエ(Honoré-Victorin Daumier)などの貧しい画家に援助を与えていたように、蘆花も前田河のアメリカ留学を支援していた。このような側面からもコロの生き方に影響を受けたことがわかる。

うもので、自然に反した行動をした人間への警鐘とも言える。

「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」では、美しい自然描写を中心に、歴史的な人物や、平凡な人々の姿がちりばめられている。自然は蘆花の傷付いた心を癒し、母親のような温かさで包んでくれる存在である。それだけではなく、嵐や戦いという厳しさも自然の一部である。蘆花は自然の中に出て、写生修業をしながら自然への開眼をなした。自然の刻一刻と移り変わる姿を書き留めながら、そこに生きる人間の生も描くことで、人間も自然の一部であることを主張している。自然の背後に存在する神を見たいと願った蘆花は、汎神論的な立場をとっていることが読み取れる。

「写生帖」は人生の苦しみと哀しみを描写した作品と、それを宗教的に昇華して救いの道を提示した作品と、自然描写の作品から成り立っている。さまざまな人生もまた自然の一部であることがここでも主張されている。

「風景画家コロオ」では、自然を描く芸術家の人格と作品の相関関係が述べられている。芸術家の作品は懺悔録であるとする蘆花は、自然と自然の一部である自分自身と真摯に向かい合おうとする。蘆花はコロオを理想的な芸術家として、コロオのように真摯で高潔な芸術家を目指したのである。



### 3. 『青蘆集』

#### 1) 構成

『青蘆集』は1902年、民友社から刊行された著作集である。『蘆花全集第3巻』の沖野岩三郎による「解題」以後、作品全体に関する分析は吉田(1987)がはじめて取り組んでいる<sup>35)</sup>。吉田は人生に関する作品は以下にあげる①～⑥と⑨で、自然に関する作品は⑦⑧と⑩～⑫のように分類している。筆者もそれに従って便宜上、以下のように番号をつけた。

まず、①「五分時の夢」は序詞とみられる<sup>36)</sup>。②「除夜物語」は童話の形式で、蘆花とみられる髭男が、自分の甥や姪に、「白痴の子供を主人公とする物語」を語るという内容である。③「燕尾服着初の記」は田舎紳士・蘆花の東京での夜会における体験談に人物描写を加えた作品である。④「零落」は深刻な小説である。⑤「慈悲心鳥」は蘆花が伊

<sup>35)</sup> 現在、＜自然三部作＞のうち『自然と人生』以外は入手困難な作品である。

<sup>36)</sup> 『蘆花全集第3巻』の解題(3)において沖野岩三郎が述べている。筆者は蘆花の白日夢であると考ええる。

香保で実際に遭遇した心中事件にちなんだ随筆である。⑥「伴助七翁」は勤儉貯蓄家の模範といえる老人の逸話を書いたものである<sup>37)</sup>。⑦「東信名勝の一二」と⑧「甲州紀行はがき便」は紀行文である。⑨「マリー、バシカアトセッフの日録」は1884年、23歳で夭折したロシアの女流芸術家マリ・バシュキルツェフの日記の紹介である。⑩「雨の水国」と⑪「両毛の秋」も紀行文である。⑫「吾初恋なる自然」は蘆花の半生と自然との関係を語った随想である。

本稿では吉田の分類ではなく、新たに文学のジャンルに分けてそれぞれ考察することにする。まず随筆として①「五分時の夢」③「燕尾服着初の記」⑤「慈悲心鳥」⑫「吾初恋なる自然」を分類した。次に小説として②「除夜物語」④「零落」⑥「伴助七翁」⑨「マリー、バシカアトセッフの日録」を分類した。最後に紀行として⑦「東信名勝の一二」⑧「甲州紀行はがき便」⑩「雨の水国」⑪「両毛の秋」のように分類してみた。

#### (1) 随筆：4篇

1901年11月に発表された①「五分時の夢」は序詞と考えられる。蘆花の見た白日夢に関する内容である。これは事実であるか、創作であるか、意見の分かれるところである。「見たこと聞いたこと以外書けぬ」といった蘆花の言葉をそのまま受けて、筆者はあえて事実にした内容であると見たい。蘆花がこのような夢うつつの状態で見た話はこれだけではない。1898年1月の「湘南歳除」と、「五分時の夢」の2ヶ月後に書かれた「『黒潮』の解」がある。これらをすべて創作であると見る方が却って不自然ではないだろうか。芸術家の創作にはインスピレーションがつきものである。凡人には無い、特殊な感性が備わっているものである。白日夢に出てきた人物が真の神でなかったとしても、それは問題ではない。その一種の啓示を己れの芸術にどれだけ表現できるかということは、その芸術家自身の能力次第である。蘆花は想像力に富んだ創作者であると言えよう。

①「五分時の夢」の内容は自分の才能の足らなさに嘆いて筆も進まない吾の前に「光れる者」が現われ、野原や森へいざなう。そして上帝と共に天にのぼり天国の城壁を見る。そこで城壁の小石にある名前が自分の名前であったことを知った吾は、胸が轟く。主は言う。

「汝見たりや、吾が城壁を築くもの尽く吾が石なり、大小なく、美醜なし、其の一を欠くべからず」という言葉で吾は目覚めるといふものである。そして、どんな小さなつまらない存在であっても、神の一部分であり、無二の存在であることに気付かされるのである。

37) 『思出の記』に登場する金貸し業の西内平三郎に似通った人物像が興味深い。

吉田(1987:65)は、「五分時の夢」を巻頭に置いていることについて、「神への信仰を頼りに自足の心境を期す思いを顕示していることであり、蘇峰からの独立を期す姿勢をうかがわせる意味がある」と見ている。もとより『青蘆集』については前述したように、本格的な春を迎えた蘆花が、蘇峰をはじめとする民友社の束縛を断ち切り、ピリオドを打つと同時に新たな出発を予期させる内容を持つ作品集であった。「五分時の夢」自体、神秘的な内容であるので、実話とは考えにくい面もある。しかし、蘆花があえてそれを巻頭に置いたのは、自然と自然の一部である人間、そしてそこに見られる神の存在と神の意思をもっと自由に本心の赴くまま文筆活動を始めたという、宣言も兼ねているととらえることができる。後に「蘆花教」と呼ばれるような独特な精神世界の芽生えがここに現われていると言えよう。

③「燕尾服着初の記」は田舎紳士、蘆花の東京での夜会における体験談に人物描写を加えた作品である。登場人物らが必死に西洋文明に馴染もうと無理する様子や、蘆花自身の燕尾服姿に関する滑稽な描写のためか、重苦しさはない。体に合わない燕尾服やドレスを着てダンスをしたり、西洋料理を食べたりする人々の姿は鹿鳴館を髣髴とさせる内容である。これらは後日『黒潮』の呦々館での舞踏会の描写のために参考になったと思われる。

⑤「慈悲心鳥」は蘆花が伊香保で実際に遭遇した情死事件にちなんだ随筆である。宿の女から事件を聞いて「困った奴等だ」と「余」は言う。残された者を気の毒に思い、情死した男女の身勝手さに「馬鹿者」、「我がまま者」呼ばわりしながら、散策して宿に帰る。平和な美しい自然で癒しを求めたにもかかわらず、「馬鹿者」のせいで「余」の平和は乱されてしまった。情死した者の過と罪を挙げながら裁いている。しかし、石上の地藏尊は石に過ぎないから、何も「余」には語らない。

ところが、静まり返った伊香保の湯沢の川の水音だけが聞こえる夜中、突然静けさを突き破るように「慈悲心！慈悲心—慈悲—心！」という慈悲心鳥<sup>38)</sup>の音が響く。その声を聞いた蘆花は何か打たれたように起き上がり、雨戸を開けて闇を見つめる。真っ暗な中に一点、三点と山焼けの火が心細く紅く光っている。「慈悲心—慈悲—心！」と遠くに響く声を聞きながら、眼には涙が湧きあふれるという内容である。

石の地藏は何も語らなかった。それは人間の作った石像物に過ぎないので無論語れるはずがない。しかし、天は慈悲心鳥という自然万物を「余」のもとに送り、慈悲の心で赦せと言

38) カッコウ科の鳥。全長約32センチ。ジュウイチともいう。鳴き声が「慈悲心」と聞こえるところからその名前がついた。

う。そして最後に「余」はその鳴声を神の啓示として受け止め、もう人の過と罪を裁くまいと決心する。その許しの心情はイエスの教えに通じるといえよう。姦淫の女を石打ちの刑にしようとするユダヤ人の前で、罪のない人間だけが女を裁くことができるとしたイエスの言葉で、だれも女を刑に処する資格のない、何人も神の前では罪人であることを想起させた。「余」の悟りもこれに通じているといえよう。「余」は蘆花自身であり、最後に神に祈りをささげながら終わる。

聞くきより聞なれきに迷ふ人の子、願なれくば爾が大慈大悲の光を照らせよや、神。

(『蘆花全集第3巻』:436) (現代語訳Ⅲ-⑬)

人間的に考えると救いも赦しも無いような悲しい事件ではある。蘆花自身、完全な赦しの心境に至ったとは思えない。しかし、人間の足りなさを受け止め、人生の辛苦に迷う人間の魂の救いを神に求める蘆花の心境は、自然の力によってもたらされたということを見ることのできる重要な意味を持つ作品である。

⑫「吾初恋なる自然」は1902年4月に文芸誌『小天地』に発表された。これは『青蘆集』の最後の作品であると同時に、**＜自然三部作＞**の最後を飾る作品である。これについては第Ⅳ章第2節「＜自然三部作＞に見られる自然認識」において考察するのでここでは簡略にまとめる。自然は蘆花の初恋であり、その初恋は消えることなく死ぬまで続く恋であると言う。そして最後には自然の中に神を見出し、いつの日か真に人間を愛する日の来ることを信じて待つ切実な心情を吐露している。これは『青山白雲』の序において、謙虚な姿勢で神の創造した自然を見つめようと努力してきた結果、本心からの叫び声であると言える。

## (2) 小説：4篇

②「除夜物語」は童話形式の小品である。自然による人間社会への警告が含まれている。白痴の子供である為と忠犬斑の犠牲によって多くの人命を救うというヒューマニズムに富む美談である。『自然と人生』『湘南雑筆』の＜磯の潮干＞に登場する唾の子や、『睡余録』の「唾の叫び」に登場する唾の子がモチーフになっていると見られる。蘆花の弱者への愛情が現われている作品である。物語のはじめにある「上帝の前には、英雄も幼子なり白痴もまた神の子なり。」という文章は、「五分時の夢」で蘆花が悟った内容に通じている。

④「零落」は1900年9月に民友社以外のものに書かれた最初のものである。『富士』に

は「氷川町時代落ちぶれて来て五十銭熊次からもらふて往つた昔の兄の塾生を種に、余は空想の短いものを書き送つた」とある。

物語の内容は、昔家庭の事情で大学を辞め、同僚は出世しているのに自分は出世街道からはずれて挫折した沢井の話である。今は地道に暮らして妻子もいる沢井が二人の旧友に出会う。一人は増野という新聞記者で、沢井に公金を不正流用させて一攫千金を狙う儲け話を持ちかける。沢井は7年の都会生活で、良心のバネがゆるんでいて、その儲け話に乗ろうとする。ところが同じ日の夜、もう一人の友人鎌田が落ちぶれた姿で沢井の家に突然訪ねてくる。昔は秀才だったが、今では「零落」している。彼は若い頃女癖の悪さから退学になり、その後さまざまな所でさまざまな仕事に就いたが、うまく行かず、流浪の身になり体もこわしてしまつた。沢井は鎌田の一言で己れの愚かさに気づき、不正を思い止まってこう決意する。

ああ、吾はもと一旦の蹉跎より自らあせりて、よこしまなる僥倖を求めむとし、已に零落の淵に足ふみかけぬ。幸に免れたるは、まさしく天の恵ならずや。吾は最早僥倖を求めじ、成功をあせらじ。迂なりとも遠なりとも坦々たる大道を足に任せて行かむ。

(『蘆花全集第3巻』:428) (現代語訳Ⅲ-⑭)



後に増野が提案した計画は失敗に終り、公金を流用した人間が捕えられたという記事を読む。零落した友こそ自分を零落の淵から救ってくれた恩人だと沢井は考える。自分を救ってくれたのは自分より先に零落した友であった。成功者を見て、そのやり方を真似することで成功する者はいるが、零落した者を反面教師とし、危機から自分を救ってくれた人物を設定した。かなり教訓的である。人生には良い教師と悪い教師がいる。しかし、悪い教師からも学ぶべきだ。蘆花なりの人生教訓を伝えようとする小説である。

⑥「伴助七翁」は勤儉貯蓄家の模範といえる老人の逸話を書いたものである。モデルは蘆花の妻愛子の伯父で代々呉服商を営む本家の原田熊太郎である。その儉約ぶりは並大抵ではなく、富を活用する方法を知らない。富を積む方法が不義ではない点に尊敬を表している。どんなに富を蓄えても奢侈に走ることの無かった翁の生き方を称揚している。『思出の記』に登場する金貸し業の西内平三郎に似ている点も興味深い。

⑨「マリー、バシカアトセツフの日録」は1884年、23歳で夭折したロシアの女流芸術家マリー・バシユキルツェフの日記の紹介である。1887年に刊行された彼女の日記は、日記文学の

傑作として知られている。短い人生で名誉心を炎のように心に踊らせて、美しく才能豊かな少女は芸術に、恋に、世の中の名声を得るために生き急いだマリーの赤裸々な告白日記である。死際にも芸術のために必死に戦った壮絶な最期は、蘆花の心に非常な感銘を与えたと思われる。人間には想像もできない程、過酷ではあるが、飾り気のない真実の叫びであった。

中野(1984b:147)と吉田(1987)は蘆花が紹介した理由を「内攻する倨傲と過度にまで傷つきやすい感受性と、なにか一面健次郎自身とも共通するものがあつたからではないか。」と述べている。成功と挫折と恋愛に関するあけすけな告白で蘆花自身もカタルシスを味わった面がある(吉田:1987)。この日記は蘆花の告白文学として有名な『富士』や『蘆花日記』と比較すると懺悔という性質はあまり見られないが、蘆花の文学作品に影響を与えたと言えよう。

短い人生を精一杯生きてきた悲運の美しい女流芸術家への憐憫の情は、蘆花の文学に登場する『不如帰』の浪子や、「漁師の娘」のお光、『黒潮』の喜多川伯夫人と可憐児道子といった女性への同情に通じるものがある。

### (3) 紀行：4篇

⑦「東信名勝の一二」は1900年11月「新聞売込みの都合上信州は南佐久地方の名勝を見に往って書いてくれ」(『蘆花全集第17巻』:369)と依頼されて書いたものであることを『富士』で回想している紀行文である。そこでは関伽流山と松原湖について、「東京からわざわざ見に来る程のものでなかつた」と。それどころかかえって「鹿の肉がうまかつた」という位であるから、自然描写もそれほど特筆するものはない。ただし、浅間山と千曲川に関する内容を見ると、蘆花は非常に感銘を受けたことがわかる。夕暮れの浅間山を以下のように描写している。

果ては蒼然と暮れ了るを望み、望む毎に見る毎に、いよいよ山に靈ありと思ひしに、今日はまたうつりと笑めるが如き其の山容を望みて、愛の骨に入るを覚え、斯く心に叫びぬ。

(『蘆花全集第3巻』:451) (現代語訳Ⅲ-⑮)

『自然と人生』で相模灘から山々の夕暮れを記してきた蘆花の描写方法に似通っている。特に新鮮さはないが、浅間山を靈の宿る山、神(上帝)の愛情にあふれる山として絶賛している。この後に続く浅間山賛歌ともいえる散文の原題は「信濃の偉人」であり、『信濃毎



日新聞』の山路愛山に頼まれて書いたものである。

吉田(1987:71)は「自然を神秘的に捉え背後に神を見ようとする姿勢は (中略) 山岳の背後に「上帝」を初めて明示することによってさらに強まっている」と述べている。浅間山は活火山であり、激しく生きている生命体そのもののように感じられる。山を神格化する山岳信仰は蘆花だけに見られる傾向ではない。ただ、「上帝＝神」と言及している点が、山を聖人あるいは偉人に喩えた以前の表現より直接的である。

⑧「甲州紀行はがき便」は1899年10月に甲州を訪れた際にしたためられた自発的紀行書簡文である。『黒潮』の主人公の東三郎に関する取材旅行のため訪れたと見られる。

⑩「雨の水国」は『青蘆集』で初めて発表された。1898年4月の常陸の水郷地帯<sup>39)</sup>を探訪した際の紀行文である。その際、蕪村<sup>40)</sup>の俳句集を携えて旅をしたせい、描写が客観に徹していて佳作であると吉田(1987)は評価している。この旅行は、1898年3月に蘆花が文壇に差し出した名刺がわりの『青山白雲』が何の手ごたえもなかったことに失望して、心を癒すために出たものであった。蘆花にとって、味方は自然だけであった。「わたしや田舎者、日うらの椿、花は咲いても、人に知られで散るばかり。好いわいな、好いわいな。」(『蘆花全集第17巻』:136)という、自嘲にも似た詩を投稿して4月に一人旅に出た。

振り返ると1896年10月25日の29歳の誕生日を迎えた時に、「嗚呼吾は久しき奴隷にてありよ。」と今までの自分を省みたという出来事があった。その時から自由生きることを決意して、兄や家からの独立をはっきりと表明しはじめたのである。その直後に蘆花はこの常陸の国を訪れて「水国の秋」を執筆した。このように旅に出た動機は精神的な苦痛からの解放であったが、1898年4月の一人旅の際にも失望した心を癒そうとしたことがわかる。「雨の水国」の自然描写は「水国の秋」より非常に客観的で簡潔である。天候に恵まれず、雨続きであったことから「浮島も 筑波の山も 消え果てて 霞が浦に はるさめぞ降る」(『蘆花全集第3巻』:503)という歌を残している。

この歌からも蘆花の失望がかなり大きかったことが読み取れる。この場所は自分が愛情を持っている「漁師の娘」の舞台である。「浮島も筑波の山も消え果てた」の部分は『青山白雲』にかけた期待が「消え果てた」ことに引っ掛けている。さらに霞ヶ浦は蘆花の心を映す

<sup>39)</sup> 茨城県の霞ヶ浦一帯。

<sup>40)</sup> 与謝蕪村(1716～1784)は江戸時代中期の日本の俳人、画家。蘆花にとっては画家である蕪村の俳句は恰好の道連れであったと『富士』(『蘆花全集第17巻』:137)で回想している。

鏡のような役割をしている。「春雨が降っている」という部分は水のイメージが重なっている。

『青山白雲』刊行当時の心境を書き留めた文章を『青蘆集』に収録したことは、自然詩人としての自らの軌跡を残したいという意志の表明と考えられる。

⑪「両毛の秋」も紀行文である。1893年11月7日から12日にかけて『国民新聞』に掲載された「碓氷の紅葉」と、同19日と26日に掲載された「妙義山」を「碓氷」と「妙義」に改題したものである。母の供をして上州に住んでいた姉大久保音羽子を訪ねたついでに、一人足を延して旅をした際の紀行文である。自然描写に関しては、文章が候文で簡潔さは見られない。しかし、故郷を離れて東京で生活をしながら、大自然の中で過去を回想し、自分らしさを探そうとしている姿勢が見られる。ワーズワース詩集を旅の道連れに山歩きをしながら、蘆花は「真成の平民的詩人」<sup>41)</sup>とはどうあるべきなのかと思案に耽っている。

同情なき詩人所謂真成の平民的詩人ならざる詩人は、決して千載に伝はらざるを思ひ、  
(中略) 共に平民的詩人として論ぜば、寧ろ芭蕉の翁こそウオヅワスには似たため  
(『蘆花全集第3巻』:523) (現代語訳Ⅲ-⑩)

自然描写に関しては特筆すべき部分はない。しかし、蘆花が「両毛の秋」を『青蘆集』に収録したのは「真成の平民的詩人」を理想として歩み始めた自分の姿を記録しようとする意思として解釈できよう。

## 2) 特徴

『青蘆集』も『青山白雲』と『自然と人生』に見られるように、序と言える「五分時の夢」に続いて自然による人間社会への警告を含んだ短編小説「除夜物語」が見られる。この短編には「灰燼」の深刻さや、「漁師の娘」の自然描写の美しさはあまり目立たない。その代わり基督教の影響がはっきり見られる。「五分時の夢」は夢とも現実とも言えない内容で、蘆花特有の懺悔傾向が見られる。

41) これについては1896年1月26日国民新聞に掲載された「真なる詩、自然なる歌」(『蘆花全集第19巻』:3)でも言及している。「詩は真ならずんば、千載に生くる能はず。自然の声にあらざんば、万世に残る能はず。」という文章を三度くりかえしている。蘆花はロングフェロー(Henry Wadsworth Longfellow, 1807～1882年)の詩が西欧の詩における初恋であるとし、高く評価している。その詩の特徴を「眼前の景、口頭の語、心に感ずる所、身に触るる所、静かなる調子を以て、之を平易なる語に吐きぬ。」としている。あまりに深遠な言葉で普通の人間が理解しえない詩よりよほど良いという。このように蘆花は、平民にも理解できて、過酷な人生においても、人々の心を暖めることのできる詩を書くこととする意志を表明している。

続いて『青山白雲』の「恐ろしき一夜」と同じように、作家の体験談の形式を取っている。内容は社会風刺をコミカルに書いた「燕尾服着初の記」である。ところがその次には「零落」という、深刻な人生の教訓を題材にした短編小説がある。続く「慈悲心鳥」も体験談をもとにして、人間の悲哀が綴られている。これら両作品は、他人の失敗や罪を通して蘆花自身が悔い改めるというものである。クリスチャンとして真摯に受け止めようとする姿勢を見せている。

「伴助七翁」は『青山白雲』の「沼山津村」「南禅寺」と同じ系列であり、一人の人物の優れた側面を書き留めようとしたものである。「マリー、バシカアトセッフの日録」も外国人ではあるが、芸術のために熾烈に生きた一人の人間を見せた作品である。『青山白雲』の「米国土蛮征討記」とは系列は異なるが、外国物が含まれているという点は共通している。

最後の「吾初恋なる自然」以外の作品は、紀行文である。かなり古い作品もあり、自然描写に特筆するところはあまりない。「吾初恋なる自然」は蘆花の自由な自然詩人として生きようとする宣言と受け止められ、『青山白雲』の序に始まる＜自然三部作＞の最後を飾る作品である。

以上のように『青蘆集』の作品にはかなり古いものもあり、『自然と人生』に見る自然描写より斬新さには欠けている。しかし、それ以外の作品は懺悔や悔い改めという宗教的傾向を帯びた作品が多いことがわかる。人生のさまざまな場面において神の意思が介入したと解釈している。蘆花は精神的などん底の状態から自然写生によって自然への開眼を果たし、自然詩人としての道を開拓した。『青蘆集』をもって＜自然三部作＞は完了した。この後、蘇峰から完全に独立し、「精神革命」を経て、蘆花の真骨頂といえるベストセラー『みみずのたはごと』へと繋がっていく。『青蘆集』は、蘆花が自然詩人としての道を歩みはじめた軌跡の記録であると言えよう。

### 3) 青蘆の象徴

青蘆とは青々と茂っている蘆のことで、夏を表す季語である。ススキに似ているが、ススキよりたくましく、高さも2～3メートルある。では、青蘆は何を象徴しているのだろうか。蘆花は『青蘆集』の編集に関して『富士』で以下のように述べている。

夏休の仕事に、熊次<sup>42)</sup>は旧稿の二三を輯めて、小冊を造った。「角ぐむ蘆」と題名をしようかとしたが、「青蘆集」に落ち着いた。「自然と人生」程度の気乗りのした道楽仕事でそれはなく、云はば小使い取りの仕事に過ぎなかった。（『蘆花全集第18巻』:10）

「角ぐむ」とは蘆やスキの三角形のとがった芽が出はじめのことをいう。「蘆が角ぐむ」とは本格的な春になったという意味あいを持つ。「内容としても雑然さを免れていない」（中野:1972b:146）という評価や、「小使い取りの仕事」にすぎないという告白もある。しかし、小遣い稼ぎという言葉額面通りに受け取るべきではないと思われる。吉田(1987)は蘆花が「角ぐむ蘆」と名付けようとしたことに着目する。「生半可な気持ちで取り組んだとのみ解するわけにはいきまい」と言う。筆者はこの吉田の説にある程度首肯するが、「角ぐむ蘆」という題名に関して「不穏なもの」という解釈には見解を異にする。蘆の芽生えの様子は勢いよく新緑の尖った芽が地上に湧き出してくる感覚がある。それは蘆花の純粹さと世態に迎合しない反俗精神や反骨気質と通じるものがある。「青蘆」とは、兄蘇峰の行く方向性とはっきりと一線を引こうとした心的態度の象徴であると主張するものである。

題名を「角ぐむ蘆」から「青蘆」にしたことは、春ではなく夏を表していることになる。その言葉から、若々しく創作力の漲った成熟していく自然詩人としての蘆花の姿が見られるのである。『青蘆集』は<自然三部作>の最後を飾る作品として、蘆花の自然観および人間観を探ることのできる重要な作品集であると考えられる。この後、民友社から離れて黒潮社を設立する。『黒潮』の序文に見られるように、兄からの完全な独立と、兄への対抗意識があることは確かである。しかし決して兄を憎んでいる訳ではない。行く道はそれぞれ違うが、それは善悪の問題ではないことがわかる。蘆花は兄を恨んでいたのではなく、各々の気質に合う独自の道を行くことで真の兄弟愛を見せたかったのである。兄に対する尊敬の念は忘れていなかったと思われる。

「青蘆」というイメージは蘆花自身の性格を表象していると言える。たくましく自立して生きていという希望が含まれていると言えよう。

42) 蘆花自身のこと。『富士』では自分のことをこう呼んでいる。肥後家の「熊次」という名前の由来は熊本出身であることと、熊のような性格の上に体毛が多かったことなどに関連すると思われる。一方、蘇峰は「寅一」となっている。

## IV. <自然三部作>の作品世界

### 1. <自然三部作>に見られる水の空間とタナトス

#### 1) 序

蘆花の作品には水辺を背景にするものが多い。蘆花自身水に親しみを感じ、海や水に関する風物の描写に才能を発揮した作家である。『青山白雲』の中で水と関わりのあるものは「夏の夜かたり」<sup>1)</sup>、「数鹿流の瀧」<sup>2)</sup>、「漁師の娘」<sup>3)</sup>である。また『青蘆集』の「除夜物語」<sup>4)</sup>も水に関わる作品である。これらの共通点として、無垢な魂を持つ主人公らはそれぞれ海、滝、湖、洪水という水の空間で死を迎えていることである。ここではこれら4編の小品における「死」の描写について抽出し、考察してみる。

世界の神話や、聖書などの経典に現れる水の持つ象徴的意味は、(1)生命の源、(2)浄化の手段、(3)再生の中心という、3つの主要なテーマに還元できよう。さらにガストン・バシュラール<sup>5)</sup>は「物質的想像力」<sup>6)</sup>のうち、水は母性・永遠の生命・浄化などを意味し、さらには忘却と喪失のイメージも持つと述べている(バシュラール:2008)。

蘆花の作品には海や川が舞台になっている文章が多く見られる。旅行の手段として船舶を利用し、そこから見える景色や船上の人々について詳細に描写している。また、蘆花自身、逗子に転居して創作活動を行ったが、その場所は故郷の熊本県水俣と非常に似ていたという(渡辺・伊藤:2011:99)。バシュラールの「物質」が想像力の源泉となっているという理論から見ると、蘆花が幼い頃故郷で体験した海や川のイメージや、水音の記憶が作品にちりばめられていると考えられる。

本節では4つの作品について、「水」と関連する「死」のイメージをそれぞれ考察し、そこに表されている蘆花の心象風景を追究していくことにする。

1) 初出は1892年8月6日～21日『国民新聞』に連載された。

2) 初出は1895年8月25日『家庭雑誌』で、原題は「夏」。

3) 初出は1897年1月25日『家庭雑誌』。

4) 初出は1901年1月1日『国民新聞』。

5) Gaston Bachelard(1884～1962)はフランスの哲学者、科学哲学者。

6) 物質をじっと見つめることでひらかれてゆく想像力をいう。「物質的想像力」は火、空気、水、大地という古代から知られてきた基本的な四元素(エレメント)に分けられると述べている。人間の夢想は、この根源的な物質に根ざしている。この四元素をめぐる物質的想像力が、人間の夢想を支配しているという理論である。

## 2) 「夏の夜かたり」と海での死

「夏の夜かたり」は、山本久栄との恋愛事件<sup>7)</sup>を描いた「春夢の記」<sup>8)</sup>にひきつづいて書かれた小品である。義姉の実兄倉園秀雄牧師から聞いた実話をもとに「男の一人心中に哀切の情を抒べたもの」(『蘆花全集第16巻』:15)<sup>9)</sup>である。「見たこと聞いたこと以外書けぬ」といった蘆花の言葉を額面通り受け取れば、ストイックな青年の恋と自殺事件を聞いたそのままを書いたということになる、しかし、時期的に見ると蘆花本人の恋愛事件からまだ5年しか経っておらず、深い心の傷は癒されていなかった。蘆花が主人公の破婚と死に深い共感を見せたことは十分想像できる。主人公の松井を蘆花、恋人のきみ子を久栄に見立てて実らぬ恋物語を綴り発表することで、久栄に対する懺悔としたと思われる<sup>10)</sup>。

天主教伝道師の松井正夫は武士の子らしい風采であったが、詩人タイプの多感で情深い人物であった。23才の初夏、夏期伝道のため相州某家に寄寓し、熱心に信仰生活を送っていた。そこで家主の娘きみ子と出会い、二人は恋に落ち秘密で婚約する。きみ子は17才で、天主教女学校に学び、松井と同じ教会に通う少女であった。恋に夢中になり、伝道が疎かになっていった松井は、ある夏の終りの雨が降る夜、きみ子の母親が新聞に載っていた教師と女生徒の恋愛事件をとりあげて、教師を非難する言葉を聞く。松井はそれを最後の審判であると捉え、己れの誤りを痛感する。そんな時に松井の母親が風邪をこじらせて臥せているという電報が届く。しかし、きみ子が引き留めたため帰宅を一日延した松井は、母の死目にあえない親不孝者となってしまった。衝撃を受けた松井は昏倒し、3日後意識を取り戻す。しかし自責の念にかられた松井はきみ子と断絶し、きみ子の父母や自分の父母の墓前に謝罪し、師友にも懺悔し、天に向って悔悟した。そして松井はすべての職務を辞し、日毎に憔悴してい

7) 蘆花が同志社の学生時代に、校長であった新島襄の姪であった山本久栄と熱烈な恋愛をし、新島をはじめ、周囲に反対されながらも二人は結婚の約束を交わした。しかし久栄の評判の悪さのため、結局家族に知れるところとなり、東京の兄姉の前で離別を約束させられた。久栄に対して一方的に離別を宣言した蘆花は、失意と罪悪感にさいなまれ、学業にも身が入らなくなり、1887年の暮れに遺書を残して同志社を無断退学した。その後鹿児島に向けて放浪し、2ヶ月後熊本で叔母に見えられた。放浪の期間に関する具体的な行動については不明で、蘆花自身「暗黒の2ヶ月」であったと回顧している。

8) 家人の目を盗みながらひそかに書いた。書くことで久栄を忘れようとしたが、それを発表することは家族や新島夫妻らに迷惑をかけるのでできなかった。1905年12月にそれは蘆花自身の手で焼かれた。それには「醜！醜！醜！好事の者に寄語す。糞壺を覗くをやめよ。」と書いてあったという。

9) 「夏の夜かたり」の前に書かれた翻訳小説「石美人」ではわれ知らず久栄かと思う影の九空しく消えた哀しみを訴え、「夏の夜かたり」で最後の呼び出しを宇宙の何処に在るとも知らぬ片われにかけたとある。

10) その1年後の1893年7月、久栄死亡の消息を知って、一睡もできなかった蘆花は翌朝「春夢の記」の裏表紙に「此等の事の終は是なり」と書き、その下に死亡通知の文句を写し取った。7月29日『国民新聞』に発表された「百合の花」は久栄への手向けの詩であることがわかる。この随筆に後に加筆と削除を加えたものが『自然と人生』「自然に対する五分時」<山百合>である。

た。やがて秋が来た。

或は海岸に出でて遙に相州の山を望み、波と波と相搏ち旋渦と旋渦と相軋る水の面  
を一心に眺めつめ、或時は墨よりも黒き深夜に青山の墓畔にイみ、隠密の雲は日々松  
井とつき世の間を隔て行きぬ。 (『蘆花全集第3巻』:291) (現代語訳IV-①)

ここで、松井が眺める海は何を象徴しているのでしょうか。特に時間の記述はない。ただ、激しく波がぶつかりあう荒々しく暗い感じの海である。その荒々しい海は人間が罪の意識にさいなまれてカオス状態に置かれたことのメタファーである。暗澹たる主人公の心情を表すにふさわしい背景である。自然を見ても癒されるどころか、いっそう心は閉ざされ、さらに墓場に佇みながらも死を決意していく松井の心境から海は象徴性をもつ。死に場所としての海、墓場そのものを表象している。

この場面に先立って、松井が夜の星と海を見ながらきみ子らと以下のように語っている。

彼等は星を語りつ。松井は空打仰ぎて、「僕は毎も其様思ふです、星を見ると実に其様思ふですね。人の霊も恰ど星の様で、此の広い宇宙の中で、何千万年に唯一度、星と星と行き逢ふことがあつて、其れが一度行き違ふと最早未来永劫またと逢ふことは出来ない。実に果敢ないぢやありませんか」

「おほほほ、牽牛織女などは毎年逢ふぢやございませんか」きみ子の母は打笑ひぬ。前裁の黒きに、沖の光はほのかに漏れて、二つ三つ漁火の影かすかなり。松井はつくづく打眺め「僕は彼の漁火を見る度に思ひますよ、彼の火が海の上に其処に一つ此処に二つ、ちらちらする処は、実に人間の亡霊が迷ひに迷つて解脱の道を求めかねて、死の海にふらふらさまよふ様ぢやありませんか」(『蘆花全集第3巻』:281)

松井は夜空の空間から無限の宇宙を思い浮かべる。宇宙に光る星と夜の海の漁火は対等に並置されている。はかない恋と限りある生命を宇宙という無限大と対比している。また海の空間に亡霊がさまようようにイメージしていることで海は肉身の墓場になる。広い宇宙の中で恋しい人に永遠に逢ふことのできなくなった松井は、小舟で海に出て、身を投げてしまう。松井の魂は

夜空の星になって地上のきみ子に牽牛伝説を喚起すると思われる。

暮れ行く秋の風身にしみて品川の海万重の愁をたたむ頃、一日船宿より一艘の小舟を借りて沖に漕ぎ出でたる者あり。日は落つれども舟は返らず。夜明くれども舟は帰らず。三日の後諸処尋ねまはれる船宿の男、大森沖の海苔柵に流れかかる一隻の小舟の波に弄ばれて揺々し居たるを見出しぬ。舟には帽と履あり。舳の方には一卷の小形の書あり。半引裂きたるレースの枝折を挿めり。主は何処ぞ。品海の波深うして其の秘密を語らず。 (『蘆花全集第3巻』:292) (現代語訳Ⅳ-②)

海は母性をも象徴する。一隻の小舟は亡き母のいる世界に旅立つための棺でもある。母の懷に抱かれる赤子の眠る揺籃を象徴していると考えられる。松井は小舟に乗って亡き母の住む永遠の世界へと旅立ったとも言える。ここで海は苦しみからの逃避所、さらには墓場としての役割を果たしていると考えられる。しかし逃げたところで、傷付いた魂は決して癒されない。そのことは蘆花本人が痛感しているのである。松井は海でさまよう亡霊となり、解脱の道を求めている。この作品は蘆花自らが解脱の道を求めて、「夏の夜かたり」を執筆したとも推察してみる。



ところで松井の死は皆の知るところとなったが、一人きみ子だけは知らずに今だ初恋の夢が覚めやらず、祈りの中に松井の名を呼びながら物語は終わる。こうした設定<sup>11)</sup>は蘆花自身の願望にも繋がっているのである。宇宙のどこにいても知れぬ愛する人を呼んで許しを請い、解脱の道を求めている蘆花の心的世界を見ることが出来る。宇宙と夜の海は、傷付いた魂がさまよう永遠の空間であり、海は逃避所、墓場として表象している。

### 3) 「数鹿流の瀧」と滝での死

この作品は蘆花が熊本にいた時、阿蘇への入り口にある瀧にまつわる伝説を書き直した作品である<sup>12)</sup>。

熊本監獄から道路工事のため、大勢の囚徒が動員され、ある7月のはじめに新看守長が

11) この最後の呼び出しは、宇宙の何処にいるのか知らない久栄に向かってかけたことを蘆花は『富士』で回想している(『蘆花全集第16巻』:15)。

12) 蘆花が故郷の阿蘇山に登った時の思い出をもとに書かれた『青山白雲』の「夏の山」の一節に数鹿流の瀧に関する記述があり、書かれた時期がほぼ同時期であることから、この阿蘇登山の際聞いた逸話であることがわかる。



赴任してきた。この赤鼻の看守長は前任の者とはちがって、囚徒らを酷く扱っただけでなく、昼休みと食事を減らした。夏の暑さがきびしく、午後の日ざかりに休みたいと囚徒らが申し出ても看守長は一向に聞き入れず、頼む寅次をひどく蹴った。厳罰に処せられた寅次は、監獄の中で、実は看守長が前任地で博打の罪で入獄したひ弱な老人をひどく打って労役を強制した結果、その老人が自殺してしまったという事件を聞く。その老人は寅次の父親で、妹もその衝撃でとうとう狂ってしまったという。その後、寅次は同じ鍵仲間の辰五郎と二人で看守長に復讐しようとしたが、看守長は運良く逃げて助かり、「残念」の声とともに二人は滝に落ちてしまうという内容である。

吉田(1980:25)は「蘆花の意図がどこにあるか分かりにくく、いい作品ではない」と述べている。勧善懲悪ではないところに人間の恨みや怒りがあると思われ、「滝」の怒涛の流れと響きは、人間の怒りを表し、そこに落ちた者の悲惨な運命を物語っている。逸話を聞き、見過ごされてはならない現実として書かれたもの(吉田:1980:25)ともれるが、「夏の山」<sup>13)</sup>にあるように、蘆花が実際に目にした滝の印象は「言語に絶する」ほどであった。蘆花はこの逸話を書くことで、賭博犯という犯罪人ではあるが、ごく普通の庶民である社会的弱者らが、過酷な労働を課せられて死に追い遣られざるを得なかった不条理に対する、言葉では言い尽くせない無念と怒りの感情を表現したのである。権力社会に対して消極的な告発をしていると思われる。

「夏の山」に出てくる滝の凄まじさに関する記述を見ることにする。

瀑身は日光華巖の半にも足らざるべきも、瀑壺は大円筒をなして、黒川一川の流急  
転直下する勢此に籠もれば、凄じきこと言語に絶す。此川の上流より材木を流すに、水  
勢の烈しきより材木往々槍の如く潭底を貫くことあり。(中略) 底には材木林の如く突き  
立ち居れりと云ふ。 (『蘆花全集第3巻』:363) (現代語訳IV-③)

「残念」の一声と共に滝に消えていった寅次らの姿は水に吞まれて見えなくなってしまったが、そのあわれな亡骸は、滝壺の中で材木のように底を貫き、いつまでも突き立っている様子が想像できる。水は流れ流れて過ぎ去ってしまうが、彼らの亡骸と無念や怒りは、流れてどこ

13) 「夏の山」は「美なる日本」というものを書こうと思っていた蘆花が「何時かは書くべき其筆ならしに、阿蘇の憶出を書いた作品である。『青山白雲』出版当時、文壇の反応はなかったが、「夏の山」だけは読売新聞が「おもしろい」と評した。自然詩人・蘆花の誕生を思わせる写生文である。

かへ行ってしまったのではない。亡骸は水面には見えずとも、深い滝壺の底には確実に残っているのだ。滝壺の中に突き立っているであろう亡骸の凄惨さは、自然の驚異と恐ろしさを思わせる。そして滝の流れと轟音は永遠に彼らの無念と怒りの声となって、谷間に響き続けているのだ。ここでは自然の美しさではなく、驚異と恐怖、怒りのイメージが描かれていることがわかる。

蘆花はこれ以降、「平民的詩人」の立場で、社会的弱者らの側に立って作品を書いていく。彼らの声にならない怒りと苦しみをスケッチし、文章に置き換える。滝の轟音に寅次らの無念や怒りの声を聞く。蘆花の不当な権力への敵愾心と、権力の前に倒れざるを得なかった弱者たちへの同情心、世の中の不条理に対する怒りが、滝をモチーフにして描かれている作品である。滝の流れには勢いが感じられる。穏やかな水ではない。激しい滝の水は蘆花の憤怒の表象である。

#### 4) 「漁師の娘」と湖での死

蘆花は1897年<sup>14)</sup>1月、東京から逗子へ転居する。最初に執筆したものが「漁師の娘」である。「昨秋<sup>15)</sup>遊んだ霞ヶ浦」を背景に、神秘的な少女を描く。自然に捨てられ漁師に拾われ成長した少女が主人公である。

主人公のお光は霞ヶ浦の南にある浮島に住む、子供のいない漁師の万作夫婦に、蘆の中に入れておられたのを拾われて、自然の中ですくすく育つ。学校にも通い、成績優秀で一番になるが、ねたんだ級友らに捨て子だと言われ触らされてから、学校にも行かなくなる。世俗の現実と遮断されたお光は筑波山を両親のように思って、話しかける。歌を歌い、涙を流し、自然の中で心を慰めていた。14才の時、ある華族の若様に思いを寄せるが、女郎に介抱される放埒な姿を見て失望してしまう。そのうち万作はリュウマチがひどくなって漁にも出られず、暮らしに事欠くようになる。そんな時、お光に妾の話を持ち上がり、お光にその話を進めるようになる。お光はそんな万作に失望し、筑波山をながめて思いにふける日々を送る。その後しばらくするうちに、大風大雨のため霞ヶ浦の水位が高まったせいで浮島から山の方へ避難せざるを得なくなった。万作は熱に浮かされて焼酎が飲みたいとうわ言を言って苦しんだ。そんな万作の願いをかなえるため、心優しいお光は一人徳利をとって外へ出た。

<sup>14)</sup> 蘆花はこの年は良い年になるという予見をしていた。

<sup>15)</sup> 2ヶ月前の1896年11月。

お光は自分の心を傷付けた父親の願いを叶えるために、荒海のような霞ヶ浦に舟を出すほど気立ての優しい娘である。そんなお光を迎える霞ヶ浦の天上は雨も止んで穏かである。孤独な心を慰めるため探す自然はお光の味方である。自分を失望させ悲しませた人のために、危険を冒して洪水の中、出かけたお光を自然は優しく迎える。自然児お光の出生場所の設定は旧約聖書のモーゼのそれと似ている<sup>16)</sup>。大水は人間に失望したお光を救うため、自然の背後にいる神が手をさしのべたもの<sup>17)</sup>とも見られる。お光が湖から生れ、湖に帰るのは定めである。自然児の運命であろう。渦巻く夜の湖に小舟で出るとのこと自体、死を意味している。

人間に失望してもあくまでも「優しい」お光は人間的ではない。むしろ天上的で神秘のベールに包まれていて人間性を超越している。このような主人公の死に方は特別でなければならない。お光の死に方は『ハムレット』のオフィーリアの死を思わせる。若くて美しく、涙を流すお光である。さらに湖の上空には星と月が光っている。浪漫的な自然が配置されている。星と月は浪漫主義詩人が好む素材である。星と月が静かにお光を照らしているのだ。ここでは「夏の夜かたり」のような暗さや不気味さは感じられない。松井は海の上の漁火から亡霊がさまよっていると感じる。しかし、お光の場合は天使か聖母の昇天のように明るい。お光の魂は、「徳利の如何して流れついたか浮島の南端に流れよつた」(『蘆花全集第3巻』:234)のである。徳利が水辺に帰ってきたと描写されていることは暗示的である。お光は永遠の世界である自然に戻ったが、魂は自由に行き来することができるということを暗示しているのであろう。その後、島の漁師が朧月夜の晩に漁に出て帰ろうとしたとき、お光の歌う声がかすかに聞こえてきた。これは何を意味するのであろうか。

声をしるべに舟を漕いで行くと、何処まで行っても茫々とした朧月夜の湖で、人の影もない。よくよく聞くと、其歌ふ声が水の底にあるやうでもあり、空にあるやうでもあつて、稍久しく迷つて居たが、終に思切つて舟を返すと、其歌の声は遠くなり、近くなり、久しい間幽に響いて居たと云ふことであつた。(『蘆花全集第3巻』:235)(現代語訳IV-④)

お光はいなくなったがお光の歌声は聞こえる。まるで母の懷で子守唄を聞くように安らかな感じがする。ローライ伝説のように人を水底に引き込む、そんな声ではない。蘆花自身、「漁

<sup>16)</sup> 吉田(2006:10)に、キリスト教と自然の関わりを述べている。

<sup>17)</sup> 吉田(2006:10)、(1992a:222)参照。さらには人間界への批判も見られるとあるが、運命をそのまま受け入れるお光の行動を見たとき、人間界からの逃避という感が強い。

師の娘」にあこがれる心があった(『蘆花全集第17巻』:193)<sup>18)</sup>という。心の癒しを求める心、つまり母性へのあこがれが、お光の歌声となって表現されたと思われる。

お光が人間界から去ってしまったのは、蘆花自身、人間界から逃避して安息を求めたいという心境の現われとも言える。自然描写の美しさとお光の死のイメージは、自然から逃避的な慰めを求めている蘆花の心の世界を表しているといえよう。

「漁師の娘」での死のイメージを前二作品と比較すると、暗さや恐ろしさは弱まり、母性としての優しいイメージに変化していることがわかる。さらに若く美しい少女の死を描きながら、死とは自然に帰ることを意味していることが読み取れる。湖という自然は、ユートピアとして描かれている。執筆当時の蘆花は自然スケッチを始めて、逗子に転居して間もない時期であった。そうした環境も影響して、以前の作品に比べると、自然描写や水から受けるイメージが変化していると思われる。

#### 5) 「除夜物語」と洪水による死

蘆花は「白痴にも愛の光が通へば思はぬ人助けの奇跡をする、といふ作意であった。舞台は信州に、実話体にしたが、すべて架空の物語」(『蘆花全集第17巻』:394)と執筆に関して回想しているが、序文に見られるように、蘆花の弱者らへの愛惜が感じられる小品である。

髭をぼうぼうとはやした叔父さんが子供たちに童話を聞かせる形式<sup>19)</sup>で話が始まる。作者が小説方式に苦心した痕跡が見られる。信州のある村に、お国と為吉(以下、為)という母子が住んでいたが、為は白痴であった。そんな為を可愛がる者は母一人だけであった。それに犬の斑だけが為の友だちで、彼等はいつも一緒に行動する。信越線が開通して、汽車を毎日見るのが楽しみだった為は、踏み切り番の酒好きの爺の与作と仲よくなり、与作から愛された。そのうち為は与作の仕事ぶりを見ながら、旗の振り方を見覚えた。ところがある日の晩、豪雨が村を襲った。為は翌朝早く与作の小屋に出かけたが、与作は暴飲のため脳溢血で死んでいた。与作の死が理解できない為は、鉄橋が大水で今にも流されそうになっているのを見て、死んだ与作の代わりに迫り来る汽車に危険を知らせようと必死に赤旗を振ったところ、なんとか

18) 駒子(注:愛子のこと)が川のほとりで自殺を考えた場面での蘆花に関する記述。

19) 蘆花が幼い甥や姪らに話しているような設定である。実際、粕谷の家に蘇峰の子供たちがよくやって来ては、いつも物語を話して聞かせていた。子供好きの蘆花らしいエピソードである。

汽車は止まった。ところが、山から雪解け水があふれ出して洪水が起り、為と斑は流されてしまう。

洪水は聖書の「ノアの洪水」に見られるように、人類の罪に対する神の裁きと浄化、再創造という意味を持つ。また、水は洗礼者ヨハネがヨルダン川で人々に水を注ぎかけ、罪を洗う儀式をしたことと、キリスト教徒が洗礼を受けてキリストの死と復活にあやかる際に用いられた。新生にもつながると思われる。また、文明の利器も洪水という自然の強大な力の前では一瞬に破壊されてしまうことから、人間による自然破壊と公害に対する自然の審判を読み取ることができよう。

信越線が開通して、昼は黒雲の息を吐き、夜は赤青の眼を閃かし、火焰を吐いて、  
鉄の路を日に幾回か往き復る大蜈蚣むかで—汽車の事さ—を、村の者は珍しがつて、子供は  
素より、太郎作が家の花嫁も勘左衛門が隠居の爺も、それ今通る、出てみようあと騒いだが、  
やや暫く経つと、皆厭あいてしまひ、毎日々々やかましい、屋根が黒くなつて、火の  
粉が散つて、と先月其の汽車で上田まで繭売りに行って、開化は有り難いもの上田まで  
半日で行って帰つたと有り難がったことも、はや喉元すぎた汁粉の胸につかへていやでござ  
るとは勝手な沙汰。（『蘆花全集第3巻』:397）

文明開化の象徴ともいえる、黒煙と騒音をたてて走る汽車についての批判的な記述は『死の蔭に』<sup>20)</sup>にも見られる。この時すでに蘆花には自然破壊と人間の身勝手を批判するという文明批評的な態度が現れている。確かに汽車は都会の乗客らには便利な文明の利器である。沿線に住む田舎者たちは、はじめは都会人と同様に歓迎した。しかし己れに損害を及ぼすと思ったら、手のひらを返したようにすぐ不満を口にする。自然破壊だけではなく、人間の浅はかな態度への批判も含まれている<sup>21)</sup>。そのような我侷な人間達とは対照的に、白痴の為は純真無垢な清い存在として描かれている。

卒然凄まじい響が聞えた。為は川上の方を眺めた。鉄橋の二丁ばかり上に当たつ

<sup>20)</sup> 1917年3月に刊行されたもので、故郷熊本訪問時に、「そこには八年前までなかった百貫石通ひの軽便鉄道が敷かれて、玩具の様な汽車が汚い煙を吐いてがたがた走っている」と田舎を走る汽車の印象を記している。

<sup>21)</sup> 当時の日本社会が文明開化に浮かれて、国の風潮があさはかになっていることへの批判。

て、真黒い壁の如きものが川一面に立つた。夜来の強雨に融けた上流地方の雪水が  
今一団みなぎになつて漲り来つたのである。三百間の長橋ふるびりと顛ふ。斑は頻に悲鳴して主  
人の裾くはを啣へる。為は唯莞爾につこと其方を望んで居る。彼の壁の如きものは運命の如くずう  
と寄せて来て、一簾あふ あふり簾あふって滴落しに橋を捲いた。唯此の一簾りに右岸の橋台八基まで  
奪られて、半水なかばに落ちた鉄橋の、其の半身を竜の如く水上もたに擡げ起した時は、最早其  
のうえには何者の影もみえなかつた。(『蘆花全集第3巻』:403~404)

洪水は、人間の罪や汚れを審判し、大地を浄める方法として用いられている。しかし、こ  
で水に流されたのは汽車の乗客ではなく、罪のない無垢な魂を持つ為であった。罪人を救うた  
めにこの世に送られた神の子羊のように、汚れなき魂を持つ為は運命に逆らうこともなく、愛犬と  
ともに水の中に消えていく。為の死は、神の子羊であるイエスの死を描写し、洪水には罪の世  
界の浄化のイメージが見られると言える。

この作品の主人公は子供であり、この物語を聞いているのも子供という設定である。単なる  
「教訓譚」(吉田:1987)というよりは、作品の序に「上帝の前には、英雄も幼な子なり、白痴  
もまた神の子なり。」とあることから、「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国には  
いることはできないであろう。」(『聖書』:マタイ伝第8章1~4節)という聖句と、神の前には何  
人も平等であるというキリスト教の教えがはっきりと示されている。

洪水から乗客を救った為の死骸は、運命的な仕事を終えて、天国に行った幼な子のように  
満足げに笑っていた。結末からわかるように子供向けの教訓を持っている作品である。

最も人の心を動かしたのは、彼の出水の三日目に、鉄橋から二里ばかり下流の字南  
長池と云ふ所の水楊の根にかかつていた二個につこりの死骸であつた。其の一個は莞爾笑って  
右の手に確と赤旗ひし くはを握り、いま一個は其の帯を緊と啣へて居た。

(『蘆花全集第3巻』:404)

為は一人で旅立たつたたのではなく、愛犬と共に天国へと旅立たつたた。犬の友と共に微笑みなが  
ら、いじめと差別のない天国へと旅立たつたた。天国へ行いったことのメタファーとして為の微笑みが

描かれている。

「除夜物語」の為の死は、他の三作品とは異なる側面がある。悲話ではあるが、蘆花の人間愛が表れている。そのため心暖まる物語となっている。他の三作では、自然描写の中に蘆花自身のタナトスを感じられる。久栄との失恋事件とかかわっているからである。蘆花をとりまく人間関係の煩わしさや傷付いた心が、作品に投影されている。しかし、家族から独立して逗子や旅行先で蘆花が行った自然スケッチ修業は、自然を見る目と文章表現力を高めただけではない。蘆花自身以下のように述べている。

せいせつ

余は逗子に住みぬ。昼は富士の霽雪を仰ぎ、夜は相模灘のどよみを聴き、心は自然に飽和して限りなき平和を得ると共に、写生は少しづつ吾が眼の膜<sup>22)</sup>をきりて、不思議なる自然の断片の時々ちらりと見える様になれり。(中略)心をとめて見る程、見て知る程、昔自然—其れも唯おぼろ気の一の一斑に限られし同情は、ややにして人に向ひぬ。余は日記に書して曰く、「三十年来、身は神の大地にありて之を見ず、耳は自然の音楽人生の歌も聴かず、惘々として半生を睡過し来れり。今や吾を呼び醒す<sup>からい</sup>何来の声に少しく醒覚し来りて眼を開けば、新しき天地、新しき世界に生れ出でたる感あり。

(『蘆花全集第3巻』:544~545) (現代語訳IV-⑤)

自然とそこに生きる人間の観察と写生が蘆花の心を癒したのである。蘆花の本来持っていた人間愛を溢れさせた。吉田(1974:77)は「内的革命を体験」したと見ている。つまり自然生活が、蘆花の死や、永遠の世界に対する見つめ方や描写に変化をもたらしたといえる。心の傷が徐々に癒され、解脱にむかう蘆花の心境の変化は、それぞれの作品に現れる水のイメージの変化をもたらしたと言えよう。

「吾を呼び醒す何来の声」は、自然の声と捉えてもよいだろう。蘆花が1897年の晩秋、塩原で聞いた「空山流水」<sup>23)</sup>の曲について『富士』で以下のように回想している。

一つの小谷に一つの流れがある。一つの流れには、其音楽がある。日頃聞くととはなしに聞き馴れた海の音楽とはまた異なつた空山流水の曲に、熊次(注:蘆花のこと)は

<sup>22)</sup> 蘆花は「膜」を「我」(イゴ)だと述べている。

<sup>23)</sup> 『自然と人生』「自然に対する五分時」に収録されている。初出は1899年10月17日『国民新聞』。

心耳を澄ました。それは彼の衷<sup>24</sup>なるものにぴつたり合つて、忘れられぬ音となった。二十年の後、熊次はそれについて斯く書いた。

私の心耳に折ふし響く音楽がある。

私は何時其音楽を聞き始めたか、よくは覚えぬ。

よくは覚えぬが、一つの記憶がある。

今を距る約二十年前、明治三十年の晩秋、ある日私は野州塩原の鹿の股川の澗に腰かけていた。(中略)水は流る。流るるままに歌ふ。水は流る。音も流る。眼は流るる水を追ひ、耳は流るる音を慕ふ。(中略)何と云ふなつかしい音であろう。此は水の音であらうか。否、山水の精、秋の精、此空山に形は見えぬあるものたるみなく誦する流水の巻であらねばならぬ。私はそれを忘るる事が出来ぬ。もしかしたら、私にそれは初耳でなかったかも知れぬ。子供の時から聞いて居たのかも知れぬ。其調子の弦を私は私の衷にもつて生れて来たのがたまたま塩原の山中ではつきり喚びさまされたのかも知れぬ。兎に角、私はそれ以来時々頭の中に此音を聴く。

(『蘆花全集第17巻』:112~114)

蘆花にとって、流れる水音は「The still, sad music of humanity.」<sup>25</sup>(人間性の静かで悲しい音楽:金田真澄訳)である。「人間神の進行曲」(『蘆花全集第17巻』:114)なのである。蘆花の生れ故郷は熊本県水俣の海辺の村であった。その後、3才の時引越してから学童期にかけて住んでいた家や通学路は川の流りに沿っていたという。そうした幼い頃の環境から見て、蘆花の潜在意識に水音は常にあったことがわかる。流れる水音は蘆花の心を呼び覚ます自然の声であるといえよう。「空山流水」の曲を聴いた体験は、逗子での自然生活と写生修業によって自然を見る眼が開かれた。「除夜物語」に見られる水と死のイメージが大きく変化したと言える。

## 6) まとめ

蘆花の<自然三部作>には、山や海といった自然スケッチだけではなく、その中に見え隠れする人間の生と死が描かれている。それは蘆花が生と死という人間の営みも自然の一部として捉えるからである。自然が永遠であるように、人間の肉体の死は終りを意味するのではな

<sup>24</sup> 心の中。まごころ。

<sup>25</sup> 『自然と人生』の冒頭に引用されているワーズワースの詩の一部分。



い。人間の魂は永遠なる自然に帰ると考えている<sup>26)</sup>。

以上、蘆花の4つの小品を執筆年代順に考察、比較しながら、それぞれの作品にあらわれる死と水のイメージを作者自身のタナトスと結び付けて考察してきた。「夏の夜かたり」は、蘆花の恋愛事件で受けた心の痛手がそのまま作品に投影されていた。主人公松井の傷付いた魂は自然によって慰められることなく、暗く孤独なまま死んでいく姿を見せた。自殺こそしなかったが、失恋当時の蘆花の心象風景を垣間見ることができた。松井の死んだ海は、孤独で罪にさいなまれる者の逃避所であり、墓場を表象していた。死んだ松井の魂は解脱を求めて永遠の宇宙空間を飛びかうが、解脱しかねて夜の海を亡霊となってさまざまに迷っていることを暗示している。この作品を書くことで蘆花が自己の解脱の道を探っていたことがわかった。

次に「数鹿流の瀧」は平民的詩人としての蘆花の片鱗を見せている作品である。社会的弱者の不条理な死と無念と怒りが込められている。滝壺の中に突き立っている亡骸の凄惨さから、この作品は自然の驚異と恐怖、さらに怒りのイメージが描かれていることがわかった。

「漁師の娘」では、霞ヶ浦の大水はお光を自然に戻すための仕掛けとみた。自然から生れた自然児は人間界にふさわしくない。自然に帰るのが当然である。「漁師の娘」には蘆花のあこがれが描かれている。湖は人間界をはなれたユートピアであり、慰めを得る避難所である。またはすべてを包容する母性の象徴でもある。これ以前に書かれた「夏の夜かたり」と「数鹿流の瀧」の2作品と比べると、水のイメージが変化していることがわかる。暗さや怒りのイメージは弱まり、母性の優しさと自然に「逃避的な慰め」を求めていた蘆花の心境が現れた。

次に続く「除夜物語」や『自然と人生』に収録された自然写生文では、水のイメージが変化していることが読み取れた。「除夜物語」の洪水は、人間の罪や汚れを審判し、大地を浄める仕掛けとして用いられていると見た。しかし、罪人に喩えられる汽車の乗客が流されたのではなく、罪のない為が犠牲になるように蘆花は設定した。これらから為の死は、神の子羊イエスの死を描写し、洪水は罪の浄化をイメージしていることがわかった。

＜自然三部作＞の作品には、多彩な自然や水の描写が現われている。そしてこれらの4作品に見られる死の描写や水のイメージは次第に変化していることがわかる。その理由として、

<sup>26)</sup> 蘆花が死の間際に、上州伊香保温泉の千明仁泉亭の湯につかり、榛名湖のほとりまで無理をおして出かけた無謀ともいえる行動は、復活と関連づけることができるかもしれない。キリストが肉体の死を意識しながらガリラヤ湖畔に佇んで永遠の神の国を思索したこと、蘆花もまた死を予感しながら榛名湖畔を訪れたこととオーバーラップするものがある。

失恋や、人間関係などに起因する蘆花の心の傷があげられる。それらの傷は自然によって次第に癒されてきたことがわかった。前の3作品の自然描写の中には蘆花自身のタナトスが見られる。「漁師の娘」執筆前後から、蘆花の作品は自然と人間に関しての観察眼が明るくなっている。「除夜物語」では悲話ではあるが、心暖まる人間愛が強調されていることが特徴であると言える。

## 2. <自然三部作>に見られる自然認識

### 1) 序

ここでは徳富蘆花の習作時代における<自然三部作>とも言える『青山白雲』(1898)、『自然と人生』(1900)、『青蘆集』(1902)をひとつの流れとして捉えて<sup>27)</sup>、考察することにする<sup>28)</sup>。

『青山白雲』の「序」と『青蘆集』の最終章「吾初恋なる自然」を見ると、内容の連続性を示していることがわかる。本節では蘆花の自然認識の変化の特徴がうかがえる文章を挙げながら、蘆花の自然認識を鳥瞰的に考察してみる。まず、自然への開眼時期と見られる『青山白雲』の「序」と「漁師の娘」について考察する。続いて自然を文章でデッサンしている点で自然詩人としての地位を不動のものとした『自然と人生』の「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」を、最後に『青蘆集』の最終章「吾初恋なる自然」に至るまで、蘆花の自然認識について順を追って考察していきたい。

### 2) 『青山白雲』 — 「序」と「漁師の娘」

#### (1) 「序」に見る自然への開眼

『青山白雲』は1898年3月に出版された<sup>29)</sup>。その「序」は蘆花の写生修業と自然への開眼についての根拠となる研究材料として重要である。「序」は1898年1月に執筆されているが、その1年前の1897年1月3日、蘆花夫婦が東京から神奈川県の逗子<sup>30)</sup>に引っ越した出

27) 中野は「作者習作時代を代表する記念碑ともいべき一系の文集である」と位置付けしている(中野:1984b:40)。

28) 本節は細見典子・金鸞姫(2014)「<自然三部作>に見られる自然認識」を一部修正したものである。

29) 出版当時は文壇の反応もなく、読売新聞社だけが「夏の山」はおもしろいと評価した。あとは意識的に無視されていた面もあった(『蘆花全集第17巻』:136)。

30) 相模湾に面する都市で、現在は東京や横浜のベッドタウンだが、当時は海水浴場を利用する人々が訪れた

来事に注目する必要がある。蘆花はその当時のことを「私共が東京から逗子の海辺に移ったのは、二十年來の無理で不自然にされてしまった本来の自然児が、自然に帰る第一歩でありました。」(『蘆花全集第10巻』:283)と回想しており、「身を自然大化の浴槽に投じて満身の汚穢を一新したいと思ふより、湘南<sup>31)</sup>に客となって」(『蘆花全集第4巻』:4)<sup>32)</sup>写生に精進しながら、執筆活動を行った。

1896年の初頭から和田英作<sup>33)</sup>に師事して絵画を学んできたが、『青山白雲』出版前の1898年1月に書かれた「序」<sup>34)</sup>には画学修業に没頭した内容が記されている。吉田はこれを「素人写生家の懺悔」だと述べている(吉田:1980:21)。蘆花が画学修行によって自然を見る眼が開かれ、それまでの己れの無知に気付いたことを公に告白しているものである。画学修行を始めてから丸二年の間、宇宙の森羅万象を尽く写生帖に描こうとする写生狂であった蘆花が「序」にこう記している。自分は美を見る眼が画家には劣っていないと思い、すぐにも素晴らしい画が描けると思って習い始めた。しかし、次のような事実を悟ったにすぎないのである。

唯吾曩に見得たりと思ひし自然の、見れば見る程宏大不可思議にして、之れに対すれば  
眼眩し手戦くを覚ふるのみ。(中略)吁余は知らざるなり。何も知らざるなり。其の自然を見ると  
謂ひものは、見ずして夢みしなり。(中略)余は感じて、思はりき。夢みて、見ざりき。知らず  
して、言ひたりき。(『蘆花全集第3巻』:214)(現代語訳IV-⑥)

このように今までの自分自身を読者の前に懺悔し、遅蒔きながら今からは謙虚な心で自然を見ることを次のように宣言して終わる。

嗚呼余が眼を開きたるや晩し。然れども「悛むるに晩しと云ふことなし」願くは心を虚しうし  
赤子となりて俯して造化の秘書の第一頁を開かん。

保養地で、今とはちがって自然の風景が残っていた。

31) もとは湘南といえば相模川西岸の地域を指したが、蘆花が『自然と人生』で逗子の自然を「湘南雑筆」として出版してから相模湾沿岸一帯を表すように変化した。

32) 「トルストイ」の例言にある。1897年1月から3月にかけて執筆された。

33) 和田英作(1874～1959)は明治～昭和時代の洋画家。フランス留学から帰国後、母校東京美術学校(現東京芸大)の教授となり、のち同校校長となった。

34) 『国民新聞』 「『写生帖 画』として発表されたものに補記を添えて「序」としている。

このように「序」には蘆花特有の冥想的自然省察があらわれている。大自然一特に富士と大海一の前に自ずと謙虚になり、神と神の被造物である自然万物に平伏しながら、新たな境地が開かれたことへの驚きと感動が表現されている。創作への意欲と真摯な態度もうかがえる。「万有は神の聖書だ。自分は自然を通じて神を見たい」(『蘆花全集第17巻』:176)と願う蘆花にとって「造化の秘書」の1ページを開くということは、天地創造後アダムが楽園を歩いて草花や動物を観察しながら神の創造の世界を見つめたことと同じ意味を持っている。自然の美に感動した歓喜の声は蘆花の心のキャンバスから、自然描写文に描かれていくのである。

「自然を通じて神を見る」という思想にはエマソン<sup>35)</sup>の影響が見られる。エマソンは古人のように面と向かって神と自然を見るべきであると著書『自然論』の序文で主張している。直に自然に触れ、自然の秘密を手中に収め、自然と一つになると同時に神と一つになると説破したエマソンの思想には、当時民友社発刊の『十二文豪』シリーズを通して接する事ができたと見られる。ジャーナリスト兼思想家でもある蘇峰は弟の蘆花にトルストイ評伝を執筆させる。一方エマソン評伝は北村透谷が担当する。民友社の積極的な海外思想流入は近代日本作家の浪漫的自然観に影響を与えたことがわかる。

吉田(1980:21)はこの「序」が書かれた直後に、蘆花が自然を写生したものとしては最初の「此頃の富士の曙」が『国民新聞』に発表され、好評を得たという事実を忘れてはならないと言う。それ以降の作品においてそれまでの自然を描写した作品には見られなかった写生文が次々と記されていくのである。それだけに「序」は自然詩人、蘆花の新たな出発宣言とも言えるほど、深い意味合いを持つと言えよう。

蘆花自身の言説によると写生の腕はそれほど上がらなかったようだが、<此頃の富士の曙>に描かれている自然描写を見ると、相模灘を望む富士の山頂から周辺の山々が徐々に目覚めていく光と色の変化がまるで実物を見るように描かれている。これが文章でスケッチする

---


35) 形にとらわれた聖餐式を否定したことがきっかけで聖職を自ら退き、超絶主義を唱えた。著書『自然』は超絶主義の宣言書ともいわれている。宇宙の本質、神と人間の内面とは究極的に同質のものだとして、人間の精神、自我そのものが神であると主張した。そして、この神、すなわち自我のつながりを認識する媒体能力として直観を重んじ、理性という枠を取り外し、一切の経験、悟性に先立つ直観能力、想像力に信頼を寄せ、無限者神との合一を求めた。こうした思想の背景には、ドイツやイギリスのロマン主義思想、プラトン哲学、東洋の神秘主義思想の影響があったと考えられている。

力であると言える。このような力を養った蘆花は、自然詩人として確固たる地位を打ち立てていった。蘆花は『自然と人生』に見られるような作品の創作に引き続き取り組むことになる。

## (2) 「漁師の娘」に見る自然児への賛美

気質的に拘束を嫌う自然児であった蘆花には、儒教的な家庭環境と兄の監視下での民友社社員としての生活は気性に合わなかったと思われる。鬱々と過ごしてきた「不自然な」自己を見つめる。それで、本来の姿に戻るために逗子に転居したことは上述した。

湘南の大自然を自らの親と見做し、自然の中で自己の在り方を模索するようになる。自然の中に第一歩を踏み出した蘆花は、己れの魂が自然によって癒され、何らかの救いを実感する。「漁師の娘」は蘆花が1897年1月、逗子で最初に手がけた作品である。この作品は「昨秋遊んだ霞が浦を背景にとりて、人間に失望した親不知の女兒が自然に消え入る、という筋の散文詩」(『蘆花全集第17巻』:4)である。「漁師の娘」はそれ以前の「自然」を扱っていた作品群と比べれば、「自然」の扱い方に明らかな違いがあるという(吉田:1992:224)。まず、物語の舞台についてうかがってみよう。舞台は霞ヶ浦の浮島の蘆の生い茂った中にある一軒家、漁師万作の家である。

 제주대학교 중앙도서관  
HUMANITIES LIBRARY

夏から冬にかけては、人身よりも高い蘆が茂りに茂つて何処に家があるとも分らぬが、此あ  
たりを通つて居ると、蘆の中から突然に家鴨だしぬけの声が聞えたり、赤黒い網がぬつと頭を出して居  
たり、または、一条の青烟ひとすじの悠々と空に消えて行くのを見ることがある。併し其れよりも著しいし  
るしがある。其は此の蘆の中から湧いて来る歌の声—万作の娘お光が歌ふ歌であつた。

(『蘆花全集第3巻』:217) (現代語訳IV-⑧)

霞ヶ浦は茨城県に属する景勝地である。物語の舞台である浮島は執筆当時実在していた。号が蘆花であるだけに、蘆花洲の描写に念を入れて書いていることが感じられる。後に考察する『自然と人生』「自然に対する五分時」<蘆花>にある蘆花洲の描写と似通っていることがわかる。蘆花洲こそ、お光が実の親に捨てられた場所である。そこで拾われて養父母によって育てられる。蘆花洲は自然児お光の揺籃である。蘆花在世当時、郷里の熊本県水俣から北の葦北海岸にかけて蘆が生い茂っていたというから、「その蘆の花を強く意識したのではないか」(吉田:1992:221)という見方や、「クリスチャンであった蘆花がモーゼを意識し

た」(吉田:2006:10)という見方もある。舞台を蘆洲に設定したことは、自らの号を「蘆花」とするほど蘆洲に惹かれる「本来の自然児」として育った蘆花が、お光に自己の理想を託した証であると考えられる。

またお光は「鳥を非常に愛して、よく諸鳥の鳴声を覚えて」鳥の様に「舞う真似をする」。そして「銀鈴の様な声」でいつも何か歌ったり、けむりになって天に行きたいなどと不思議なことを言う。ここではお光が鳥から歌を習い、鳥のような存在として描写されていることがわかる。言い換えると人間界に理想を置かず、自然に理想を求める人物像を造型している。このことは蘆花の自伝的小説『思出の記』において「然だ、然だ、僕は最早最早理想を人間界には置かぬ。鳥ですらも、猛きは直ちに日を睨んで昇るではないか。」(『蘆花全集第6巻』:342)と名士への失望から主人公の慎太郎が決心した場面にもあるように、お光は作者蘆花の理想とする人物像であったことがうかがえる。

学校で級友に「拾いつ児」であったことを知らされて心に深い痛手を負った主人公お光は、幼い時から友として親しんでいた筑波山から心の慰めを求める。

見れば見るほど、嬉しく、悲しく、恋しく、なつかしく、霞ヶ浦の水の面をさらさらと走つてお山に抱きつきたいとお光は思つて、飛ぶ鳥の翼を羨んで居ると、「お案じでないよ、今にね、わたし達の傍に来られる、それまでは辛抱して御出で」と慰め顔に此方を眺める。(中略)実にお光の眼には、男体女体二つ並んで水と空の間にゆつたりと立つた筑波が、宛ら人のやうで、またさらに二親のやうに思はれて、其のゆつたりとしてやさしく大きく気高く清い姿がなつかしくてなつかしくて、其の前に歌ふ時は、<sup>ちやう</sup>恰ど父母の膝に突伏して、余所での悲しさを思ひ入れ泣くやうな心地がして、歌つて果は泣いて、それが為<sup>に</sup>心は慰められた。

(『蘆花全集第3巻』:226~227)

筑波山がお光を育てた二親であるとし、その筑波山に行くには霞ヶ浦を渡って行くことができると、お光は筑波山を眺めながら歌いながら、父母の膝に泣き伏して泣くような心の慰めを得られたとある。後にあげる『青蘆集』「吾初恋なる自然」にあるように、こうした内容には幼いころ自然の懐で慈母の愛を感じた蘆花の直接体験がベースにあることがわかる。実際には自然を目の前に泣き伏したわけではなかったとしても<sup>36)</sup>、それと同じような心的世界を通過した

<sup>36)</sup> 初出には「14歳の秋、自然を前にほいままに泣き伏した記憶がある」と書かれている。しかしこれはフィクション

ことは『自然と人生』 「自然に対する五分時」の〈春の悲哀〉を見ても明らかである。蘆花自身「漁師の娘」に憧れる心があった(『蘆花全集第17巻』:193)ようだが、湘南の自然を安息地として魂の安らぎを得た蘆花が人間界で苦しむお光にさしのべた救いの手は霞ヶ浦の大水である。

では、淡い初恋の相手への失望や養父母から金銭絡みの結婚をすすめられてさらに傷付き、人間の世に嫌気がさしていた、本来の自然児お光を親なる筑波山や自然はどのように導いたのであろうか。吉田は「霞が浦の洪水は、人間社会で苦境にあるお光に差し延べられた救いの手の役割りを果たしており、それは筑波山や〈自然〉によってもたらされたもの」(吉田(1992:222)だと述べている。言い換えれば親なる筑波山が我が娘を呼び戻すために霞ヶ浦に両者の媒介者の役割をさせたということであろう。自然から生まれたものは自然に帰るのがふさわしいという蘆花の考え方がうかがえる。

雨は已んで、空は星だらけだ。月も出て居る。(中略) 遙に北の方を眺むれば、常見る霞が浦俄に浮き上つたやうに、水森々として遙に天腹を浸し、見ゆる限りの陸影皆小さく沈んで、唯遙に筑波山の月影に青く見えるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一処に落ち合つて、十六島は何処に行つたか影も見えぬ。唯水勢浩浩々々として凄く南の方に押して行くのが荒海のやうに聞える。

(『蘆花全集第3巻』:233) (現代語訳IV-⑨)

満天の星空と大水の間に筑波山が遥かに見えるだけの清みきった夜、お光は舟に乗って親なる大自然に帰って行ったと見られる。昔から山岳信仰の対象とされていた筑波山はとうとうお光の願いを聞き届けたわけだ。お光にとって救いは肉体の死を通して実現されている。蘆洲で拾われたお光の故郷は自然にある。お光が筑波山に愛着を抱くのは本来の親の元へ戻りたいことへのメタファーとして受け入れられる。自然の中に帰って行ったお光の魂は滅びずに水鳥になって湖で歌を歌っているのである。

この作品が蘆花が陰鬱な環境と位階的家族秩序から解放された初期の作品である事を考

---

であって、想像を詩化したことを『富士』(『蘆花全集第18巻』:11)で告白し、その後その部分は削除された経緯がある。

えると、主人公お光の設定には当時の蘆花の心象風景の一断面が秘められていると言える。吉田は、「救い主の神を信奉する気持の強さから、＜自然＞が神を発動させる仲介として意識されている」と言う(吉田:1992:222)。天と地の媒介体として「水」と「鳥」を用いることで、さまざまな制約や束縛から自由に羽ばたこうとする蘆花の心情を表していることがわかる。

親なる存在として描かれている筑波山と人間界と山をつないでいる霞ヶ浦。そして自然の中で育ち自然を愛し、鳥に象徴されているお光自身が＜自然＞そのものである。自然児お光はその他の欲望や汚れにまみれた登場人物達とはっきりと区別されているのである。つまり、自然は親のような存在であり、主人公のお光も自然そのものとして認識されているのである。

### 3) 『自然と人生』—「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」

#### (1) 「自然に対する五分時」に見る自然の擬人化

蘆花の文筆家としての名声を高めた小説『不如帰』<sup>37)</sup>の成功により、自信を持って出版されたのが『自然と人生』である。『自然と人生』の表紙には蘆花自身が描いた水彩画が用いられ、標題紙の裏面にはワーズワースの“The still sad music of humanity”<sup>38)</sup>の一句を収めた詩が記されている。この事実は、「人間もまた自然の一部なのだ」と詠った自然詩人ワーズワースへの強い共感と、標榜の表れであると言えよう。

「自然に対する五分時」の冒頭にある＜此頃の富士の曙＞は1898年1月『国民新聞』に発表されたものである。これは好評を得て蘆花は自然詩人として注目された。「自然に対する五分時」は湘南の「永遠の浜」に佇んでそこから望む富士と相模灘の自然、さらに写生旅行先にて観察した上州の自然を美しい漢文調の文章で書き記した詩集である。特に昼より朝夕の自然の描き出す微妙な色彩の変化を鋭敏にとらえているのは、「午時よりも朝暮の時を愛し」たコロオに通じる<sup>39)</sup>一面であろう。戸外での写生修業の結果、自然の観察眼が細部まで行き届くようになり、自然の美しさや豊穰性に眼が開かれた(金子:2005:8)結果、山や海の一瞬一瞬の変化を逃さずスケッチしたものである。

「自然に対する五分時」では富士山をはじめ、伊豆の山や上州の山などを中心に美しい景色の変化が描かれているが、山を偉大な人物に喩えたり、山がささやいたり目を細めたりする

<sup>37)</sup> 1898年11月から、翌年5月まで『国民新聞』に連載。小説の出版は1900年1月。

<sup>38)</sup> 蘆花はこれを「静かに哀しき人類の音楽」と訳している。

<sup>39)</sup> 『自然と人生』(2005) 荒正人による解説文(蘆花:2005:252)。



描写がいくつかある。特に富士を見渡す相模の海の落日の描写を大聖人の臨終に喩えた部分は自然の擬人化の中でも圧巻である。

斯る風の夕に、落日を見る身は、恰も大聖の臨終に待するの感あり。莊嚴の極、平和の  
至、凡夫も靈光に包まれて、肉融け、靈独り端然として永遠の浜にイむを覚ふ。

(「自然に対する五分時」<相模灘の落日>『蘆花全集第3巻』:49)(現代語訳IV-⑩)

落日の五分時に目前で刻一刻と移り変わる富士と伊豆の連山の光と闇の織り成す美を眺めることを許された平和の極を一日の終りというよりは、長い人生を終える大聖の最期に見立てているところが蘆花らしい。身も心も融け入ってしまって霊だけがその場に佇んで、一瞬の平和が永遠に続くことを願う祈りが聞えるような一節である。さらに蘆花は山も海も擬人化する手法で自然の偉大さを歴史的人物に例えて言及している。また、自然に対して永遠(エターニティー)を感じるのは同時代の作家、国木田独歩の『武蔵野』にも見られる<sup>40)</sup>。

試みに或大河の澗に立つて(中略)無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流れを想ふのである。(中略)羅馬の所謂大帝國も斯く過ぎてしまつたではないか。(中略) 亜  
歴山、那破烈翁も、斯の通であつた。ああ、彼等は今何在哉。(中略) 永遠の二字は、  
海よりも寧ろ大河の澗にありと思ふ。

(「自然に対する五分時」<大河>『蘆花全集第3巻』:43) (現代語訳IV-⑪)

大河を隔てて呼びかはす此鶏声は実に宣い、チエルシアの賢とコンコルドの哲とは、実に斯の如く大西洋を隔てて呼びかはしたのであらう。

(「自然に対する五分時」<利根の秋暁>『蘆花全集第3巻』:44)(現代語訳IV-⑫)

日常生活の齷齪に立雑つて、然も心は挺然として無窮の天に向ふ偉大の人物は、実に

---

40) 「秋の中ごろから冬の初、試みに中野あたり、或は渋谷、世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪うて、暫く座て散歩の疲を休めて見よ。これらの物音、忽ち起り、忽ち止み、しだいに近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、それも止んだ時、自然の静蕭を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであらう。」(国木田:2012:17)参照。

斯の如くであるであらう。自分は上州に行く毎に、山が斯く囁く様に覚えるのである。

(「自然に対する五分時」<上州の山>『蘆花全集第3巻』:45)(現代語訳Ⅳ-⑬)

惨として風雨の来襲を待つ状、ウオトルローの英陣も斯と思はれて、沈鬱<sup>てつたう</sup>悲壯、跌宕なる

自然の威力の森然として身に浸むを覚ゆ。(「自然に対する五分時」<自然の声>

『蘆花全集第3巻』:53~54)(現代語訳Ⅳ-⑭)

汎神論的自然観であり、擬人化が多く見られるのは、エマソンの汎神論やカーライル<sup>41)</sup>の影響があると見られる。山の囁きや大河や風雨などの自然の音を聞きながら、ナポレオンやアレキサンダー大王のような歴史上の英雄に思いを馳せる蘆花は、彼らのような生き方を理想としていることがわかる。エマソンが『自然』の序で述べているように「自然の胸にいだかれれば、その生命の大河が、われわれの周囲を、われわれのなかを流れてゆく」実感を記したと思われる内容である。自然に即した生き方を理想とした蘆花の人生観を垣間見ることができる。また、そうした生き方への憧憬には家や兄からの完全なる自立を切望する蘆花の心情が存在していることも認められるであろう<sup>42)</sup>。限りある人間の生は自然の一部であるが、永遠の時の流れの中でそれは一瞬の夢のように過ぎ去っていくことを述べながら、自然を通して己れもまたその一部であることを実感する蘆花の自然認識が表れていると言えよう。

## (2) 「自然に対する五分時」に見るヒューマニズム

作者が「蘆花」という号を使うようになった由来について、清少納言の「蘆の花は見所とてもなく」の一節を引用しながら述べられている。これを愛するということは、蘆花が幼少期から常に感じていた兄蘇峰への畏れと反発心、また、家族制度の抑圧からもたらされた孤独感から形成されたと見られる、自己と同様の立場にある「弱者」への憐憫の情の表れであると言えよう。見所などないような蘆の花を直接観察してみると、一見ただけではわからないさまざまな生と死が営まれていることがわかるのである。「自然に対する五分時」で他の作品とは異なる客観的な自然描写がなされていることに注目して自然認識を考察してみる。

41) カーライルの著書『英雄崇拜論』において「世界の歴史は英雄によって作られる」と主張した。彼の言う「英雄」とは歴史に影響を与えた神、預言者、詩人、僧侶、文人、帝王などを指している。ダンテやシェイクスピア、ナポレオンなどを称賛している。

42) 『思出の記』の「公明正大の敵は二心の味方に優る万々とは、コルシカの児もよく言つた。(中略) 別て青年に禁物は此生温い空気である。」(『蘆花全集第6巻』:98)という記述から見ても、当時の蘆花の独立への強い願いが表れている。

蘆間の水は、<sup>ただ</sup>菅に鯿鯿蝦などの好むで棲む所なるのみならずして、五位鷺鳴なども此処をよき隠れ家となす。余が堤上に立ちて、暫く憩へる時、遙に一発の銃声響きしが、頓て鳴百舌鳥の類にや、<sup>たまげ</sup>魂消る様に鳴きつれて、ぱつと余が頭上を過ぎ、忽ち蘆花叢中に入りぬ。あとは静更に寂として、唯限りなき蘆花の<sup>せうせう</sup>蕭々として風に鳴るあるのみ。

(「自然に対する五分時」<蘆花>『蘆花全集第3巻』:66)(現代語訳Ⅳ-⑮)

何の見所もないように見える蘆洲において数々の物語が生まれていることを客観的に伝えている。静かに蘆がなびく蘆洲に突然パンと一発の銃声が鳴り響き、ぱつと鳥が頭上を過ぎたかと思うと、ずっと蘆洲に落ちてその後には何事もなかったかのように再び静寂が訪れるという動と静、そして生と死の描写が見られる。これらは「自然に対する五分時」の多くの作品に見られた誇張した表現ではなく、客観的に凝縮されていることがわかる。蘆花の憧れであった「漁師の娘」の舞台にも設定され、『自然と人生』の表紙絵でもある蘆花洲をスケッチしたこの作品は、「デッサンの確さを立派に示している」(中野:1984b:46)だけでなく、次に続く「湘南雑筆」での自然詩人蘆花の真骨頂を垣間見せている作品だと言えよう。

### (3) 「湘南雑筆」に見る自然の客観描写

『自然と人生』の中でも特に自然描写に優れているとされる「湘南雑筆」は、国木田独歩が<此頃の富士の曙>を読んで「徳富氏は自然の日記を書いたら面白かろう」と語った言葉に触発された(中野:1984b:43)こともあって、1899年1月1日から1年間1日も欠かさず書かれた自然の日記から抜粋、編集されたものである。

「自然に対する五分時」と「湘南雑筆」の自然描写においてもっとも異なるのは、前者に見られる汎神論的自然観や擬人化が、後者には見られないという点である。ただ「全身を忠実なレンズにして、ひたすら自然の変化観察に眼を凝らしている」(中野:1984b:47)のであり、それがために「語り手の立脚点が自然のなかにあることによって、自然の背後に神を見たいとする思惑は表立たずに済んでいる」(吉田:1997:11)と言う見方がある。蘆花自身が登場人物となって自然の驚異と相見えるものや、風景だけでなくそこに住む人間や動物、その音声までも映画の一コマ一コマを撮影しているような傾向が強くなった。従って扱われる動植物、職業、年齢などの幅が非常に多様となったことがわかる。場所は湘南とその近郊に限られているが、「当時の生活や自然の移り変わりがこれほど細かく描かれている作品は類を見ない」(中

野:1984b:48)ことから、高く評価できる。

雪猶融けず。地は凍り、水は氷り、万象口を噤みて、殆ど生意を見る能はず。(中略)  
雪を帯ぶる茅舎の影寒田に宿れば、田も半凍りぬ。林には波の吼ゆるが如き音あり。「冬」の  
声なり。残雪を帯ぶる枯蘆のがさがさと鳴る音、乾き果て、枯れ果てて、吾魂を爬き破る心  
地す。春は終に来らざるか。村のはづれには、女あり、雪かき分けて、冬菜を摘めり。村籬  
には椿紅に、梅花もちらほら咲きぬ。

(「湘南雑筆」<冬威>『蘆花全集第3巻』:133~134) (現代語訳IV-⑩)

ここには語り手である蘆花の外には生きているものが何もないような、冬の厳しい田園風景が描かれている。しかし、よく耳を澄ませると冬の声がする。そして村のはづれには女が冬菜を摘んでいる、というように蘆花の視点が風景から音、そして人間の営みへと順に動きながら、冬の中にも間違いなく春は息づいていることを客観的にスケッチしている文章である。この作品には語り手の感情を押さえながらも、春の予感を切望する人間の生が描かれている。

夕に浜に立てば、半天に火あり、数点。星には紅に過ぎ、漁火には高きに過ぐ。是れ何ぞ。ああ是れ伊豆の山焼くるなり。昼見れば、海の彼方に、此処彼処線香の煙の如くほのかに、夜は斯くの如く紅なり。山火か。山火か。海の彼方にも人住みて彼の火を焚くか。是れ海の彼方に住む「人」の十里の水を隔てて此方の「人」に生活の消息を伝ふる為に焚く烽火にあらざるか。

(「湘南雑筆」<伊豆の山火>『蘆花全集第3巻』:135) (現代語訳IV-⑪)

これは語り手が遠くに見える炎が山火<sup>43)</sup>であることを認識する、その数秒間の心の動きと感覚を写生した文章である。「自然に対する五分時」にあるように、鳥の鳴き声を偉大な人物達の交し合う声にたとえた大袈裟な文章とは異なっていることがわかる。短い自然を描写した文章の中で、自然の一部である生きた人間の息遣いがあるままに表現されている点に自然詩人蘆花の特徴を見ることができる。

次にもう1編、蘆花の弱者への温かい思いやりを感じることでできる作品をあげてみる。

43) 山焼きの火のことで、春の季語。

海は岩の彼方に帯よりも窄く、忽ち深碧天と際だち、忽ち白く光りて、空と一ならむとす。春帆二三、遠く伊豆の山を掠めて行く。(中略) 風止みて、舟中流に滞れば、子供等石を投じて之を追ふ。唾なる子の、年は少しまじりたるが、其中に立まりて、吾が放ちたる舟の首尾よく彼岸に着きしを、他の子供の袖曳きて指し示しつつ嬉々と笑へるも、あはれなり。

(「湘南雑筆」<磯の潮干>『蘆花全集第3巻』:146)(現代語訳IV-⑱)

「あはれな」唾の子供の明るさを捉えた蘆花の温かさを垣間見ることのできる文章である。春の暖かさの中に「悲哀」を感じ<sup>44)</sup>、「あはれ」さの中に明るさを見る蘆花の自然認識も見られる。弱き者、あるいは社会から疎外された者に愛情を寄せるのは平民主義的人間である蘆花の特徴と言える。この唾の子供への憐憫の情は『青蘆集』出版後、間もなく執筆された「唾の叫び」<sup>45)</sup>にある「哀は唾の叫より哀しきはなし。唾の叫は只天之を聞く。」(『蘆花全集第19巻』:218)と通じるものがある。

「湘南雑筆」においての自然認識は自然を通して「神」を見ようとする蘆花の意思には変らないものがあつた。表現の客観性と簡潔さによって、そこに登場する自然の風景や人間、小動物などの様子が生き生きとスケッチされることによって自然そのものが読み手に一段と近づいた感がある。言い換えると「自然に対する五分時」では悠久なる時の流れとともにある「偉大なる神」を感じる描写が多かつたが、「湘南雑筆」における田舎の風景と庶民の生活を生き生きと写した写生文からは、観念的であつた神と人間蘆花の距離が狭まつたことが感じられる。

両者ともに汎神論的な自然観が見られるが、「自然に対する五分時」が観念的で人間と距離感のある自然観であるとすれば、「湘南雑筆」の自然観は自然の中に人間の営みが存分に描かれることによって、即ち自然描写に人間が登場することによって、自然の背後にいる神と人間の距離がより近づいたと言えよう。そして自然と神は偉大な人物だけでなく、平凡な人間や唾の子供のように社会的弱者と共にある存在であることを蘆花は「湘南雑筆」において主張していると見ることができる。

#### 4) 『青蘆集』 — 「吾初恋なる自然」に見る自然児宣言

『自然と人生』出版後の1899年10月、蘆花夫婦は逗子での生活を閉じて、再び上京

44) 「自然に対する五分時」<春の悲哀>参照。

45) 1902年8月末から9月初めにかけて『国民新聞』に掲載された「唾余録」と総題された小品随想のひとつ。

し、俸給生活にも終止符を打った。つまり文筆活動のみで生活を立てていくという決意を持ち、完全なる独立を成し遂げたわけである。蘆花は従来民友社関係以外の仕事には一切筆を執らなかったが、その頃から他の文芸誌にも寄稿し始めている。1902年4月に文芸誌「小天地」に発表された「吾初恋なる自然」は<自然三部作>の最後を飾る作品である。

「自然」は余の初恋なりき。多くの初恋は、泡の如く消えざるは稀なり。独吾此初恋は、  
死に到つてま<sup>や</sup>さに已むべき恋なり。（『蘆花全集第3巻』:541）（現代語訳IV-⑱）

この文章で始まる「吾初恋なる自然」は蘆花の自然に対する率直な思いを語っている。幼い頃から儒教主義の家庭での不自然さに「反旗を掲げ」て心に憤りを持った蘆花は、家族または人間に理解されない鬱屈した思いを「自然の懷」において慰めようとしたのである。

その慰藉を自然の懷に求めぬ。自然の懷は慈母の懷の如く温暖ならずとするも、慈母の  
懷よりも自然にして且つ大に、其の愛も変ることなしと感したりき。  
（『蘆花全集第3巻』:542～543）（現代語訳IV-⑳）

春の季節、母の懷に抱かれているような「悲哀」を感じた<sup>46)</sup>ことと同様に、蘆花にとって自然こそが逃避地であり、安息の地であり、ありのままの自分を受け入れてくれる慈母のような存在だということがわかる。蘆花の幼少期から形成されてきた自然との深い関わりと自然観は、ワーズワースの孤独な生い立ちと美しい自然環境によって形成された自然詩に見られる自然観と相通するものがある。

自然をスケッチしながら「不思議なる自然の断片を時々ちらりと見える様になれ」て「自然は次第に余を導いて人を恋はしむるに到」ったと以下のように告白している。

今や自然はわづかに眼の開き初めむとする吾に教へんとして教ふ可きことの多きに惑えり。  
昔余『我』の殻中に田螺の如く鬱したれども、今は火の如くに人を恋ふ。（中略）然れど

46) 「自然に対する五分時」<春の悲哀>参照。ワーズワースの 'Lines Written In Early Spring' に見られる自然観と通じるものがある。

も、余は決して急がず、寸々歩みて、何時かは此小児の吾をば弊衣の如く脱ぎすて、正眼に自然を見、自由に人を愛するの時あらんことを信ず。

(『蘆花全集第3巻』:546) (現代語訳IV-②)

これは蘆花の本音である。『青山白雲』 「序」に「願はくは己を虚ふし、赤子となりて、伏して造化の秘書の一頁を披かん」と書いた其連続であった」(『蘆花全集第18巻』:11)とあるように、<自然三部作>を出版しながら、蘆花が「赤子」から「小児」へと成長した軌跡をうかがうことができる。

蘆花にとって自然とはただ美しくて写生意欲をそそるだけの対象ではない。自然は母の懐であり、自分を理解してくれる大いなる存在であると同時に、己れの「我」のせいで真実が見えなかったことを悟らせ、人を愛することの大切さを教えてくれた親なる存在である。自然を媒介に神を感じることができる。こうした自然認識にはエマソンの『天文学』にある「自然の温かな、愛情に富んだ、しかも鋭い声により、神はつねに人間を、より高い真理へと導く」(エマソン:2007:12)という思想の影響が見られる。

未だ蘆花の愛は観念的ではあるが、人間を含む自然に直かに触れて観察し、自然の中に神を見だし、いつの日か真に人間を愛する日の来ることを信じて待つ切実な心情を吐露している。この汎神論的な自然観は、念願に過ぎないものであったとしても「前にも増して強い自己主張となっていた」(吉田:1987:72)だけでなく、蘆花の生き方そのものになっていったと思われる。

『青蘆集』の内容は全体として雑然としている。その自然描写も新しいものはないと指摘されてはいる(中野:1984b:146)が、出版の翌年、民友社を辞して完全に兄と断絶し、黒潮社を設立して新たな出発に向おうとする指標といえる作品として位置付けられる。「青蘆」という題名から、若く瑞々しい蘆というイメージが浮かんでくる。蘆花は弱者への暖かい眼差しを持った作家である。だからこそ『不如帰』という家父長制下で犠牲になった女性の不条理な運命を書くことができた。人道主義を標榜する蘆花の特徴は、『青蘆集』 「吾初恋なる自然」の自然認識からも見られる。このような傾向は後の作品にさらに強く表されていくことになる。

## 5) まとめ

以上のように蘆花の<自然三部作>に表れた自然認識を考察してみた。蘆花は絵画の写生

から文章の書き方を学んだ作家である。逗子での写生修業によって開いた新境地が『自然と人生』をはじめとする創作活動に大きな影響を与えたことを『青山白雲』「序」の内容から確かめることができた。

蘆花には死ぬまで消えることのない自然への初恋の情熱が心に満ちあふれていた。様々な事情によって歪められてしまった自分を本来の姿に取り戻す努力をするために、その第一歩を逗子の地で踏み出した。「富士」と「相模湾」の美しい自然に囲まれて、兄や家族との確執や文筆家としてなかなか立てなかった鬱積を振り払うかのように、蘆花は写生に明け暮れた。そして自分の殻の中に閉じ籠もっていた人間であった蘆花が自然の中で次第に癒される過程が露呈された。これは「漁師の娘」のお光の中に投影されていた。蘆花の〈自然三部作〉には自然は故郷であり、慈母の懐である事が強調されている。自然はありのままの自分を受け入れてくれる。同時に、人を愛することの大切さを教えてくれる。ここから自然は親なる神とつながるという発想が出てくる。この点は西欧の超越主義や浪漫主義の文人らの思想とも相通する。

蘆花の自然描写の特徴の一つとして、自然への擬人化と感情移入傾向が挙げられる。このような傾向は次第にありのままの自然を簡潔に客観的にスケッチする方向に向かう。また、観念的であった神と自然描写も次第に具体化し、現実感が感じられるように移行した。自然観察から神を見出したいとする蘆花の文章は、人間も自然の一部であるという認識に至り、「自然を主とし、人間を客とせる」<sup>47)</sup>一幅の山水画のような写生文となっている。

蘆花の汎神論的な自然観は、エマソンやワーズワースらの影響を受けていると考えられるが、古来から日本人の持ってきた精神世界にも通じるものである。日本では古代の自然崇拜や精霊信仰に始まり、あらゆるものに神が宿っているという汎神論的な信仰が仏教と結び付いた後には、万物に仏性があるという教えが定着していった。エマソンは基督教のドグマを超えた思想をもっており、内村鑑三や新渡戸稲造らにも多大な影響を与えたとされている。青年期に基督教に入信し、西洋文学および思想に通じていた蘇峰の影響を受けながら、優秀な語学力を備えた蘆花が彼らの著作に触れ、その思想を受け入れるというはごく自然なことであったと思われる。

蘆花の自然に対する認識においても日本古来の汎神論的な自然観と、基督教における創造の神を認めるという東西の精神世界の融合が見られる。そうした自然認識が写生修業によって確立されていく過程を〈自然三部作〉を題材に考察してきた。直接自然に触れて観察

47) 蘆花自らが草した『自然と人生』の紹介文にある言葉。



し、自然を通して神を見ようとする汎神論的な自然観は、念願に過ぎないものであったとしてもより強い自己主張となっていたことがわかる。蘆花独特の観察力と文章力により、〈自然三部作〉を生みだし、これ以降の独特な蘆花の文学世界にこの自己主張が表されていたものと思われる。

### 3. 「灰燼」について

#### 1) 序

「灰燼」が執筆されたのは『自然と人生』刊行の約半年以上も早い1899年11月末から12月にかけてであった。『不如帰』の校正がほぼ済んだ頃で、新年小説として民友社に送られた作品である。しかし実際に掲載されたのは1900年3月3日から13日の『国民新聞』である。

年号が明治に変わり、西欧の文物制度が国内に広く浸透して行ったが、家夫長的な家制度<sup>48)</sup>は依然として根強く残っており、個人よりは家が重要視されていた。そのために嫡男ではなかった蘆花自身、家制度の中では尊重される存在ではなかった。家長の兄蘇峰<sup>49)</sup>の支配下にある弱者の立場にいた。そのような蘆花が自分と同じような立場にいる弱者に対して同情し、弱者の側に立つようになったことは彼の作品から読み取れる。

「灰燼」に先駆けて執筆された『不如帰』<sup>50)</sup>においては、当時の家制度の犠牲になった女性、浪子の悲惨な境遇を告発した。そこには封建的家制度への反発と、個人の意志など尊重されることのない女性への憐憫の情が描かれている<sup>51)</sup>。『不如帰』執筆の動機は、薄幸の女性の実話<sup>52)</sup>を聞き「もうもうわたし二度と女になんぞ決して生れはしませんよ」という哀れな女性の最期の言葉が、蘆花にこれは「小説だ！」と閃きを与えたことにある。

「灰燼」は蘆花が姉の山川常子から聞いた話を素材として、想像力を発揮して書いたもの

48) 家父・家長の支配権を絶対とする家族形態で、戦前までは法的に認められていた。1883年、21歳で徳富家の家督を相続した蘇峰は、蘆花にとって兄ではあったが、父親のような存在であった。

49) 蘇峰は1883年、21歳で徳富家の家督を相続した。

50) 連載は1898年11月～1899年5月にかけてであるが、刊行にむけて大幅に改稿、校正に至った時期に「灰燼」が執筆されたことに吉田(1975:50)は注目している。つまり『不如帰』執筆の情熱が冷めない時期に「灰燼」を執筆したことはこの二つの小説が封建的家制度の問題点を告発しようとした点で合致する。

51) 蘆花のか弱い女性に対する憐憫の情は多くの作品に登場している。

52) 大山巖(1842～1916)は元薩摩藩士、陸軍軍人、政治家で、その娘の信子に関する実話である。その後蘆花が大山家の事情などを調べた形跡はなかったこと、「灰燼」にまつわる弥富家に関する詳しく調べた形跡がなかったことも共通している(中野1984b:27)。

である。自伝的小説『富士』では、西南戦争の初期に戦乱を避けて家族と共に沼山津村で過ごした時のことを回想している。「この村の士族、Y家の次男が西郷軍に走って後に逃げ帰ったが、「わが家に乱臣を出しては済まぬと彼は腹を切らされた。彼は母に縋つた<sup>53)</sup>。然し母も父兄に異を云へなかつた。「阿母、あなたも！」を最後の一言に、彼は腹を切つて了ふた。」(『蘆花全集第17巻』:282)という話が蘆花の心をえぐり、頭から離れなかったとしている。「一度は書かねば気が済まなかつた」蘆花は、『不如帰』改稿の熱の冷めないまま「灰燼」を執筆した<sup>54)</sup>。

この切腹事件の真相について蘆花がくわしく調べた形跡はなかったが、ただ「阿母、あなたも！」の一言が閃きを与えて小説を執筆した経緯は、『不如帰』の執筆の動機と、大山家の事情などを詳しく調べなかったまま、執筆した経緯と非常に似ているという吉田(1975)の見解は的を射ていると思われる。

## 2) 作品の時代背景—西南戦争

「灰燼」の舞台は西南戦争である。西南戦争は1877年、政府に反発した鹿児島県の士族が、西郷隆盛を擁立して起こした日本最後の内乱である。1873年10月の征韓論政変<sup>55)</sup>で下野した西郷に従う鹿児島県の士族が私学校<sup>56)</sup>を中心に一大勢力を築いていた。鹿児島は中央の意向が届かない独立国家の様相を見せ、中央政府は西郷と私学校を警戒するようになった。廃刀令、扶禄処分<sup>57)</sup>など、士族階級にとっては生存そのものを脅かすような政策が施された。そして明治維新によって行き場を失った士族らは新政府に反発して、九州や山口県で反乱を起こしていた。1876年、熊本で起った神風連の乱を蘆花は9歳の時経験した。

『青山白雲』の「恐ろしき一夜」はそれについて言及している。この作品では時代の変遷に

53) 助けを求めた。すぎるの意。

54) 吉田(1975:50)に「『不如帰』執筆にそそいだ情熱のほとぼりのさめやらぬまま、「灰燼」の筆はとられた」とある。筆者もこの意見に同意するものである。

55) 1873年に起きた西郷隆盛の朝鮮遣使への賛否をめぐる政変。西郷、板垣退助、江藤新平らは遣使を主張したが、岩倉具視、大久保利通、木戸孝允らは朝鮮との戦争につながるとして内治優先の立場よりこれに反対。結局、前者らの意見が敗れ、西郷らは下野し、政府は分裂した。その後板垣は自由民権運動で政府に対抗したが、西郷と江藤は反政府の内乱を起こした。江藤は1874年2月、佐賀の不平等土族にかつがれて蜂起したが、政府軍に敗れて処刑された(『広辞苑』:1409)。

56) 西郷隆盛が退官後、1874年、郷里鹿児島県の城山に青年養成の目的で創設した学校。15000人が入学し、県政に関わっていた(『広辞苑』:1101)。

57) 明治政府の華士族への家禄支給の廃止政策。1876年の金禄公債交付で、利息収入だけでは士族の生活が非常に困難になったことから3分の2の士族が没落したとされる(『日本史事典』:316)。

乗り遅れた旧時代の人々を、蘆花がどのように見つめているかが推測できる。

十有九年瞬時に過ぎぬ。彼の恐ろしき一夜に、殺せし者も、殺されし者も、今は久しく青塚の下に睡りて、世は開明になり、利巧になり、随つて軽薄になり、臆病になり、彼の恐ろしく頑固なる恐ろしく真摯なる恐ろしく熱心なる神風連なるものは、旧時代の昔語りとなりぬ。

(『蘆花全集第3巻』:247~248) (現代語訳IV-②)

恐ろしく「頑固なる」、「真摯なる」、「熱心なる」神風連の生き方は確かに時代遅れである。しかし、開明になった時代とともに人間が「利巧」で「軽薄」で「臆病」になった理由のひとつとして、神風連のような人間が死に、利巧で軽薄で臆病な者が生き残ったためだと述べている。蘆花は神風連の人々の死を惜しむと同時に、当時の日本の国家の風潮を嘆き、皮肉っていることがわかる<sup>58)</sup>。

また、1897~1898年頃に執筆されたと思われる<桜>(『自然と人生』「写生帖」収録)には、蘆花が十歳の頃の回想がある。そこでは西南戦争で戦った薩摩人たちを直接見た思い出が鮮明に描かれている。この20年来、桜の花を見る毎にある男を思い出すという内容で、子供心に恐ろしかったが、どこか心優しく暖かみのある男の姿が描かれている。

賊と云へども、鬼にもあらざりと思ひつつ童は猶も歩み行きけるに、向ふより歩み来る男あり。(中略) 側を過ぐる童に其桜の枝を与へて、「恐ろしき<sup>えう</sup>ちやつな。はははは」笑ひすてて去りぬ。(中略) 彼桜を呉れし朱鞞の男は何と云ふ男ぞ。如何になりしぞ。杳として知る可からず。(『蘆花全集第3巻』:93~94) (現代語訳IV-③)

「灰燼」が執筆されたのは1899年の末である。上記の<桜>や神風連を題材にした「恐ろしき一夜」から3年経っている。「賊軍」の汚名を着せられた者たちへの憐憫の情をこの作品を書くことで表明している。同族同士の戦争の不条理と悲惨さを告発したと考えられる。蘆花は「勝てば官軍、負ければ賊軍」という歴史の法則をよく知っている。歴史は勝者の記録である。敗者を記録するのは文学である。作品の冒頭を見れば、挙兵した私学校の

58) 1896年に「恐ろしき一夜」は執筆されている。「灰燼」に先駆けて書かれたものであるが、時代の流れの中で犠牲になった者たちへの鎮魂歌といってもよい作品である。その感情は西南戦争で犠牲になった者への感情とも重なっている。

若者たちへの憐憫の情がうかがえる文章から始まっている。

勝てば官軍負けては賊の名を負はされて、思ひ出づれば去ぬる二月降り積む雪を落花と  
蹴散らして城を出でし一万五千の健児も、此処に傷き彼処に死し

(『蘆花全集第3巻』:6) (現代語訳Ⅳ-④)

また、主人公の茂が猛と論争をする場面でも、憐憫の情がはっきりと表れている。

「逆賊？西郷先生を逆賊？—逆賊と云ふのは、役人です。大久保の奴です。乗輿を  
挟んで国家の柱石を一」(中略)「勝敗は時の運です。」

(『蘆花全集第3巻』:24) (現代語訳Ⅳ-⑤)

逆賊の汚名を着せられた西郷を擁護するこの言葉は、蘆花の心情を語っていると言える。負けた者を思いやり、彼らにも彼らなりの正義があり、生きる権利があったということを代弁しているのである。

西郷隆盛に対して蘆花が持っていた感情は『死の蔭に』で具体的に見ることができる。蘆花が鹿児島をはじめ九州を旅行した際、西郷隆盛の37回忌に合わせて旅行し、西郷の足跡を訪ねている。西郷の命日と父一敬の誕生日が同じ日だと言いながら、自分との因縁を感じている。西南戦争の陣地や戦地となった可愛嶽や西郷が若い頃心中未遂をした海辺などを巡ってから西郷の命日に墓参をして、終焉の地である城山の岩崎谷を訪れている。西郷と共に戦った武士たちの墓参をしながら感慨に耽る蘆花は、西郷を回想しながら「あとあと産れて来る者共の為とあらば、頭の上を踏んで通られても、腹は立てまい、喜ぶであらう。然し我儕は少し無惨な気もちがする。惜しく思ふ。」と述べている。また養女の鶴子が当時の出来事について、蘆花が西郷の墓石を抱いて号泣したと証言していることから、西郷への尊敬の念は非常に強いものであったことがわかる<sup>59)</sup>。

59) 西郷を惜しむ著名人は他にもいる。西郷が名誉回復したのは1889年である。福沢諭吉の小論「丁丑公論」は1901年に出版されたが、執筆されたのは1877年である。ここにある「西郷は天下の人物なり。日本狭しといへども、国法厳なりといへども、豈一人を容るるに余地なからんや。日本は一日の日本に非ず、国法は万代の国法に非ず、他日この人物を用るの時あるべきなり。これまた惜しむべし」という内容のように、西郷の死に対して理不尽であると考えていた。また、時期はこれよりかなり遅れるが、内村鑑三は『Representative Men of

蘆花がこの作品を書いたのは日清戦争後、日露戦争開戦を目前にした時期であった。蘆花が日清戦争直後に書いた「訪はぬ墓」(『青山白雲』収録)では銃後の苦労の末、夫が戦地にいる時、一人寂しく死んでいった婦人について言及していた。この時期の蘆花はまだ非戦論者ではなかった。しかし西南戦争に参戦した者の家族や恋人達の悲痛を描くことで、戦争を嫌う気持ちを伝えている。

「西郷さん以来、此処等の小供までが軍の真似ばかり、戦争程いやなものはない」

(『蘆花全集第3巻』:10)

「彼疫病神の御蔭ぢや如何程皆困つたか知れぬへ。此中津近在でも泣きの涙で居る家

が四五十軒はある」 (『蘆花全集第3巻』:13)

日本は明治維新を前後して大きく変った。そのために多くの志士たちが熾烈に戦い、命を奪われた。一般庶民にも犠牲が強いられた。西郷は明治維新の功労者である。しかし不平士族を率って新政府に対抗し、戦争を起こして負けたために逆賊になった。戦争とは多くの人を不幸にする。無邪気な子供たちにまで影響し、子供たちは戦の真似をする。大人達は伝染病のように広がる風紀の乱れを嘆いている。西郷を疫病神に過ぎないという叙述の中には蘆花の西南の役に対する認識の一断面が見られる。

### 3) 登場人物の対立構図

「灰燼」の主人公の茂と猛兄弟の設定を蘆花の蘇峰に対する関係と置き換えて見る考え方もある。登場人物の対立構図を見ると、上田家の茂と猛兄弟があげられる。茂を取り巻く人物と猛を取り巻く人物とに分かれる。上田家の人物は、父久吾と母お由、長男覚、二男猛、三男茂である。上田夫妻については以下のように人物設定されている。

当主久吾は今年四十七、若かりし時は頭を漢学に腕を二刀流に固め、氣象烈き質なりしが、昨年来酒風症にて両脚の自由を失いしより、めっきり氣弱になりて(中略)奥様は名を

---

Japan』(日本語訳『代表的日本人』)(1908)で西郷隆盛に関して述べている。蘆花も福沢のような感情を持っていたとしても不思議はない。

お由どのと呼ばれて、(中略) 虫も殺さぬ人の好き奥様。

(『蘆花全集第3巻』:18) (現代語訳IV-㉔)

漢学と剣術を修めた父親と人のよい母親の間に三人の息子がいる。長男はウドの大木のようで、廃嫡同然の身である。二男は外見も思考も旧時代を代表するような人物であるが、三男は新時代を代表するような人物として描かれている。

二男の<sup>たか</sup>猛は、<sup>くぼ</sup>額凸くして<sup>にら</sup>眼凹み、(中略) <sup>うが</sup>知恵の塊、意地の化物、睨めば穿ち、笑へば<sup>こほ</sup>氷り、少なく言ひて、多く謀りぬ。趣味はまさしく父の正統をひいて、四書五経に育ち、果は馬具にも西洋を忌めば、<sup>すえ</sup>鬣もつい先年まで頭にのりて居たりき。季弟の茂は (中略) 早くも学問のすすめ自由の理さては東京の新聞に眼を曝らして、(中略) 年も行かぬに憂国三昧、とどのつまりは去る四月一通の置手紙して (中略) 血気の輩と南洲の軍に馳せ加はりぬ。

(『蘆花全集第3巻』:18~19) (現代語訳IV-㉕)

猛は学問は父譲りで、外見は冷たく狡猾な様相を持つ。思想も生活様式も頑なに旧時代のものを守ろうとする人物である。しかし、それとは正反対に茂は新時代の思想を受け入れる柔軟な思考の持ち主で、行動的な反面、深慮に欠ける人物である。続いて三兄弟の性格は次のようである。

兄弟三人、尤もよく食ふは覚、謀るは猛、熱するは茂にて、空気と水と火とは名をば覚、猛、茂とかへてここに上田の家に躰はれたりき。

(『蘆花全集第3巻』:19) (現代語訳IV-㉖)

ここでは猛と茂を水と火に喩えている。内容をまとめると、猛と茂は旧時代と新時代、水と火、知識と行動という対立関係にあることがわかる。両親は冷酷な猛を恐れ、自由奔放な末子の茂を愛し、財産も二分する考えであったとしている。

吉田(1975:52)は「茂の善玉にひきかえ、猛の徹底的な悪役という設定には無理があり」、「そうまでしなければ充たされなかった蘆花の意図には、兄蘇峰に対するコンプレックス

が潜伏している」と述べている。筆者も猛を蘇峰に当てつけたという見方よりは、兄への畏敬の念とコンプレックスの表れが強いと思われる。茂の描写にはこれだと思つくとすぐに熱中する蘆花の性質が反映されている。しかし、家というものを顧まない茂が両親の愛を一身に受けているという側面は蘆花兄弟の現実とは異なっている。これは封建的家族制度の下では無理のある設定だと思われる。父や祖父には愛されたが、母の愛に渴いていた蘆花自身の願望の顕れに過ぎないと思われる。

また、お菊をめぐる兄弟が争った回想にも、猛と茂の対立構造が見られる。覚と茂の争いに、覚には猛が加勢し、茂にはお菊とその兄が加勢し、三兄弟がお菊をそれぞれに想う構造が短い内容で書かれている。お菊が茂を慕う姿に、猛はいよいよ茂を憎むようになった。

素材ではY家の次男であった茂のモデルを小説では三男とし、長兄の覚を設定したことに關して吉田(1975:52)は「蘆花自身の兄への挑戦意識にある種のカムフラージュを施すことができた」と述べている。しかしそうした見方をすると、覚の存在は無意味なものになってしまうのではないだろうか。筆者はカムフラージュのために覚を設定したという捉え方より、狡猾な猛が無知な覚を自分の味方につけて二人で一つの勢力になり、それが茂と対立する構造を表していると考えられる。なぜなら、茂に切腹を迫る時にも、幼いころ覚と猛が共謀して茂と対立したように、猛と覚は同じ側に立っているからである。平素は覚のことを無視しながらも、茂と争う時は自分の利益のために覚を利用するという狡猾さが強調されている。もとより愚鈍な覚は自己の意志ではなく、猛の思いのままに従わされている無能な存在である。

蘆花の信奉者であった前田河広一郎<sup>60)</sup>は、「灰燼」を『自然と人生』の冒頭に置いたことと、「風景画家コロオ」を最後にしたことは、兄への無言の復讐であるととらえている(前田河:1938:384)。また、荒正人は「灰燼」を『自然と人生』に入れるべきではなかったと解説している。その理由として「近代小説でもないし、何よりも自然と人生という主題と関係がない」と述べている<sup>61)</sup>。もとよりこの小説は自然主義以前の小説であり、小説としての構成や展開には特筆する点はないかもしれないが、「自然と人生という主題と関係がない」という見解は蘆花の深意を捉えていないものである。「灰燼」を『自然と人生』の冒頭に置いたのは、単なる兄への反抗心や復讐といった大人気無いものだという見解は皮相的である。

60) 前田河広一郎(1888～1957)小説家。蘆花の後援で渡米。「種蒔く人」、「文芸戦線」同人のプロレタリア作家として活躍。

61) 徳富蘆花(2005)『自然と人生』岩波書店。文庫本の後付けにある解説を参考にした。

#### 4) 自然による裁き

「灰燼」では、封建社会や家族制度の告発だけに止まらず、最後には自然による審判が下される。社会制度を糾弾するまでには至らなかったが、こういった結末の背景に、単なる兄への反発や訣別だけではなく、キリスト教とエマソンの思想を基にした当時の社会告発を見ることが出来る。

この冒頭に書かれた文章は以下のようなものである。

し　　さ　　ぬ　　ぬ　　た  
み　　び　　け　　す　　か  
「蠹くひ、銹くさり、盗うがちて窃む所の地に、財を蓄ふること勿れ。

蠹くひ、銹くさり、盗穿ちて窃まざる所の天に、財を蓄ふ可し。

そは  
蓋なんちらの財の在るところに、心も亦ある可ければなり。」

(『蘆花全集第3巻』:4) (現代語訳IV-㉔)

これは言うまでもなく、新約聖書にある以下の聖句を根拠にしていることは明らかである。

自分の持ち物を売って、施しなさい。自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい。(ルカ伝12:33)

朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい。

(ヨハネ伝6:27)

冒頭にある上の文章は、目に見える宝よりも目に見えない天に宝を積むべきであるという、教訓的表現になっている。キリスト教的素養のある蘆花の言う「天」という概念は、当時の一般的な日本人にとっては理解が困難ではなかっただろうか。「来世」という概念ならかえって理解しやすいだろう。道理にはずれた行為のもたらす結果は天罰である。正直に生きて徳を積むことで天罰から逃れることができるだけでなく、来世で極楽に行けると考える。

また、エマソンの「自然は、われわれのうちに、立派な注意力を育ててくれる。自然はあやまちを許さない。自然の賛成は賛成であり、自然の反対は反対である。」(エマソン:2007:76)という言葉のように、主人公一家は神の審判ともいえる自然の審判を受けたと見られる。



自然の審判はどのように下されたのであろうか。茂の葬式の後、村人達が上田家をののしる囁きと、村の悪感霧の如く御屋敷の周囲に立籠める。そして茂の死後7日目の夜、すさまじい暴風が村を襲う。村人は茂の初七日だと知って念仏をあげて供養する心があるにも関わらず、父と猛は湯治に行き、覚は高いびきをかいて寝ているだけである。死に際しても死後においても家族から捨てられた茂の怒りは暴風をもたらし、この世の終りを告げるかのような風の審判を受ける。

あめつち かたづ ひつそり へう あふ  
天地の堅唾を飲みし様に寂然となりしと思へば、忽ち颯と吹き破る暴風一陣、一簾り家を  
あふ くわた くわた じゃり  
簾つて、戸障子瓦多々とはためき、砂石か木の葉がばらばらと雨戸にうちつくる音、瓦の  
飛ぶ音、枝をもがる老楠の悲鳴に和して、世は今にも尽きむかと危まれつ。

(『蘆花全集第3巻』:28) (現代語訳Ⅳ-㉔)

その風は行灯の火先を揺すって火の審判へと繋がっていく。行灯は茂の切腹の場面で「紅の血颯と行灯にしぶきぬ」とあった、その行灯である。母親は暗い行灯の光と油の染みを見て、行灯に飛び散った深紅の血の色だと錯覚する。障子の側に茂の存在を感じた母親は行灯の向かいにも茂の存在を感じて発狂していく。茂の影に追い詰められて母親は自分の過ちを告白する。しかし、狂気は火災をもたらし、燃え盛る火を見て恍惚となった母親は手を打って喜ぶ。

もう  
「ほほほほ、明るい、明るい、茂、茂、茂、最早堪忍してお呉れか。何、未だ『阿母、あなたも』つて？よ、よ、堪忍してお呉れ、阿母が乳呑むだ昔の茂になつてお呉れ。ほほほほ、明るい、明るい、さ、茂、爆竹<sup>62)</sup>をませう、爆竹」

(『蘆花全集第3巻』:30) (現代語訳Ⅳ-㉕)

火に次から次へと物を投げ込んで厄払いをするような母親の行動にあわせて、烈風が雨戸

62) どんど焼きのこと。熊本ではどんどやと言う。正月のしめ飾りや門松や書き初めなどを燃やして新年の厄払いを祈る日本の伝統行事。

を吹き払い、屋敷は炎に包まれて燃え上がる。茂に赦しを乞う母親の願いは聞き入れられず、茂の怒りは自然の力となって上田家を燃やしてしまう。燃え上がる描写の凄まじさは圧巻である。三百年の間、上田家を見守ってきた大楠の最期は、上田屋敷の最期と茂の苦しみを物語っている。炎に燃える大楠の描写を順に引用してみる。

焰の中に包まれし老楠の葉は焦がれ、幹は蠟々脂を流して、夥しき樟の臭を放ちつつ火龍の如く燃えぬ。(『蘆花全集第3巻』:33 傍線は論者による)(現代語訳Ⅳ-㉔)

今は唯三百年の老楠の宛ら天炬の如く弗々と烈風に燃えて末路の闇を照らすのみ。(『蘆花全集第3巻』:36 傍線は論者による)(現代語訳Ⅳ-㉕)

一しきり吹き募る風に、燃えに燃えたる大楠は、こらへかねてめきめきと裂けつ。暫し空中に踟躕ひしが、頓て夥しき地響うたして撞と灰燼の上に倒れぬ。火の粉まじりの灰ぱつと空中に飛むで、雨の如く舞ひ落ちたり。「灰だ、灰だ、御屋敷が灰になつた、灰に！」(『蘆花全集第3巻』:36~37)(現代語訳Ⅳ-㉖)

燃えざしの老楠の株のみ今も其のままに残れり。(『蘆花全集第3巻』:37)

深緑に茂っていた大楠は炎に包まれて「火龍」のようにごうごうと燃え、「松明」のようにふつふつと燃えた後、めきめきと裂けて灰燼の上に倒れた。そして今も焼け焦げた株だけが草むらの中に残っているという内容である。三百年築き上げた上田家の財産と歴史は一瞬のうちに火と風で灰になってしまった。それは大楠の燃える姿に表されている。

茂とその後を追って自害したお菊の墓には少女らが墓前に花を供えて霊を慰めるが、上田屋敷の燃えてしまった跡には誰も気味悪く思っ訪れる者もない。凄まじくさびれた焼け跡は虫の棲みかになっている。こうした両者の描写には封建的家制度や体面を重んじることを嫌う蘆花自身の思いと、それらの犠牲となった弱者らを憐れむ蘆花の心情が表れている。財力を盾に傲慢となって、愛すべき茂を死なせた上田家の全てを焼き尽くすことで、象徴的に家制度の犠牲者らを慰めようとしたと思われる。

ところで「灰燼」では財産は燃え尽きてしまったが、母と二人の兄は生き残った。これは何を意味しているのだろうか。蘆花自身、家制度の中で兄と対立し、兄だけを愛している母親との確執があった。しかし、小説の中で父だけが途中で死に、三人は生き残っている。まだ生きて天に宝を積む必要のある人間を蘆花独特の方法で暗示したのではないだろうか。

また、時代的に見て、当時の日本は日清戦争<sup>63)</sup>に勝利し、日露戦争<sup>64)</sup>に向かって進んでいた。戦争に勝利した傲れる日本と、西洋文明への盲目的な信奉と富国強兵、資本主義によって国民が物質中心主義に陥っていることへの警告だとも考えられる。

自然の背後に神がいることを実感していた蘆花は自然に反する人間を神が審判したことを表した。しかし、神は愛である。いかに茂を死に追い遣った罪のある人間でも、改心することのできる道を残したという結末は、クリスチャンである蘆花らしい側面であると言える。

#### 5) まとめ

先に述べたように「灰燼」は1900年3月3日から13日にかけて『国民新聞』に掲載された作品であり、『不如帰』に引き続いて書かれた。日本が日清戦争に勝利して、日露戦争に向かっていった時期である。この当時、徳富兄弟の方向性は急激に変化する。蘇峰は国家主義ならびに帝国主義に転向し、蘆花は「ユゴー、トルストイ、ゾラ」の人道主義を標榜した。『黒潮』では「自家の社会主義を執る」と述べた。

「灰燼」における上田家の兄弟間の葛藤と家督相続を通して、徳富家の蘇峰と蘆花を思わせるという見方には問題がない。蘆花は当時の文壇における写実主義と自然主義の流れについての知識があった。それにも関わらずこうした作品を書いたのは、自己の内面を解決するには前近代的な小説の形式がふさわしいと判断したからではないだろうか。『不如帰』では封建制度社会での女性の悲惨な運命と不条理を告発し、「灰燼」では明治の家父長制と家督相続制度の暴力性を告発したと言えよう。

文学の方法は、当時の他の作家に比べて前近代的だと言えるが、そこにあるテーマは明治時代に吹き荒れていた不条理を見つめていることがわかる。そのため蘆花文学について「社会文学」というタイトルがついていると思われる。

この作品は明治維新以後に起こった最後の土族の反乱である西南戦争を背景にして、封建

---

<sup>63)</sup> 1894年8月から1895年3月。

<sup>64)</sup> 1904年2月8日から1905年9月5日。

的な制度と価値観のために犠牲になった青年の物語が書かれている。この作品には多様な人間の類型が現れている。権力で弟の許嫁を奪おうとする兄、不義を目の当たりにしても正義を貫くことのできない母親、愛を貫くために自決する女性などである。現代にもこうした人間は見ることができる。人物設定の面から見ると、前近代的とは言えない。前近代性は作品の結末と解決方法が勧善懲悪を標榜している点に見られる。

勧善懲悪的な解決方法は蘆花の正義感の表れとして理解するべきであろう。蘆花は不義を断罪しなければならなかったのである。しかしそれは人間ができない領域である。自然を神と同格であるとする蘆花は、暴風と火災という自然の怒りによって、人間の営みを無に帰してしまっただのである。灰燼はそうした点で非常に象徴的な題名であると言える。

#### 4. 「漁師の娘」について

##### 1) 序

「漁師の娘」の舞台は霞ヶ浦の南にある浮島である。ここが舞台に選ばれた理由は、蘆花が「漁師の娘」執筆前の1896年の秋、霞ヶ浦を旅行して執筆した「水国の秋」から推察することができる。霞ヶ浦一帯を旅行しながら、蘆花が直接接触した美しい風景や朝夕の自然描写をはじめとして、浮島に関する内容が見られる。対岸の麻生から浮島を望む景色や、霞ヶ浦の背景に筑波山が遠くに望める風景に蘆花は非常に感銘を受けたことが次の文から受け取れる。

余は多く湖を見たれども、此処の如く気もはればれと心ゆくばかりの景色を見たることなしと思ふ。(中略) 今や何の遮るものもなく、上に空あり、下に水ある間に男体女体二つ並びて悠然と立つ温雅の山を見るなり。曩には唯筑波の双峰をのみ見き。(中略) 時は恰も小春の節、湖天長閑に晴れ。湖光鏡の如し。筑波の双峯、宛ら今水を出でし仙男仙女の如く、まばゆ気に朝日に向ひて、面を薄紅に染めつつ、悠然として香澄の水に鑑す。余は未だ此の山の如く温然玉の如きものを見ず。想ふに、筑波と云ひ、加波と云ひ、何れも曾て激しき人事の変を聞しものなるに、山何ぞ斯のごとく穩かなるや。

(『蘆花全集第3巻』:341~342) (現代語訳Ⅳ-㉔)

人間界のわずらわしさとは裏腹に、それらを見守るように悠然とした姿でそびえ立つ筑波山に対して蘆花は崇高さを感じていることがわかる。小さな浮島が偉大な筑波山に見守られているような感覚を覚えたものと思われる。蘆花は浮島に心を引かれたのであろうか、2日間に渡ってそこを訪れ、村人の生活や、風景のおもしろさに写生をしたことも書かれている<sup>65)</sup>。当時の浮島の印象について、次のように記している。

山茶花の生籬したるが多く、紅の花白き花半ば籬にあり、半ば地にあり、香气払々として鼻をおそひ、何処ともなく小鳥の鳴きて、別世界に入る心地あり、また蜜柑樹を植えたる家多く、黄玉累々として緑の葉に映りたるさま、眼も醒むるばかりなり。

(『蘆花全集第3巻』:343) (現代語訳Ⅳ-㉕)

浮島は花の香りが漂い、小鳥の声が響く別世界である。人々の日常生活は素朴であり、旅人の蘆花に茶をすすめるなど、人情味のある様子がうかがえる。このように蘆花が実際に訪れた浮島が「漁師の娘」の舞台となっている。

この利根の景色は蘆花のベストセラー『自然と人生』の表紙にもなっている<sup>66)</sup>。表紙の絵は夕月に大きい白帆と青蘆である。それほど蘆花に深い感銘を与えた舞台であることがわかる。

## 2) お光の象徴性

浮島名物の一つに数えられるというお光の歌声は、このあたりには知らぬ者のいないほどすばらしいものであるが、もうその歌声を聞くことはできないという導入からこの小説は始まっている。お光の歌については以下のようにある。

秋の夕日が西に入つて、紺色になつた馬掛の鼻<sup>67)</sup>から水鳥が二羽三羽すと金色の空を

65) 浮島への渡し舟の船頭は十五、六の子供であったことや、霞ヶ浦の女は皆舟を漕ぐことができることも記されている。それらの出来事は蘆花にとっておそらく新鮮な驚きであったと思われる。お光が舟を漕ぐことのできるのも、そうした実体験を元に行っていることがわかる。

66) 『富士』に「それは相模の海より利根の回想であつた」(『蘆花全集第17巻』:317)とある。

67) テキストでは「鼻」の字は「山へんに鼻」となっている。

筑波の方へ飛んで、高浜麻生潮来の方角が一带に薄紫になつて、十六島の空に片破れ  
月かしょんぼり<sup>かた</sup>と出て、浮島の黄ろく枯れた蘆の根もとに紅色の水ゆらゆらと流るる時分、空よ  
り湧いて清い<sup>しん</sup>と声、秋の夕の森とした空気を破つて、断続の音波が忽ち高く忽ち低く蘆の  
一葉一葉を震はして、次第次第に霞が浦の水の上に響いて行く時は、わかさを漁して戻る  
島の荒し男も身震ひして櫓をとどめた。実に此の歌こそは浮島の名物であつた。

(『蘆花全集第3巻』:217~218) (現代語訳IV-㉞)

お光は子のいない漁師の万作に浮島の蘆州の中で拾われる。お光という名前に込められた意味として、吉田(1992:222)は「光という<自然>を意識しているもの」としている。もう少し突き詰めていけば、太陽の使いという意味もあるといえるが、これについては後に詳しく考察することにする。お光の存在は老夫婦にとって希望の光であり、その名前は清らかで美しいお光の性質を表していると言えよう。

お光の出生はモーセがナイル川の蘆原でエジプト王女に拾われたことを思わせる<sup>68)</sup>。モーセは神が遣わした将来ユダヤ人の解放者となる人物であり、神は民族の救い主となる尊い赤子を王女に拾わせて大切に養育させたのである。しかし、お光の出現に際しては「拾われた」場面がない上に、万作は「拾った」とも言っていないのである。後にお光が自分は拾いっ児ではないのかと母親に問い正す所でその経緯が言及されているが、それまではお光が神秘的で普通の子供とは違う側面が強調されている。神聖な筑波山の贈り物として見なされるお光の特殊性がよく表れている文章を見ることにする。

「それ土産だ」と懐から取出したのを見ると、当歳の美しい女の子だ。「どうしたんべい、  
此の孩児は」<sup>おねつこ</sup>「此れか、此れか、此れは……婆、筑波さまに御礼申しや」

(『蘆花全集第3巻』:218) (現代語訳IV-㉟)

万作の言葉には、50才を過ぎた働き者の老夫婦が日頃から筑波山を拝んでいた信仰的土台の上に、筑波山の神が赤子を贈って下さったという意味が表れている。それでは「筑波さ

<sup>68)</sup> 吉田(1992:222)も指摘している。クリスチャンである蘆花らしい着想であると思える。

ま」を神聖視する万作夫婦の信仰心はどこから生まれたものであろうか。霞ヶ浦を旅行した際<sup>69)</sup>に、村人らが筑波山に向かって拝礼していた様子感慨深く見ていた蘆花自身、山への畏敬心を持っていたことは<妙義山>や<阿蘇山>に関する随筆などを見ても明らかである。このようにお光は神の贈り物として登場し、その成長過程も普通の子供とは一風異なっている。人間の姿をしているが、行動は「鳥」を思わせるものである。

ひよつと おし  
万一唾ぢやあるまいかと万作夫婦心配した位、口をきかない。其のかはりよく物を見る、よく聴いて居る。(中略)鳥を非常に愛して、よく諸鳥の鳴声を覚えて、からす雀や鴉を見ると、お光は直ぐ両手を羽の様にひろげて、舞ふ真似をする。(中略)三つ四つの頃から、お光は口をきかぬかはり、よく歌つた。如何にも清い、銀鈴の様な声をもつて居る。内に居ても、外ひとりに居ても、遊んでも、必ず何か歌つて居る。誰が教へたと云ふでもなく、独で歌ふ。

(『蘆花全集第3巻』:219) (現代語訳IV-③)

お光は蝶や草花に関心を持ち、風、雨、鳥の声などの自然の醸し出す音に聞き惚れる。そして小さい頃から舟に乗っても水を恐れるようすもない。人間の言葉を話すより、だれが教えたわけでもないのに鳥のように美しい声で歌を歌い、飛ぶまねをする。煙になって天に行きたいと言い、魚を食べるのはかわいそうだと言う。お光は自然が育てた存在であり、人間界よりも自然を愛して、天を慕う性質を持っている。お光は鳥の化身であると言える内容である。これは小説のエピローグにおいて、湖から聞こえるお光の声らしきものが「水鳥の声だと言う者もあった」という結びにも表れている。この結びの部分については後に詳しく考察することにする。

そうした性質を持つお光とは正反対の存在として万作夫婦は描かれている。万作は自然の景観や季節の移り変わりなどには全く関心のない無風流者であり、万作の妻は食べるために一日中働く存在である。

誰が心をつけるのであらう？お光の身体は万作夫婦の手で育つたが、お光の心を育て上げたものは筑波と霞が浦だ。山は天気予報、水は魚類の動静を見る外には、霞が浦が如

69) 「漁師の娘」執筆の2ヶ月前に訪れている。その紀行に関しては『青山白雲』 「水国の秋」に詳しく記されている。

何あらうと筑波がかうあらうと頓着もない万作が眼には何も見えぬが、お光の眼には、四季刻々うつりかはる景色が如何様に面白く珍しく見えたであらう！

(『蘆花全集第3巻』:223~224) (現代語訳Ⅳ-④)

万作夫婦は働き者であるが、彼らにとって自然とは単に肉体的生命を維持するための対象である。自然のさまざまな現象は学んでも、自然現象から喜怒哀楽や何らかの自然の意思を感じることはない。しかし、お光は自然の刻一刻の変化を敏感にとらえながら、孤独な心を慰められ、歌うことで自然と対話する。拾児と聞いてからお光の心を慰めるのは、歌と筑波山である。これは蘆花自身が自然によって心を慰められたことから設定されたと思われる。また、お光が夕焼けの美しい時分に好んで筑波山を望みながら歌うことも、蘆花が夕暮れ時を好んでスケッチした文章が多いことから設定されていると思われる。

実にお光の眼には、男体女体二つ並んで水と空の間にゆつたりと立つ筑波が、宛らに人のやうで、またさらに二親のやうに思はれて、其のゆつたりとしてやさしく大きく気高く清い姿がなつかしくてなつかしくて、其の前に歌ふ時は、恰ど父母の膝に突伏して、余所での悲しさを思ひ入れ泣くやうな心地がして、歌つて果は泣いて、それが為に心は慰められた。

(『蘆花全集第3巻』:226~227)

蘆花自身、自然によって心を慰められて、自然の懷に抱かれながら自然の背後にいる親なる神を実感した経験が、ここで再現されていることがわかる。お光が自然から生れ、自然によって育てられた自然児であることは、蘆花自身の実体験に基づいている。舞台を蘆洲に設定したことも含めて、自らの号を「蘆花」とするほど蘆洲に惹かれる「本来の自然児」として育った蘆花が、主人公のお光に自己の理想を託したと考えられる。

名に背かず磨かずとも光るほどの美しさ。色雪を欺いて、乱れて居れど髪つやややかに、紅梅の唇愛らしく、眉細くして、第一眼は玉とも露とも秋の水とも譬へかたなく澄んで美しい。

(『蘆花全集第3巻』:227) (現代語訳Ⅳ-④)

お光の外面的な美しさは天性のものであるが、その心の奥にある哀しみが、よりお光を引き立たせている。実の親のいない寂しさを筑波山や歌で慰めていたお光にとって、人間界に失



望する出来事が起こるのである。

### 3) 人間事のはかなさ

お光の辛い心を知るものは「只天道様ばかり」(『蘆花全集第3巻』:222)で、最も近いはずの親にもお光の心はわからない。またお光の美しい姿を見ても、女郎屋の亭主のように、「これは大したものだ、三百両の代物だ」と金に換算するだけで、お光の本質がわかる人間は一人もいないのである。

子供の頃、学校で捨児だといじめられたことから人との交わりを避けてきたお光であったが、14歳になった時ある華族の若者に恋をした。ある日舟に乗せた若者が落とした白いハンカチを拾って大切にしていたが、2、3ヶ月後、放蕩な若者の姿を見て、「如何にも不思議相に、それから哀しさうに、無念さうに眺めていた」お光はハンカチと共に恋心も捨ててしまう。美しいと思っていた人間がこのような醜い行いをする事自体、自然児のお光には到底理解できないことである。異性への憧れは幻滅に変わり、以前にも増して人間というものにお光は失望した。それ以降お光は深く思案に沈むようになるが、そんな時は筑波山に向かって歌を歌いながら心を慰めた。

お光はいっそう人中に出ることをいやがり、その代わりに今まで以上に親孝行をした。養父母が育ててくれたことへの感謝の気持ちを持って、けなげによく尽くした。やがて万作は60歳を越えて体が不自由になり、以前のように仕事もできなくなった。リウマチで体の痛む万作は大酒を飲んで事あるごとに非のないお光を叱りどばすようになる。

しかし、ある日、万作たちが楽な生活ができるように保障してくれるという、ある金持ちの妾になるように縁談をすすめられたことは、お光の人間界における最後の希望の砦を崩壊させる出来事であった。ついにお光は育ての親にも失望し、筑波山を眺めて物思いに沈む。己れの安楽のためなら養女を金で売るような真似をする人間の浅はかな姿は、自然児であるお光が人間界に愛想をつかす決定的事件となってしまった。これ以上人間界にとどまることは、お光にとっては苦痛でしかないのである。

### 4) 自然への回帰

お光が十五の秋、霞ヶ浦一带に大雨大風が続いて万作の家も浸水してしまった。親子三人が後ろの山に小屋を立てて避難した日の夜、お光は熱にうなされて苦しむ万作のために焼

酎を買いに、洪水で荒れる湖に舟を出してとうとう帰って来なかった。

雨は已んで、空は星だらけだ。月も出て居る。(中略) 遙に北の方を眺むれば、常見る霞が浦俄に浮き上つたやうに、水森々として遙に天腹を浸し、見ゆる限りの陸影皆小さく沈んで、唯遙に筑波山の月影に青く見えるばかりだ。更に南の方を見ると、北利根、横利根、新利根の水一処に落ち合つて、十六島は何処に行つたか影も見えぬ。唯水勢浩々渺々として凄じく南の方に押して行くのが荒海のやうに聞える。(『蘆花全集第3巻』:233)

吉田は「霞が浦の洪水は、人間社会で苦境にあるお光に差し延べられた救いの手の役割りを果たしており、それは筑波山や<自然>によってもたらされたもの」(吉田:1992:222)だと述べている。言い換えれば、親なる筑波山の神が娘を呼び戻すために霞ヶ浦に両者の媒介者の役割をさせたということであろう。

自然から生まれたものは自然に帰るのがふさわしいという蘆花の考え方がうかがえる。満天の星空と大水の間に筑波山が遥かに見えるだけの清みきった夜、お光は舟に乗って親なる大自然に帰って行つたと見ることができよう。昔から山岳信仰の対象とされていた筑波山はお光の願いを聞き届けたということになる。お光にとって救いは肉体の死を通して実現されている。

お光を失った万作夫婦は茶断ち塩断ちしながら筑波山に願をかけるが、帰って来たのはお光が持って出た万作の徳利だけであった。これは筑波山が象徴的に万作夫婦の願いをきいたことの証しであると同時に、親孝行なお光からの養父母へのメッセージであると捉えることができる。蘆洲の中で拾われたお光の故郷は自然にある。お光が筑波山に愛着を抱くのは本来の親の元へ戻りたいことへのメタファーとして受け入れられる。自然の中に帰って行つたお光の魂は滅びずに水鳥になって湖で歌を歌っているのである。

島の次郎八と云ふ漁師が、或朧月夜の夜晩くわかさを漁して帰る時、幽に聞いた歌の聲が、全くお光の聲の様で、耳を澄して聞くといよいよ夫れに違ひない様だから、次郎八は声をしるべに舟を漕いで行くと、何処まで行つても茫々とした朧月夜の湖で、人の影もない。よく聞くと、其歌ふ聲が水の底にあるやうでもあり、空にあるやうでもあつて、稍久しく迷つて居たが、終に思ひ切つて舟を返すと、其の歌の聲は遠くなり近くなり、久しい間幽に響いて居たと

云ふことであつた。併し其れは水鳥の声だと云ふ者もあつた。

(『蘆花全集第3巻』:235) (現代語訳IV-④)

このエピローグは、「水国の秋」の文末にある次の部分に由来するものであると思われる。ローレライ伝説を思わせるような神秘的な文章である。

若しある明月の夜に際せむか。(中略) 此時漁夫月に乗じて一曲潮来の古謡を歌ひ来る  
声縹渺として空明に散ずるを聞かば、諸君腸を断たらざらんと欲するも豈に得べけんや。

(『蘆花全集第3巻』:348) (現代語訳IV-④)

お光が姿を消してしまってもその声がどこからともなく聞こえてくるという内容は、布川(1993)が指摘しているように、ワーズワースの「ルーシー・グレイ」の影響もあると考えられる。しかし、お光は幼いころから誰に教わったわけでもないのに、まるで鳥のように歌を歌ったり、羽ばたく真似をしたり、天に上りたがったりした。エピローグにおいてお光の歌うような声が水鳥の声だという者もあった。このように、一貫してお光が鳥の化身のように描かれていることと、「水国の秋」の最後の文章に注目してみる必要があるだろう。

それでは何故お光が鳥に比喻されているのであろうか。そのひとつに、舞台の浮島が蘆洲で野鳥の宝庫である<sup>70)</sup>ことと関係があるだろう。また、日の光のように輝くお光が鳥に喩えられた根拠として、1896年11月の霞ヶ浦地方の旅行に関する2編の散文詩を挙げる事ができる。

日の使とも覚しき渡り鳥の一列鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大瀛の波と云ふ波は尽く  
爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさざめき——声なきの声四方に満つ。

(『自然と人生』「自然に対する五分時」<大海の出日> 傍線は論者による)

(現代語訳IV-④)

<sup>こうこう</sup>  
朝日は杲々として今息栖の宮の梢を離れたのである。其の梢離るる鳥一羽、朝日を負ふ  
て、宛ながら暁を告げ渡たる神使の如く、凜とした朝の大きに羽搏つて、小見川の方へ飛ん  
<sup>あをあを</sup>  
で行く。小見川は未だ碧々とした朝霧に眠つて居る。

70) 稲敷市観光協会(<http://www.inashiki.com/park.html>) ホームページ参照。

(『自然と人生』 「自然に対する五分時」 <利根の秋暁> 傍線は論者による)

(現代語訳IV-④)

どちらの文を見ても、鳥が「日の使」や「暁を告げ渡たる神使」として、太陽の御使いに喩えられている。このような喩えは自然スケッチ文の中ではこの2ヶ所で見られる。これが蘆花の記憶に印象深く残り、お光が陸と空を自由に羽ばたく鳥のような存在として描かれているものと思われる。

鳥に比喻されるお光は蘆花が家や兄の束縛から逃れて自由を求めようとした心を表しており、自然へと帰っていったお光のように、執筆された時期から蘆花も自然と深く関わっていくのである。

#### 5) まとめ

『青山白雲』の「水国の秋」に始まり、「漁師の娘」、さらには『自然と人生』にある上記の二作品において、霞ヶ浦地方の旅行に関する紀行文・小説・散文詩が何度も繰り返されている。これらの事実は浮島訪問後、蘆花が「どん底」の精神状態<sup>71)</sup>から脱出し、自然詩人として大成する過程において、この旅行が非常に重要な転換点になったことを示すものであると言えよう。この約1ヶ月半後に東京から逗子に転居し、心機一転した蘆花が初めて書いた小説がこの「漁師の娘」である。

この作品では、それ以前の自然に関する文には見られなかったような自然の取り扱い方がなされていることは、吉田(1992:222)や布川(1993:61)がすでに指摘していることである。また『新春』にあるように「自然は神です。神は自然です。自然の子は、父の自然に帰らねばなりません」(『蘆花全集第10巻』:283)という蘆花の考えや、蘆花自身が「漁師の娘」に憧れていたらしい(『蘆花全集第17巻』:193)事実などと合わせて総合的に見ると、この小説の主人公お光の生き方に蘆花が目指す自然詩人としての原型があると言えよう。大都会での人間関係のわずらわしさから離れて、父母の居る逗子の自然の中で心が癒され、己れの行くべき道をしっかりと歩み始めた蘆花の姿とお光には通じるものがある。

<sup>71)</sup> 自伝的小説『富士』に、1896年の蘆花が「どん底」の状態であったことが詳細に書かれている。「明治29年は熊次がどん底に墮ちた最暗黒の年である。」(『蘆花全集第17巻』:28)と蘆花は振り返っている。どん底の中で、生活費にまで事欠きながらも写生行脚を行った年である。その状態から脱出する一つのきっかけとなったと思われるのが、霞ヶ浦地方への旅行である。その年末に逗子行きを決定し、翌年1897年1月3日に転居して、そこで「漁師の娘」をはじめ、『自然と人生』に収録される多くの作品を執筆することになった。

お光の自然への回帰は死であるが、肉体的生命の死を超越した永遠なる自然の中に行き続ける姿が描かれ、肉体の死は魂が自然と一体になることを意味している。死も自然の営みの一側面であり、肉体を離れた魂は自然の中で滅びることのない歌声となり、死は終りを意味するものではないということがわかる。天と地の媒介体として「水」と「鳥」を用いることで、さまざまな制約や束縛から自由にはばたこうとする蘆花の心情を表していることがわかる。つまり、死は終りではなく、親なる神のもとに帰ることと、自由な魂の世界を意味しているのである。



## V. 結論

これまで徳富蘆花の初期習作である『青山白雲』、『自然と人生』、『青蘆集』を一つの流れととらえて、これら〈自然三部作〉の成立過程と自然描写の特徴に焦点をあてて考察してきた。

その一環として、第Ⅱ章「〈自然三部作〉の成立背景」では、まず熊本藩の儒教的雰囲気と家族関係とキリスト教の信仰、そして民友社への入社が蘆花の精神形成にどのような影響を与えたのか探ってみた。

儒教という位階秩序が重要視される環境の中で、自由な魂を持つ少年が自然の中に突破口を求めたのは当然なことであると思われる。また、近代黎明期において、倒幕の中心勢力になれなかった熊本藩は、遅れを取り戻そうと、早くから西洋の学問と技術をとり入れた。熊本洋学校の設立もその政策のひとつであった。この学校で、兄蘇峰をはじめ、姉初子や従姉の横井みや子らが学び、生徒らは自然にキリスト教に関心を持ち、ついに熊本バンドを結成した。しかしキリスト教と国家の関係を意識した結盟であったため問題視され、洋学校は閉校になる。閉校後、キリスト教精神で建学された同志社英学校に学んだ熊本バンドの学生らと蘆花兄弟達は、引き続きキリスト教の影響圏におかれた。

彼らはキリスト教の精神から平民主義と人道主義を学び、ここで学んだ精神が蘆花においては人道主義として現われ、蘇峰においては国家主義へと発展していった。これが兄弟として運命の岐路であったといえよう。

民友社への入社は重大な出来事であった。5歳年長の兄蘇峰の監督下にいたため、蘆花にとっては心理的な抑圧感と束縛感が大きかった。しかし、優れた英語力を持っていた蘆花は民友社で新聞記者として働きながら、リアルタイムで世界の動きを知り、西洋の偉人達の思想や芸術に接することができた。

〈自然三部作〉の成立に特に影響のあった芸術家として、トルストイ、コロー、ワーズワースとの関連性について考察してみた。特に民友社の企画した『十二文豪』シリーズで蘆花が担当した「トルストイ」の執筆は、彼の人生において大きな足跡を残した。後日、トルストイに会うためにロシアに行き、トルストイの家族と寝食を共にするなど、親しく交わった。帰国後には

トルストイのように晴耕雨読の生活を理想として、自らを「美的百姓」と呼び、半農生活を送ることになる。

蘆花の自然詩人としての位置づけに寄与した写生修業の来歴と西洋ロマン主義の文人の影響について探ってみた。蘆花は西欧印象派画家で、特にバルビゾン派画家の自然スケッチに傾倒した。それが自然スケッチの作品と「風景画家コロオ」という評論を生んだ。

文人としてはイギリスのロマン主義の代表的な詩人であるワーズワースとアメリカの超越主義の文人であるエマソンの影響が強く見られた。フランス共和主義に共感していたワーズワースはフランス革命後の成り行きに失望した。人間と社会に失望し、自然と交感しながら傷付いた心を癒し、その中で作り上げた孤独を愛する世界は、ワーズワースの詩の大きな特徴でもある。また、エマソンはロマン主義運動の一つである超越主義を標榜したアメリカを代表する文人である。その神秘主義的な汎神論が蘆花に大きな影響を与えたことが認められた。

第Ⅲ章「＜自然三部作＞の構成と特徴」では、独立した作品集である『青山白雲』、『自然と人生』、『青蘆集』の独特な構成と特徴を分析してみた。これらには共通して「自然を主として人間を客とせる」という蘆花の確固たる認識が込められている。人間は自然から生れて自然に帰っていく存在であり、大自然の一部であった。また、大自然を創造主の化身であるとみている。これはエマソンの思想とも一致しており、日本人の持つ汎神論的な自然観とも相通じる。

第Ⅳ章「＜自然三部作＞の作品世界」では、まず、学術誌に発表した論文を部分的に修正して収録した。「＜自然三部作＞に見られる水の空間とタナトス」、「＜自然三部作＞に見られる自然認識」というテーマで、三部作を鳥瞰的に分析した論文である。それに続いて微視的に作品別に分析・考察したものが「「灰燼」について」と「「漁師の娘」について」である。

「灰燼」は、人間の営みが自然の営みに比べると、いかに無力なものであるのかを描いた小説である。西南戦争を舞台に展開されたことには、西郷隆盛をはじめ、逆賊とされた人々への蘆花の哀悼の心情があったことがわかった。たとえ前近代的な勧善懲悪というテーマを扱っていたとしても、自然の威力で人間の不義を断罪することによって、蘆花特有の人間味と正義感を表現した作品である。

「漁師の娘」のお光は鳥の化身として描かれており、それは蘆花の自由を求めて大自然へと向かおうとする心の表れであることがわかった。そして山と湖に代表される大自然の慈愛と

包容力は「死」という人間的な悲哀を超越していることがわかった。

初期作品の中には、その後に展開される作品の原形が内包されているといわれる。蘆花の場合も例外ではなかった。『自然と人生』 「写生帖」の〈可憐児〉には、その後長篇小説となる『不如帰』、『黒潮』の原形が見られた。即ち社会的弱者や、女性の立場を理解し、擁護しようとする態度である。また、〈自然三部作〉に見られる自然描写は、『みみずのたはごと』における自然礼賛と自然と人間の共生を主張するという作品の原形が見られた。〈自然三部作〉の考察により、蘆花の自然詩人としての側面と、平民主義を標榜する生き方が浮彫りにされた。〈自然三部作〉以降、蘆花が進んでいく方向性が初期作品の中にすでに胚胎していることがわかった。『みみずのたはごと』等の作品に関しては今後の研究課題としていきたい。





## [参考文献]

### < 日本文献 >

#### [テキスト]

徳富蘆花(1929)『蘆花全集第3巻』蘆花全集刊行会

#### [事典類]

岡村道雄他(1991)『日本史事典』平凡社

新村出編(1998)『広辞苑第四版』岩波書店

日本近代文学館編(1977)『日本近代文学大事典第四巻』講談社

#### [単行本]



阿部軍治(2008)『徳富蘆花とトルストイ改訂増補』彩流社

内村鑑三(1958)『余は如何にして基督信徒となりし乎』岩波書店

エマソン(斎藤光訳)(2007)『自然について』日本教文社

エマソン(伊藤淳訳)(2009)『エマソンの「偉人論」一天才たちの感化力で、人生が輝く。』

幸福の科学出版会社

カーライル(老田三郎訳)(1988)『英雄崇拜論』岩波書店

ガストンバシュラール(及川馥訳)(2008)『水と夢—物質的想像力試論』法政大学出版局

柄谷行人(1988)『日本近代文学の起源』講談社

国木田独步(2012)『武蔵野』新潮社

熊本県立大学編著(2009)『至宝の徳富蘆花』熊本日日新聞社

佐藤勝他(1981)『日本文学資料叢書・明治の文学』有精堂

- 司馬遼太郎(1994)『明治という国家(上)(下)』日本放送出版協会
- 鈴木範久(1980)『内村鑑三をめぐる作家たち』玉川大学出版部
- 徳富蘇峰(1997)『弟徳富蘆花』中央公論社
- 徳富蘆花(1928~30)『蘆花全集全20巻』蘆花全集刊行会
- \_\_\_\_\_他(1971)『現代日本文学大系(9)徳富蘆花・木下尚江集』筑摩書房
- \_\_\_\_\_他(1972)『日本近代文学大系(9)北村透谷・徳富蘆花集』角川書店
- \_\_\_\_\_ (2005)『自然と人生』岩波書店
- 中尾充夫(2010)『落穂拾い 人間トルストイ余話』文芸社
- 中野好夫(1984a)『中野好夫集(9)蘆花徳富健次郎第1部』筑摩書房
- \_\_\_\_\_ (1984b)『中野好夫集(10)蘆花徳富健次郎第2部』筑摩書房
- \_\_\_\_\_ (1984c)『中野好夫集(11)蘆花徳富健次郎第3部』筑摩書房
- \_\_\_\_\_・横山春一監修(1985)『蘆花日記(一)』筑摩書房
- 日本聖書協会(1974)『聖書』三省堂
- 昇曙夢(1918)『トルストイ十二講』新潮社
- 福田清人他(1967)『徳富蘆花(センチュリーブックス人と作品35)』清水書院
- 前田河広一郎(1938)『蘆花伝』岩波書店
- 峯岸英雄(2003)『徳富蘆花の思想源流』エム・コーポレーション
- 柳田泉他(2000)『座談会 明治・大正文学史(2)』岩波書店
- 鏑田研一(1937)『小説徳富蘆花』第一書房
- 吉田正信他(1996)『異文化への視線』名古屋大学出版会
- 渡邊勲(1999)『恒春園離騷—蘆花と蘇峰の相克』創友社

### 【研究論文・雑誌】

- 有山輝雄(1995)「民友社ジャーナリズムと地方青年」『コミュニケーション紀要(10)』成城大学
- 伊藤彌彦(2003)「人間徳富蘆花—ある幼児セクハラ被害者の痛ましい魂の遍歴—」  
『同志社法学』同志社法学会編
- 今中寛司(1971)「徳富一敬の入信とその思想遍歴」『キリスト教社会問題研究第18号』

同志社大学人文科学研究所

- 大庭勝(1991)「ネイチャーから自然へ」『成城紀要(135)』成城大学文芸学部
- 金子孝吉(2005)「徳富蘆花による伊香保の自然描写について—『自然と人生』「自然に対する五分時」を中心に」『滋賀大学経済学部研究年報12号』滋賀大学経済学部編
- 高橋誠一郎(2004a)「司馬遼太郎の教育観—『ひとびとの聲』における大正時代の考察」日本ペンクラブ電子文芸館編輯室
- \_\_\_\_\_ (2004b)「司馬遼太郎の徳富蘆花と蘇峰観—『坂の上の雲』と日露戦争をめぐって」『Comparatio』九州大学
- 西田毅(2010)「平田久—丹後宮津出身の異才・未完のジャーナリスト」『同志社時報第129号』学校法人同志社
- 野山嘉正(1999)「近代小説新考明治の青春—徳富蘆花『自然と人生』(その一)」『国文学解釈と研究』学燈社
- 橋爪恵子(2004)「ハッシュルに於ける〈物質的想像力〉とイメージ—主観的認識としてのイメージの伝達可能性—」『美学第55巻1号(217号)』美学会編
- 橋本暢夫(1992)「中等国語教材史からみた徳富蘆花」『全国大学国語教育学会発表要旨集(82.6)』全国大学国語教育学会
- 布川純子(1993)「徳富蘆花「漁師の娘」について」『成蹊国文(26)』成蹊大学文学部日本文学科
- 保明陽子(2003)「〈反近代〉小説としての『灰燼』—トルストイ受容による徳富蘆花のモダニズム—」『駒沢大学大学院国文学会論輯』駒沢大学大学院国文学会
- 楨林滉二(1971)「横井小楠実学の系脈：蘇峰・蘆花の意味」『国文学攷(55)』広島大学国語国文学会
- 森一(1985)「徳富蘆花とワーズワス」『相模女子大学紀要(49)』相模女子大学研究委員会編
- 吉田正信(1974)「明治二十年代の徳富蘆花—その文筆活動の素描—」『国文学研究(53)』早稲田大学国文学会
- \_\_\_\_\_ (1975)「『灰燼』論—蘆花の叛旗—」『日本文学』日本文学協会
- \_\_\_\_\_ (1977)「徳富蘆花の自然スケッチ—その修業時代—」『日本文学』日本文学協会
- \_\_\_\_\_ (1980)「『青山白雲』おぼえがき—文学者蘆花の出発—」『国語国文学報(37)』愛知教育大学国語国文学研究室

- \_\_\_\_\_ (1983) 「蘆花健次郎著作目録稿」 『国語国文学報(40)』 愛知教育大学国語国文学研究室
- \_\_\_\_\_ (1987) 「『青蘆集』 おぼえがき—「角ぐむ蘆花」—」 『国語国文学報(44)』 愛知教育大学国語国文学研究室
- \_\_\_\_\_ (1992a) 「蘆花健次郎の自然観—その形成過程と文学への形象化についての概観—」 『愛知教育大学研究報告(41)』 愛知教育大学
- \_\_\_\_\_ (1992b) 「蘆花におけるトルストイの受容—『順礼紀行』 前後—」 『国語国文学報(50)』 愛知教育大学国語国文学研究室
- \_\_\_\_\_ (1997) 「自然と人生—その構成と思想性—」 『国語国文学報(55)』 愛知教育大学
- \_\_\_\_\_ (2001) 「徳富蘆花におけるワーズワースの受容—「哀音」に注目して—」 『国語国文学報(59)』 愛知教育大学国語国文学研究室
- \_\_\_\_\_ (2003) 「蘆花徳富健次郎の文学観—「何故に余は小説を書くや」まで—」 『国語国文学報(61)』 愛知教育大学国語国文学研究室
- \_\_\_\_\_ (2006) 「徳富蘆花におけるキリスト教—その前半生をめぐって—」 『愛知教育大学大学院国語教育(14)』 愛知教育大学大学院国語教育専攻
- 渡辺勲・伊藤彌彦(2011) 「矢野鶴子さんに聞く: 蘆花夫妻の思い出」 『同志社談叢同志社談叢(31)』 同志社大学同志社社史資料センター

## < 韓国文献 >

### [論文・単行本]

- 서은선·윤일(2009) 「일본 사회소설 『흑조(黑潮)』 와 한국 신소설 『은세계(銀世界)』 비교 연구(1) - 장르 특성과 서사 구성」 『동북아 문화연구(21)』 동북아시아문화학회
- \_\_\_\_\_ (2010) 「『은세계(銀世界)』 와 『흑조(黑潮)』 비교 연구(2)」 『동북아 문화연구(25)』 동북아시아문화학회
- 이지자 외(1989) 『문학의 상징·주제 사전』 청하
- 진웅기 역(2003) 『자연과 인생』 범우사

細見典子・金鸞姫(2012) 「<自然三部作>に見られる水の空間と死」 『韓日語文論集(16)』

한일일어일문학회

\_\_\_\_\_ (2014) 「<自然三部作>に見られる自然認識」 『日本文化研究(50)』

동아시아일본학회

### <インターネット検索>

<http://kotobank.jp/word/和田英作>(2014.3.14検索)

<http://poetry.hix05.com/Wordsworth/wordsworth00.html>(2014.3.14検索)

<http://ameblo.jp/iyashitoaichi/>(2014.3.14検索)

<http://okwave.jp/qa/q2041831.html>(2014.3.14検索)

<http://www.town.moroyama.saitama.jp/www/contents/1290413520362/index.html>  
(2014.4.13検索)

<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/297.html?cat=48>(2014.4.13検索)

<http://www2.ocn.ne.jp/~tsoho/nenpu.html>(2014.4.13検索)

<http://kotobank.jp/word/民友社>(2014.4.26検索)

<http://kotobank.jp/word/国民之友>(2014.4.26検索)

<http://kotobank.jp/word/国民新聞>(2014.4.26検索)

<http://kotobank.jp/word/人見一太郎>(2014.4.26検索)

<http://kotobank.jp/word/国木田独歩>(2014.4.26検索)

<http://kotobank.jp/word/山路愛山>(2014.4.26検索)

<http://www.weblio.jp/宮崎湖処子>(2014.4.27検索)

<http://yumeko2.otemo-yan.net/e757659.html>(2014.5.11検索)

<http://www.inashiki.com/park.html>(2014.7.29検索)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/熊本バンド>(2014.9.3検索)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/加賀千代女>(2014.9.3検索)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/維新の十傑>(2014.9.4検索)

<http://ja.wikipedia.org/wiki/アルフレッド・アドラー>(2014.9.9検索)

<http://kotobank.jp/word/武蔵野>(2014.12.22検索)

## [Abstract]

This dissertation explores background of establishment, structure and characteristics and work world of the Roka Tokutomi's (徳富蘆花) early studies, which is called 'Nature Trilogy (自然三部作)' composed of 『Seizan Hakuun(青山白雲)』 『Nature and Man (自然と人生)』 and 『Seirosyu (青蘆集)』 . This study has its meaning in that it is the first try in Korea so far unstudied.

「Chapter I」 reviews preceding studies conducted in Japan and Korea.

「Chapter II」 explores background of establishment of 'Nature Trilogy' from the perspective of author's progress of growth and the relationship of various influences. Confucian atmosphere of Kumamoto-han (熊本藩), Christian environment and Tolstoy who stayed in the dormitory of Minyu-sya (民友社) exerted an enormous effect on the formation of Roka's thoughts.

Roka as a child who dreamed of free spirit found out a breakthrough of self-liberation in nature under a Confucian family environment where hierarchical order is of prime value. Having missed the opportunity of being a central force of revolution in the dawn of modernity, Kumamoto-han found the ground of its existence by accepting Western culture and technology early and one of them was the establishment of Kumamoto West School (熊本洋学校). Studying in the school, the brothers Roka (蘆花) and Soho (蘇峰) were naturally attracted to Christianity which is the very foundation of Western ideologies and they finally formed a Christian organization called 'Kumamoto band.' The government, judging that this organization is rebellious with its grafting of Christianity into the idea of state, closed down the school. Afterwards, the brothers were transferred to Doshisya School for English (同志社英学校) founded by Jo Niijima (新島襄). In 'Doshisya School for

Talents', their Christian spirit became even more practical and solid.

Under the influence of Kumamoto-han and Doshisya School for Talents which were filled with Christian spirit, Tokutomi brothers came to have their eyes open to democratism and humanitarianism. Christian spirit acquired there was manifested in Roka as socialism and humanitarianism in the sympathy for the weak while it led Soho to advocate democratism. Soho moved back to nationalism from the time when Sino-Japanese War broke out whereas Roka resisted against it, which became parting way and a cause of conflict for the two brothers.

Entering Minyu-sya was a critical turning point in the formation of Roka's thoughts and being able to be close to the spiritual world of Western intellectuals while working as a reporter for Minyu-sya became a valuable asset for Roka. He could have eyes on society during the period. In particular, Roka's work on 'Tolstoy' in '12 literary giants series' planned and executed by Minyu-sya left a colossal trail in Roka's setting of direction for his life, which also became the motivation to go to Russia to meet Tolstoy in person. After returning to Japan, he continued an amicable relationship with Tolstoy by exchanging letters. Furthermore, dreaming 'beautiful peasant (美的百姓)' like Tolstoy, he sustained practical attitude including leading the life of semi-peasant.

The study also investigates the origin of 'sketch lesson' which contributed to the settle of Roka's position as a nature poet and the influence of Western Romanticist writers. Roka was fascinated by the attitude of nature sketch of the painters of 'Barbizon School' among Western Impressionist painters, which gave birth to the work 'nature sketch' and the critique called 「Landscape painter Koro」.

This study pays attention to the influence of classic British Romanticist poet William Wordsworth and American Transcendentalist writer Ralph Emerson. Having had favorable attitude toward French Republicanism, Wordsworth

despaired at a series of events after the French Revolution. Finding communion with the nature and enjoying solitude after being disappointed at humans and society is the very characteristics of Wordsworth's poems. Emerson was a typical writer of Transcendentalism which was one branch of Romanticism. Roka was also interested in Emerson's mystical pantheism.

「Chapter III. Structure and characteristics of 'Nature Trilogy」 analyzes and organizes unique structure and characteristics of individual works, 『Seizan Hakuun (青山白雲, literally means 'Blue mountains and White Clouds')』

『Nature and Man (自然と人生)』 and 『Seirosyu (青蘆集)』. The works contains in common Roka's recognition that "nature is the master and host while human beings are just guests." For him, humans are only a part of Mother Nature who are born from and return to the nature. In addition, he saw nature as embodiment of the Creator, which is similar to Emerson's idea and in line with pantheistic view of the nature which underlies the mentality of the Japanese.

「Chapter IV. The oeuvres of 'Nature Trilogy」 is divided into two parts which are 「Image of water in 'Nature Trilogy」 and 「Perception on nature in 'Nature Trilogy」, and macroscopically analyzes the work. Then follow microscopic analysis and exploration of the two opuscles.

『Heap of ashes is a novel-type writing which shows how helpless human workings are in comparison with those of nature. Although it reveals the pre-modern subject of 'rewarding virtue and punishing vice', it was an important work in his study period which displays humanity and sense of justice unique to Roka by punishing human injustices with the force of nature. 『The daughter of a fisherman』 transcends ultimate humane grief 'death' through the benevolence and generosity of nature and presents a new establishment of relationship between life and death.

It is often said that early works includes prototype for the works later evolving, which is no different in Roka' case as well. 「A pathetic child (可



憐兒)」 in 『Nature and Life』 contains the prototype of later following full-length novel 『Cuckoo bird (不如歸)』 and 『Black tide(黒潮)』, and early 'Nature Trilogy' already conceived the seed of direction for Roka's literary world.



## [한국어초록]

이 논문은 도쿠토미 로카(徳富蘆花)의 초기숙작인 『청산백운(青山白雲)』, 『자연과 인생(自然と人生)』, 『청로집(靑蘆集)』 일명 ‘자연삼부작(自然三部作)’의 성립배경, 구성과 특징, 작품세계를 고찰한 것이다. 이 ‘자연삼부작’은 한국에서 아직 연구가 이루어지지 않은 분야여서 본 연구는 한국에서는 첫 시도라는데 의의가 있다.

본 논문은 「제 I 장」 서론에서 일본과 한국에서의 선행연구를 검토하였다. 「제 II 장」 ‘자연 삼부작’의 성립배경에서는 작가의 성장과정과 영향관계로부터 성립배경을 고찰했다. 구마모토 번(熊本藩)의 유교(儒教)적 분위기와 기독교적 환경, 민유샤(民友社)에서 사숙한 톨스토이 등은 로카의 정신형성에 지대한 영향을 끼쳤음을 면밀하게 살펴보았다.

위계질서가 강조되는 유교적 가정환경 속에서 자유로운 영혼을 꿈꾸는 소년 로카는 자연 속에서 자아해방의 돌파구를 찾았다고 보았다. 또한 근대 여명기 혁명의 중심세력이 되지 못한 구마모토 번은 일찍이 서양의 문물과 기술을 받아들임으로써 존립근거를 마련했는데 ‘구마모토 양학교(熊本洋学校)’설립이 그 중 하나였다. 이 학교에서 수학한 로카(蘆花)와 소호(蘇峰) 형제는 자연스럽게 서구사상의 원류인 기독교에 이끌렸으며 마침내 ‘구마모토 밴드’라는 기독교 단체를 결성하기에 이르렀다. 이 단체가 기독교와 국가를 접목시킴으로써 정부당국은 불온하다고 판단을 내려 학교는 폐교조치를 당한다. 그들은 나중에 니이지마 조(新島襄)가 교토에 설립한 ‘도시샤 영학교(同志社英学校)’로 전학을 간다. ‘도시샤 영학교’에서 그들의 기독교 정신은 더욱 실천적이 되고 공고해진다.

구마모토 번과 도시샤 영학교에 가득 찬 기독교 정신의 영향권에서 로카 형제는 평민주의와 인도주의에 눈뜨게 된다. 여기서 습득한 기독교 정신이 훗날 로카에게는 약자에 대한 연민이라는 사회주의·인도주의로 발현되었으며, 소호에게는 평민주의를 주창하게 했다. 소호는 청일전쟁을 기점으로 해서 국가주의로 나아갔으나 로카는 이에 저항했다. 이것이 도쿠토미 형제로서는 운명의 갈림길이 되었으며 갈등의 한 원인이 되었음을 밝혔다.

민유샤(民友社) 입사는 로카의 정신형성에 있어서 중요한 전기로서 민유샤 기

자(記者) 시절에 서구지성들의 정신세계를 접할 수 있었던 것은 큰 수확이었다. 또 이 시기에 세상을 바라보는 사회적 시야를 얻을 수 있었다. 특히 민유사 가 기획한 ‘12문호 시리즈’에서 로카가 담당한 ‘톨스토이’ 작업은 그의 인생 방향 설정에 커다란 흔적을 남기게 되었음을 밝혔다. 이는 훗날 톨스토이를 만나러 러시아에 가게 된 계기가 된다. 귀국 후 톨스토이와 서신을 교환하는 친근한 교류로 이어진다. 또 톨스토이처럼 ‘미적 농민(美的 百姓)’을 꿈꾸고 반농(半農)생활을 하는 등 실천적 자세를 견지하는 데까지 이어지고 있음을 살펴보았다.

또 로카를 자연시인으로 자리매김하는데 기여한 ‘사생(스케치) 수업’의 내력과 서구 낭만주의 문인들의 영향에 대해 알아보았다. 로카는 서구 인상파 화가 중 ‘바르비종파(Barbizon School)’ 화가들의 자연 스케치태도에 심취되었다. 그것이 일련의 ‘자연 스케치’ 작품과 「풍경화가 코로」라는 평론을 탄생시키고 있음을 밝혔다.

서구문인으로는 영국 낭만주의의 대표 시인 워즈워스와 미국의 초절주의 문인 에머슨의 영향에 주목했다. 프랑스 공화주의에 호감을 보였던 워즈워스는 프랑스 혁명 이후의 일련의 사태에 절망한 것으로 알려져 있다. 인간과 사회에 실망한 후 자연과의 교감에서 치유 받고 고독을 즐기는 것은 워즈워스의 시에 두드러진 특징이다. 에머슨은 낭만주의의 한 축인 초절주의를 표방한 미국의 대표적 문인이다. 로카는 에머슨의 신비주의적 범신론에도 깊은 관심을 보였음을 확인할 수 있었다.

「제Ⅲ장」 ‘자연삼부작’의 구성과 특칭에서는 개별 작품집인 『청산백운』 『자연과 인생』 『청로집』의 독특한 구성과 특징을 분석·정리해 보았다. 이 안에는 공통적으로 “자연이 주인이고 인간은 손님”이라는 로카의 인식이 들어 있었다. 인간은 자연에서 태어나 자연으로 돌아가는 존재로서 대자연의 일부에 불과했다. 또 대자연(大自然)은 조물주의 화신으로 보고 있었다. 이는 에머슨의 사상과도 상통하며 일본인에 내재하는 범신론적 자연관과도 일맥상통하고 있다고 고찰했다.

「제Ⅳ장」 ‘자연 삼부작’의 작품세계에서는 첫 번째 「‘자연 삼부작’에 나타난 물의 이미지」, 두 번째 「‘자연삼부작’에 나타난 자연인식」이라는 주제로 작품을 거시적으로 분석했다. 이어서 소품 2편을 미시적으로 분석·고찰했다.

「갯더미」는 인간의 영위(營為)가 자연의 영위에 비하면 얼마나 무력한가를 보여 준 소설형식의 글이다. 비록 전근대적 권선징악의 주제를 드러내고 있었지만, 자연의 위력으로 인간의 불의를 단죄하게 함으로써 로카 특유의 인간미와 정의감을 보여준 습작기의 중요한 작품으로 살펴보았다. 「어부의 딸」은 대자연의 자애로움과 포용력을 통해 ‘죽음’이라는 인간적 비애를 초월하고 있으며 삶과 죽음에 대한 새로운 관계설정을 제시하고 있다고 고찰했다.

흔히 초기작품 속에는 그 이후 전개되는 작품의 원형이 들어있다고 한다. 로카의 경우도 예외는 아니었다. 『자연과 인생』의 「가련아(可憐兒)」에는 훗날 장편소설로 나타날 『두견새(不如婦)』, 『흑조(黑潮)』의 원형이 들어 있었다. 그 밖에도 이후 로카문학이 지향하게 될 방향성이 초기 ‘자연삼부작’에 이미 배태(胚胎)되고 있음을 고찰했다.



[付録]

※年譜（年齢は数え年による。中野好夫(1984)『蘆花徳富健次郎第三部』年譜参考。）

西暦	年号	年齢	事柄	関連事項
1868	明治元	1	10/25 熊本県葦北郡水俣に生れる。父一敬47歳。母久子40歳。四女三男の末子。	父一敬家督相続する。兄蘇峰は6歳。
1869	明治2	2		1/5 横井小楠暗殺される。
1870	明治3	3	秋、一家で熊本郊外大江村に転居。	
1871	明治4	4		熊本洋学校開設。
1874	明治7	7	竹崎茶堂の私塾日新堂幼年塾に入学。	7/18 原田愛子誕生。
1875	明治8	8		6月、同志社英学校開校。
1876	明治9	9	4月、公立本山小学校に移る。	1月、熊本バンド結盟。 8月、熊本洋学校閉鎖。 10月、神風連の乱。 11月、蘇峰同志社入学。
1877	明治10	10	一家で数ヶ月間、熊本市郊外の沼山津、杉堂などに逃げる。	2～9月、西南戦争。
1878	明治11	11	6月、同志社英学校に入学。	
1880	明治13	13	6月、兄の退学にともない同志社英学校退学後、故郷に帰る。 9月、父の開いた共立学舎に入る。	
1881	明治14	14	母に伴われて教会に通いはじめる。 文章を作ることを日課とする。	
1882	明治15	15	3月、兄の開いた大江義塾に入学。	
1883	明治16	16	一時近所の家に住込みで、養蚕を習わせられる。	蘇峰、家督相続する。
1884	明治17	17		3月、母、受洗。 秋、蘇峰結婚する。
1885	明治18	18	3月、一家数人とともに受洗。 直後に愛媛県今治に移り、約1年4ヶ月の伝道生活がはじまる。	
1886	明治19	19	6月、同志社英学校再入学。まもなく山本久栄と恋に落ちる。	
1887	明治20	20	12月、久栄との破局で同志社英学校を退学し、鹿児島に奔る。暗黒の2ヶ月間。	蘇峰、民友社を創立。

1888	明治21	21	2月、鹿児島から連れ戻され、謹慎生活。 熊本英学校(1888年設立)で教鞭をとる。	
1889	明治22	22	5月、上京、民友社に入る。	
1890	明治23	23	外電の翻訳、雑録欄への寄稿が続く。	1月、新島襄没。 2月、国民新聞創刊。
1892	明治25	25	山本久栄との思い出を「春夢の記」にする。 この頃からトルストイへの傾倒が深まる。	
1893	明治26	26	小篇の発表もかなりあるが、この頃から自然探訪の旅行が頻繁になる。	
1894	明治27	27	5/5 原田愛子と結婚。愛子21歳。	7月、日清戦争勃発。
1895	明治28	28	1月、愛子の両親がチフスで亡くなる。愛子も感染し、夫妻は熊本で4月まで療養滞在。	3月、日清戦争講和。
1896	明治29	29	洋画を習いはじめ、写生旅行に出歩く。 民友社は欠勤ぎみで生活が荒む。	5月、蘇峰、世界周遊に出る。
1897	明治30	30	1月、逗子柳屋に転居。「漁師の娘」執筆。 4月、十二文豪シリーズ「トルストイ」出版。	6月、蘇峰帰国。変節問題が起る。
1898	明治31	31	1月、「此頃の富士の曙」で自然作家として注目される。 3月、『青山白雲』出版。 8月、福家夫人から大山信子の哀話を聞く。 11月、『不如帰』の連載をはじめる。	
1899	明治32	32	5月、『不如帰』の連載終了。 10月、「自然に対する五分時」が好評。	5月、蘇峰は青山南町に自宅を移す。青山草堂。
1900	明治33	33	1月、『不如帰』出版。 3月、「灰燼」連載。『おもひ出の記』連載開始。(1901年3月完結) 8月、『自然と人生』出版。 10月、上京し、原宿に転居。	
1901	明治34	34	5月、小説『思出の記』(『おもひ出の記』を改題)刊行。	
1902	明治35	35	1~6月、『黒潮』を連載。 8月、『青蘆集』刊行。	
1903	明治36	36	1月、自宅を黒潮社とする。 2月、『黒潮』第一篇を自費出版。巻頭に掲げた「告別の辞」が小説よりも大反響。	
1904	明治37	37	文章の発表なし。	2/8 日露戦争勃発。

1905	明治38	38	1～3月、九州旅行。旅先で伯母の危篤を知り、看取る。 8月、富士登山で人事不省。精神革命。 12月、兄や妻に懺悔をはじめ。逗子へ。	3月、伯母竹崎順子没。 9/5 日露戦争講和。 国民新聞社焼き討ち事件。
1906	明治39	39	1月～3月、伊香保滞在、夫婦間の危機。 4月、120日間の順礼の旅に出発。 6/30～7/5 トルストイ邸訪問。 12月、『順礼紀行』出版。	3/11 愛子受洗。
1907	明治40	40	2月、東京府北多摩郡千歳村粕谷に転居。	4月、一敬受洗。
1908	明治41	41	9月、兄の末娘鶴子を養女とする。	6月、国木田独歩没。
1909	明治42	42	菜食主義をやめ、トルストイから脱出。	
1910	明治43	43	9月 北海道、関西旅行。	6月、大逆事件。 11/20 トルストイ没。82歳。
1911	明治44	44	2/1 一高での演説。「謀叛論」	1月、大逆事件の判決と死刑執行。
1912	明治45	45	主な執筆活動なし。	7/30 明治天皇崩御。
1913	大正2	46	3月、『みみずのたはごと』出版。 9～10月、夫妻、鶴子とともに九州、満州、朝鮮旅行。帰途、京城で兄と半永久的絶交。	2/10 国民新聞社襲撃される。
1914	大正3	47	父の見舞いも葬儀も出ず、鶴子を兄に返す。 3年間の自己閉門始まる。 12月、『黒い眼と茶色の目』出版。	5/26、一敬没。93歳。 6月、サラエボ事件。第一次世界大戦勃発。
1915	大正4	48	6～7月、愛子転地療養のため伊香保滞在。	3月～6月、愛子重病。
1916	大正5	49	ほとんど発表なし。	
1917	大正6	50	3月、『死の蔭に』出版。1913年の旅行記。	2/15 レオ・トルストイ2世粕谷訪問。
1918	大正7	51	粕谷邸を恒春園と命名。 4月、『新春』出版。	米騒動。 世界大戦終結。
1919	大正8	52	1月、夫妻で世界周遊旅行に出る。	2月、久子没。91歳。
1920	大正9	53	3月、帰国。紀行『日本から日本へ』の執筆にとりかかる。	
1921	大正10	54	3月、『日本から日本へ』出版。	
1922	大正11	55	10月、叔母矢島楫子を訪ね、前半生の懺悔を迫る。	

1923	大正12	56	4月、『竹崎順子』出版。	9/1 関東大震災。 12/27 虎ノ門事件。
1924	大正13	57	1月、最後の大作『富士』起稿。 9月、『太平洋を中にして』出版。 10月、「難波大助の処分に就いて」執筆。	
1925	大正14	58	5月、『富士』第一巻刊行。 矢島楫子非難の記事を発表。	6月、矢島楫子没。93歳。
1926	大正15 昭和元	59	2月、『富士』第二巻出版。 健康がすぐれず、歳末、千葉県勝浦町串浜に 転地療養。	12/25 大正天皇崩御。
1927	昭和2	60	1月、『富士』第三巻出版。病状悪化。 7月、伊香保に転地。(10回目) 9/18 兄一家と15年ぶりに和解対面するが、 同夜遅く永眠。	9/13 横井時雄没。



## ※引用文参考訳文

- II-① とにかく、戦後の日本の世の中に警告を発してリードしていこうと、社内の誰も彼もがいきりたって活気があふれている中に、昔と同じデスクで、昔と同じように翻訳を受け持つ熊次は少しも意気はあがらなかった。それ相応に動く筆を持ち、書きたい意思はありながら、彼は書くものが無かった。あせればあせる程、彼は何事も為し得なかった。  
(p.20)
- ② 彼は十分に自然を愛し、自然を理解し、自然に同情を持ち、それに加えて生きた自然を伝えることに努力した。自然は生きている。一秒として同じではない。(中略) できるだけこの生きている、変化のある自然の意味、自然の詩、自然の情態、自然の姿をありのままに生き生きと描いた者である。(p.28)
- ③ 彼は自然の子、絵筆を握った詩人である。(中略) けれども彼のまことの教師は自然であった。ワーズワースのように彼の真実の画室は野外にあった。(中略) 画家の心を養い、腕前を磨くためには広大な自然の学校に匹敵するものはない。(p.28)
- ④ 千金を持っていないといっても、万金にも換えることの難しい一冊の小型のワーズワース詩集は私のかばんの中に横たわっていて、まるで故郷の山より故郷の秋の野を眺めたような風景を眺めながら、白砂がざくざく音をたてる道を足の向くままに下りていくこの時の快樂 (p.29)
- ⑤ 私は煙を愛する。田家の煙を愛する。高い所に腰掛けて、遠い村と近くの集落の煙が互いに呼応しながら、悠々と天に上っていくのを見るたびに、心はまさしく楽しい。けれどもちまたの汚濁した波は勢い良く流れて、村落におよび、農村の素朴な人情は次第にすっかりなくなってしまうおうとしている。賭博、淫風、奢侈、遊惰、利益争いの病原菌が殆んどの家庭に侵入しようとする (p.31)
- III-① 東の空はいつしか燃えるような朱紅色になり、見ている間に一分ばかり流れて出てくるものがある。眩しくて見られない。ああこれは海から日が昇る様子なのだなあ。本当に瞬間もない。あっという間に、分からず、眉から眼、鼻から口という風に日が上って、今にも水平線を離れるのかと思うと、一すじの光がゆらゆらと万里の太平洋を走って、たちまち眼下に見える磯に到着する頃は、私が居る室内がぱっと明るくなって、行灯の光が白く

なった。(p.38)

② 十月二十五日が来た。熊次(注:蘆花)の二十九歳の誕生日である。(中略) ああ、私は長い間奴隷であるよ。兄の奴隷であった。情欲の奴隷であった。あらゆるものの私は奴隷であった。今後、私は再び決して奴隷ではあるまい。何人であっても、何ものであっても、私の自由を邪魔するものがあれば、即ちそれは私の敵である。それから熊次は頭がすうっと軽くなるように思えた。(p.41)

③ 「題して自然と人生と言っても、自然と人間の関係を科学的に論ずるのではなく、ようすに著者が眼で見て、耳で聞いて、心に感じて、筆に従って、ありのままを写した自然及び人生の写生帖のそのいくつかを公にしたものだけである」以上は著者が自ら言う所である。

自然を主人とし、人を客とし、以前にしたためた原稿からよりぬいたものを選んで、新作の秀作を集めた小品の記録文、短編の小説、無韻の詩とも水彩画とも言えるもの、おおよそ百篇を一巻に収める。夏の暑さをしのぐ書籍にはいかにもふさわしいだろう。

(p.43)

④ 自然を主人として、人間を客とする、小品の記録文、短篇の小説、おおよそ百篇を一巻に収めた。日常の机の近くで、あるいは木陰や海辺で、願わくは一時の清風をもたらし、静かに思索する際のよき友となるだろう。(p.43)

⑤ 試みにある大河のほとりに立って、(中略) 無限の空間を流れ流れて、限りなく流れ行く時の流れを想うのである。(中略) ローマのいわゆる大帝国もこのように過ぎてしまったのではないか。(中略) アレキサンダー大王、ナポレオンも、この通りであつた。ああ、彼等は今どこにいるのであろうか。(中略)永遠の二字は、海よりもむしろ大河ほとりにあつて思う。(p.45)

⑥ ひどく激しい風雨の来襲を待つ様子は、ワーテルローの戦いもこうであつたと思えて、気分が沈んで悲壮感があり、大自然の威力が厳かに身にしみる思いがする。(p.46)

⑦ 大河を隔てて呼び交わすこの鶏声は実によい、チェルシーの賢人とコンコードの哲人とは、実にこのように大西洋を隔てて呼び交わしたのであろう。(p.46)

⑧ 日常生活にあくせくして、しかも心は他に抜きん出て果てしない天に向かう偉大なる人物は、実にこのようであらう。自分は上州に行くたびに、山がこのようにささやく様に感じるのである。(p.46)

- ⑨ ああ百合よ、二千年前の昔、ユダヤの野に咲き誇ってキリストの眼に触れ、限りなき真理を伝えるきっかけとなった百合よ、来たるべき新しい国の花園に咲く百合よ、どうかお前の持つ清い香りの半分を分けて私に与えておくれ。 (p.46)
- ⑩ 今起きて来た村人が、白い息を吐きながら川に下りて、川の水をくんで口をすすいで顔を洗う。それから遥か向こうに見える筑波山の方を向いて、合掌して拜んでいる。ああ本当に良い拝殿だと自分は思った。 (p.47)
- ⑪ 画家の人格は高潔であるべきだ。画家は煩惱を起こさせる欲望に誘われないで、超然としてひたすら心を一つの意識の向う所に集中させなさい。彼の心を嫉妬や不平から解放させて、彼に世間の好き嫌いにたいしては無関心にさせ、ただひたすら美と真とに向かわせなさい。 (p.50)
- ⑫ 仕事は真に人物の影であって、画家がほんのわずかな時間にも描く画の一枚一枚は白日のもと世間の人々に自分自身の心の奥底をさらけ出す懺悔録であると思わざるをえない。つまるところ詩は詩人、画は実に画家、豊かな田はすばらしい稲を結び、澄んだ泉からは清水が流れ出す。コロオの画はコロオ自身を描いたのである。 (p.51)
- ⑬ 暗闇の中で迷う人々に、願くばおまえ(慈悲心鳥)が大いなる慈悲の光を照らしてくれ、神様。 (p.55)
- ⑭ ああ、私は昔の一度の失敗から、自分で焦って道にはずれた幸運を得ようとした。すでに零落の淵に足を踏みかけていた。幸運にもその淵から免れたのは、まさに天の恵みである。私はもはやたやすい幸運を得ようとするまい。成功を焦るまい。遠回りであっても坦々とした正しい道を足に任せて行こう。 (p.56)
- ⑮ 終りには薄暗く日が暮れてしまう様子を望み、望む毎に見る毎に、いよいよ山に霊があると思った時、今日はまたうっとり笑うようなその山容を望んで、愛情が骨に染みる感じがして、このように心に叫んだ。 (p.57)
- ⑯ 同情心のない詩人、いわゆる真成の平民的詩人ではない詩人は、決して千年にわたって伝わらないと思い、(中略) 共に平民的詩人として挙げれば、むしろ松尾芭蕉こそワーズワースには似ているだろう (p.59)

IV-① 或は海岸に出て遥に相州の山を望み、波がぶつかりあい、渦巻く水の面を一心に眺めて、或時は墨よりも黒い深夜に青山の墓畔に佇み、隠密の雲は日々松井と世の中の

間を隔てて行った。(p.64)

- ② 暮れ行く秋の風が身に凍みて品川の海が幾万もの愁を積み重ねる頃、ある日船宿から一艘の小舟を借りて沖に漕ぎ出た者がある。日は落ちて舟は返らない。夜が明けても舟は帰らない。三日後あちこち尋ね回った船宿の男が、大森沖の海苔柵に流れて引っ掛かっている一隻の小舟が波に弄ばれて揺れているのを見つけた。舟には帽子と履物があった。舳の方には一巻の小形の書物があった。半分引裂かれたレースの枝折がはさまれていた。持ち主は何処だ。品川の海の波が深くその秘密を語らない。(p.65)
- ③ 滝の大きさは日光華厳の滝の半分もないが、瀑壺は大円筒形をして、黒川一川の流れが急転直下するその勢いが此に籠もれば、その凄じさは言い表せない。この川の上流から材木を流すと、水勢が烈しいため材木が槍のように潭底をよく貫くことがある。(中略) 底には材木が林のように突き立っているという。(p.66)
- ④ 声の聞える方に舟を漕いで行くと、どこまで行っても果てしない朧月夜の湖で、人影もない。よく聞くと、その歌声が水の底にあるようでもあり、空にあるようでもあって、しばらくの間迷っていたが、ついに思い切って舟を岸に返すと、その歌声は遠くなったり近くなったりしながら、長い間幽かに響いていたということであった。(p.68)
- ⑤ 私は逗子に住んだ。昼は富士の雪が降ったあとの晴天を仰ぎ、夜は相模灘の海鳴りを聴き、心は自然に満ちて限りない平和を得ると共に、写生は少しづつ私の眼の膜を切って、不思議な自然の断片が時々ちらりに見える様になった。(中略)じっくりと見る程、見て知る程、昔自然——其れも唯おぼろ気に——の一部分に限られた同情は、しばらくして人に向った。私は日記に書いて曰く、「この三十年の間、身は神の大地にあってこれを見ず、耳は自然の音楽人生の歌も聴かず、ぼんやりとして半生を過ごしてきた。今や私を呼び醒す声に少し目覚めて来て眼を開けば、新しい天地、新しい世界に生れ出た感がある。(p.72)
- ⑥ ひたすら私が以前に見えたと思った自然の、見れば見る程宏大で不可思議であり、これに対すれば眼が眩み手がおのきふるえるのを覚えるのみだ。(中略) ああ、私は知らなかった。何も知らなかったのだ。私が自然を見ると言ったことは、自然を見るのではなくて夢を見たのである。(中略)私は感じて、思わなかった。夢みて、(事実を)見なかったのだ。(真実を)知らないのに、言ったのだ。(p.76)
- ⑦ ああ、私が眼を開いたのは遅かった。けれども「過ちを悔い改めるのに遅いということは

ない」願うところは無心になって赤ん坊になって、謙虚な姿勢で造物主の作った神秘的な自然界の1ページを開けよう。(p.76)

- ⑧ 夏から冬にかけては、人の背丈よりも高い蘆が茂りに茂ってどこに家があるのかもわからないが、このあたりを通っていると、蘆の中から突然アヒルの声が聞こえたり、赤黒い網がぬっと頭を出していたり、または、一筋の煙がゆっくりと空に上って消えて行くのを見ることがある。しかしそれよりもはっきりとわかる標しがある。それはこの蘆の中から湧いて来る歌の声—万作の娘お光が歌う歌であった。(p.78)
- ⑨ 雨はやんで、空は星だらけだ。月も出ている。(中略) 遙か彼方に北の方を眺めると、いつも見る霞ヶ浦が突然に浮き上がったように、水面が果てしなく広がって遙か向こうに見える天空まで水に浸かって、見渡す限りの陸地は全て小さく沈んで、唯一遙か向こうに筑波山が月影に映えて青く見えるだけだ。更に南の方を見ると、北利根川、横利根川、新利根川の水が一カ所で落ち合つて、十六島はどこにあるのか影も見えない。ただ水の勢いがみなぎって果てしなくひろがり、すさまじい勢いで南の方に押して行く音が荒海の音のように聞える。(p.80)
- ⑩ このような風の夕べに、落日を見るこの身は、あたかも大聖人の臨終に仕えている感がある。莊嚴の極み、平和の至り、凡夫も靈光に包まれて、肉が融け、靈は独り姿勢を正して永遠の浜に佇んでいるように感じる。(p.82)
- ⑪ 試みにある大河のほとりに立って(中略) 無限のスペースを流れ流れて限りなく流れ行く時の流れを想うのである。(中略) ローマのいわゆる大帝国もこのように過ぎてしまったのではないか。(中略) アレキサンダー、ナポレオンも、この通りであった。ああ、彼等は今どこにいるのだろうか。(中略) 永遠の二文字は、海よりもむしろ大河のほとりにあると思う。(p.82)
- ⑫ 大河を隔てて呼びかわすこの鶏声は実によい、チェルシーの賢人(トーマス・カーライル)とコンコルドの哲人(ラルフ・エマソン)とは、実にこのように大西洋をへだてて呼びかわしたのであろう。(p.82)
- ⑬ 日常生活にあくせくして、しかも心は他に抜きん出て果てしない天に向かう偉大なる人物は、実にこのようであろう。自分は上州に行くたびに、山がこのようにささやく様に感じるのである。(p.82)
- ⑭ ひどく激しい風雨の来襲を待つ様子は、ワーテルローの戦いもこうであったと思えて、気

分が沈んで悲壮感があり、大自然の威力がおごそかに身にしみる思いがする。

(p.83)

- ⑮ 蘆の間にある水辺は、ただイナ、ハゼ、エビなどが好んで棲む所であるだけでなく、ゴイサギ、シギなどもここをよい隠れ家としている。私が堤防の上に立って、しばらく休憩していた時、遠くの方に一発の銃声が響いたのだが、やがてシギかモズの類であろうか、驚く様に鳴いて、ぱっと私の頭上を過ぎ、たちまち蘆花の中に入った。あとは静寂になり、ただ限りなく続く蘆花がもの寂しく風に揺れる音がするだけだ。(p.84)
- ⑯ 雪はまだ融けない。地面は凍り、水は氷り、一切の物は口を閉じて、ほとんど生気を見ることができない。(中略) 雪を帯びる茅ぶきの家の影が寒田にとどまり、田も半ば氷っていた。林には波がほえるような音がする。「冬」の声である。残雪を帯びる枯れ蘆ががさがさと鳴る音、乾き果てて、枯れ果てて、私の魂を爪で引き裂くような心地がする。春はついに来ないのか。村のはずれには、女がいて、雪をかき分けて、冬野菜を摘んでいる。村里には紅の椿が咲き、梅花もちらほら咲いている。(p.85)
- ⑰ 夕方浜辺に立つと、中空に数カ所火があるのが見える。星にしては赤すぎるし、漁火にしては位置が高すぎる。これは何であろうか。ああこれは伊豆の山を焼いているのだ。昼見れば、海の彼方に、あちらこちら線香の煙のようにほのかに見え、夜はこのように紅色に見えるのだ。山焼きの火か。山焼きの火か。海の彼方にも人が住んであの火を焚くのか。これは海の向こう側に住む「人」が十里の海を隔ててこちら側の「人」に生活のたよりを伝えるために焚く烽火ではないだろうか。(p.85)
- ⑱ 海は岩の彼方に帯の幅よりも細くせまってきて、たちまち深緑色の波が天空に映えるかと思えば、たちまち白く光って、空と一つになろうとする。春の海に帆かけ舟が2、3隻、遠くに見える伊豆の山をかすめて過ぎて行く。(中略) 風が止んで、小舟が中流で止まると、子供等が石を投げてこれを追いやる。唾で少し年上の子が、その中に混じって立っていて、自分の浮かべた舟がうまくあちらの岸に着いたのを、他の子供の着物の袖を引っ張って指さして見せながらにこにこ笑っているのも、あわれた。(p.86)
- ⑲ 「自然」は私の初恋であった。多くの初恋は、泡のように消えないことはまれである。ただひとつ私のこの初恋は、死に到って確実に終わるべき恋である。(p.87)
- ⑳ その慰めといたわりを自然の懐に求めた。自然の懐はやさしい母の懐のようにあたたかくないとしても、慈しみ深い母の懐よりも自然はまた大きく、その愛も変ることはないと感じてい

た。(p.87)

- ㉑ 今まさに自然はわずかに(自然を見る)眼が開き初めようとする私に教えようとして教わるべきことの多さに困惑した。昔、私はタニシ(貝)のように自分の殻に閉じこもって憂鬱であったけれども、今は火のように激しく人を恋う。(中略) けれども、私は決して急がず、少しずつ歩いて、いつかはこの小児の私自身を古い衣のように脱ぎすて、自然を正視して、自由に人を愛する時があることを信じる。(p.87)
- ㉒ 十九年は一瞬に過ぎた。あの恐ろしかった一夜に、殺した者も、殺された者も、今は青塚の下に永眠している。世の中は文化が発展し、人は利口になり、それにしがたって軽薄になり、臆病になり、あの恐ろしく頑固で、恐ろしく真摯で、恐ろしく熱心だった神風連というものは、旧時代の昔話になってしまった。(p.92)
- ㉓ 賊軍と言っても、鬼ではなかろうと思ひながら童(注：蘆花自身)はさらに歩いて行くと、向こうから歩いて来る男があった。(中略) そばを通りすぎる童に手に持っている桜の枝を与えて、「恐ろしいだろう? はははは」と笑い捨てて去って行った。(中略) あの桜をくれた朱鞆の男は何と言う男だろうか。どうなったのだろうか。はっきりとわからない。(p.92)
- ㉔ 勝てば官軍、負ければ逆賊の汚名を着せられて、思い出せば過ぎ去った二月に降り積む雪を蹴散らして城を出発した一万五千の健児も、あちこちで傷き、死に (p.93)
- ㉕ 「逆賊? 西郷先生を逆賊? 一逆賊と言うのは、役人です。大久保の奴です。天皇をさし挟んで国家の中心人物を一」(中略) 「勝敗は時の運です。」(p.93)
- ㉖ 当主の久吾は今年四十七歳、若かった時は漢学を学び、剣の腕は二刀流を修め、気性の激しい性格だったが、昨年から酒風症で両脚の自由を失ってから、めっきり気が弱くなって(中略) 奥様は名前をお由どのと呼ばれて、(中略) 虫も殺さないような人の良い奥様だ。(p.94)
- ㉗ 二男の猛は、額が出て眼はくぼみ、(中略) 知恵の塊、意地の化物、にらめば相手を貫き、笑えば凍ったようで、言葉数は少なく、多くの事を企てた。趣味はまさしく父の正統をひいて、四書五経に通じており、挙げ句の果ては馬具にも西洋式を嫌ったうえに、鬻もつい何年か前まで頭の上にあった。末弟の茂は (中略) 早くも学問のすすめを読み、自由の理について考え、ついには東京の新聞を読んで、(中略) まだ若いのに憂国に明け暮れる。とうとう四月には置手紙を一通残して(中略) 血気盛んな者たちと西

郷軍に加わった。(p.95)

- ㉘ 兄弟三人、最もよく食うのは覚、謀るのは猛、熱するのは茂で、空気と水と火が名前を覚、猛、茂に変えて、この上田の家に顕われたのだ。(p.95)
- ㉙ 「虫が食い、錆ついて腐り、盗人が盗む所のこの世に、財宝を蓄えることのないように。虫が食い、錆ついて腐り、盗人が盗まない所のあの世に、財宝を蓄えるべきだ。それはあなた方の財宝のある所に、心もまた必ずあるからである。」(p.97)
- ㉚ 天地が息をこらして見守るようにひっそりとなったと思うと、たちまちつむじ風が起り暴風がひとしきり吹き荒れて家をふるわせた。戸や障子がかたがたとはためいて、砂利か木の葉がばらばらと雨戸に打ち付ける音と瓦の飛ぶ音が枝をもぎとられた老楠の悲鳴のような音と調和して、もうこの世の終わりではないかと危ぶまれた。(p.98)
- ㉛ 「ほほほほ、明るい、明るい、茂、茂、茂、もう赦してくれるかい？何、まだ『おっかさん、あなたも』って？言うのよ、よ、赦しておくれ、おっかさんの乳を飲んだ昔の茂になっておくれ。ほほほほ、明るい、明るい、さ、茂、どんどやきをしましょう、どんどやき」(p.98)
- ㉜ 焔の中に包まれた老楠の葉は焦げて、幹はじりじりと脂を流して、おびただしい楠の臭いを放ちながら火の竜のように燃えた。(p.99)
- ㉝ 今はただ、三百年の老楠がまるで大きな松明のようにふつふつと音をたてて烈風に燃えて、(御屋敷の)末路の闇を照らすだけだ。(p.99)
- ㉞ ひとしきり激しく吹く風に、燃えに燃えた大楠は、耐えられなくてめきめきと音をたてて裂けた。しばらく空中にゆらゆら動いていたが、やがてものすごい地響きをたててどろどろと灰燼の上に倒れた。火の粉まじりの灰がぱっと空中に飛んで、雨のように如く舞い落ちた。「灰だ、灰だ、御屋敷が灰になった、灰に！」(p.99)
- ㉟ 私は今まで多くの湖を見たが、このように気分も晴々として心ゆくばかりの景色を見たことはないと思う。(中略) 今では何も遮るものもなく、上に空があり、下に水があるその間に男体女体の峯が二つ並んで悠然と立つ上品な山を見るのである。前には唯筑波の双峰だけが見える。(中略) 時はちょうど小春の季節、湖上の天はのどかに晴れて湖の放つ光は鏡のようだ。筑波の双峯はまるで今水から出てきた仙男仙女のようである。山はまぶしそくに朝日に向って、表面を薄紅に染めながら、悠然として澄んだ水に映す。私は未だかつてこの山のように柔らかな宝石のようなものを見たことがない。考えてみると、



筑波山といい、加波山といい、どの山も長い年月の間、激しい人間世界における出来事の変化を経たにも関わらず、山はどうしてこのように穏かなのだろうか。(p.101)

㉞ 家のまわりにサザンカの生垣があるものが多く、紅色や白い花が生垣と地面に半々咲いている。花の強い香りが立ち込めて、何処ともなく小鳥が鳴いて、別世界に入るような心地がする。またミカンの樹を植えている家が多く、黄色の玉のような果実がたわわに実り、緑の葉に映っている様子は、眼も醒むばかりである。(p.102)

㉟ 秋の夕日が西の空に沈んで、紺色になった馬掛の鼻から水鳥が二、三羽すと金色の空を筑波山の方へ飛んで、高浜・麻生・潮来の一帯が薄紫色になって、十六島の上空に半月がさびしそうに出て、浮島の黄色く枯れた蘆の根元に紅色の水がゆらゆらと流れる時分、空中から湧いた清い声が秋の夕べの静まりかえった空気を破って、断続的に聞える音波が急に高くなったり低くなったりしながら全ての蘆の葉を震わして、次第に霞ヶ浦の水面に響いて行く時は、ワカサギ漁から戻る島の勇敢な男も身震いして舵を停めた。実にこの歌こそは浮島の名物であった。(p.102)

㊱ 「それ、土産だ」と懐から取出したのを見ると、数え年で一歳の美しい女の子だ。「どうしたんですか、この赤子は」「これか、これか、これは……婆さん、筑波山の神さまに御礼を言いなさい」(p.103)

㊲ ひょっとすると唾ではないかと万作夫婦が心配した位、口をきかない。そのかわりよく物を見る、よく聴いて居る。(中略)鳥を非常に愛して、よくいろいろな鳥の鳴声を覚えて、スズメやカラスを見ると、お光は直ぐ両手を羽の様にひろげて、飛ぶまねをする。(中略)三つ四つの頃から、お光は口をきかない代わりに、よく歌った。実に清くて鈴の音の様な声をもっている。家にいても、外にいても、遊んでいても、必ず何か歌っている。誰かが教えたというわけでもなく、一人で歌う。(p.104)

㊳ 誰が心を育むのであろうか。お光の身体は万作夫婦の手で育ったが、お光の心を育て上げたものは筑波山と霞が浦だ。山は天気予報、水は魚類の動静を見る以外には、霞が浦や筑波山がどうなっているのか全く関心もない万作の眼には何も見えないが、お光の眼には、四季刻々と移り変わる景色がどれほど面白く珍しく見えたであらうか！(p.104)

㊴ 名前の通りに磨かなくとも光るほどの美しさだ。雪よりも色白の肌に、髪はほつれているがつややかだ。紅梅のような唇は愛らしく、眉は細いうえに、何よりもその眼は玉とも露とも

秋の水ともたとえようのないほど澄んで美しい。(p.105)

- ④② 島の次郎八という漁師が、ある朧月夜の夜遅くにわかさを釣って帰る時、かすかに聞いた歌の音が、全くお光の声の様だった。耳を澄して聞くとまさしくそれに違いない様だから、次郎八は声をたよりに舟を漕いで行った。しかしどこまで行っても果てしない朧月夜の湖で、人の影もない。よくよく聞くと、その歌声が水の底にあるようでもあり、空にあるようでもあつて、しばらくの間迷っていたが、ついに思い切って舟を岸に返すと、その歌声は遠くなり近くなり、長い間かすかに響いていたということであった。しかしそれは水鳥の声だと言う者もあった。(p.107)
- ④③ もし、ある明月の夜に出会うとしよう。(中略) この時漁夫が月に乗じて、一曲の潮来の古い民謡を歌っている声がかすかに空中に広がるのを聞けば、諸君が断腸の思いに襲われまいとしてもかなわぬことだ。(p.108)
- ④④ まるで太陽の使いのような渡り鳥の群れが鳴きながら海の上をかすめて飛んでいくと、大海のすべての波は爪先立ったように東の方を振り向いて、一種待つようなさざめき——声なき声が四方に満ちる。(p.108)
- ④⑤ 朝日は空高く登り、たった今息栖の宮の梢を離れたところである。その梢から飛び立った一羽のカラスが朝日を背負って、まるで日の出を告げてまわる神の使いのように、澄みきった朝の空気の中で羽ばたいて、小見川の方へ飛んで行く。小見川は未だ青い朝霧の中で眠っている。(p.108)